本田透
HONDA TORU
脳内恋愛のすすめ
角川学芸出版

脳内恋愛のすすめ

本田透
HONDA TORU

角川学芸出版

脳内恋愛のすすめ

脳内恋愛のすすめ

目次

はじめに

脳内恋愛とはなにか？　アキバの「萌え」のことか？　大多数の読者はまずそう思われてこの本を手に取られただろう。

しかし、この本の主張は違う。この本は、

「恋愛とはすべて脳内恋愛である」

と主張する。

脳内恋愛ではない恋愛など、人間の世界にはそもそも存在しないのだ。

脳内にしか存在しないものを脳外に求めるから、現代人は終わりのない恋愛中毒に陥り、不幸になった。

だから今こそ「脳内恋愛」の価値を復権しなければならない。

それが、この本の主張である。

だがしかし、僕は「ニューアカデミズムの死」をすでに宣言しているので、この本には、僕の本は常にそうであるが、難解な思想ごっこ、無意味な言葉遊びのたぐいは一切登場しない。かわりに本書では「歴史的視点」と「科学的視点」の二つの視点から脳内恋愛についての考察をしてみた。これが僕がものを考える時の基本的なスタンスである。

この本はまず「Ⅰ　理論篇」において現代の恋愛文化のルーツを歴史的・文化的に辿ってみせる。日本の現代恋愛は近代ヨーロッパから明治時代に輸入された外来文化であるが、そのもともとの近代ヨーロッパ恋愛がどのようにして生み出され、なぜ流行したのかという問題を歴史の観点から読み解いてみるのが「Ⅰ　理論篇」の前半部分にあたる。すると、近代恋愛のルーツがそもそも「物語」や「宗教」であることが明らかになってくる。恋愛は脳内恋愛として出発したが、近代唯物論の勃興とともに「脳外恋愛」こそが恋愛なのだと「誤解」されていったのだ。

「Ⅰ　理論篇」の後半では、恋愛という現象を脳科学の観点から構造的に俯瞰してみた。もちろん脳科学は僕の専門外であるし、まだまだはじまったばかりの科学なので類推と憶測と比喩ばかりの内容ではあるが、「歴史的視点」と「科学的視点」の両者が揃ってはじめてなにがしかの評論なり現代思想なりと言えるというのが僕の信念なので、敢えて書いてみた。いずれは脳科学の進展に基づいて大幅に改訂しなければならないだろうが、「恋愛とは何か」という思考の方向性を指し示すという意味はあるだろう。

「Ⅱ　評論篇」では、西洋の古典と現代日本のアキバ系コンテンツを恋愛物語構造の観点などから比較する。すると、意外なほどに両者が似通っていることが判る。この章は「Ⅰ　理論篇」前半部を補塡するための章である。わりと「遊び」の部分も多いし、テーマごとに短く区切ってあるので、まずはこの章からぱらぱらと読んでもらえると良いかと思う。

「Ⅲ　実践篇」は、筆者自身の一〇代から二〇代にかけての脳内恋愛および脳外恋愛体験の変遷を記述してみて、現代人のひとつのサンプルとして提出してみた。この章は編集者の意図で書かされたようなものであるが、脳内恋愛がいかにある種の人間にとって欠かせないものであるかという証拠にはなるかと思う。

なお、本書のⅡとⅢではアキバ系コンテンツの固有名が当然登場するが、これまでの僕の本とは異なり一般の人が読みやすいよう、なるべくオタク専門用語は使わないように配慮した。

I

理論篇　恋愛とは脳内現象である

❖恋愛がセックスにすり替えられた現代社会

　終戦直後の数年は、つらい激動の時期だった。工業生産指数は最低を記録し、食糧配給制が廃止されたのはようやく一九四八年になってからだった。しかしながら一部の富裕な階級では、すでにアメリカ経由の、大々的なセックス娯楽消費の最初の兆しが現れていた。それが以後、数十年間のあいだに国民全体に広まっていくことになる。

今でもなお、ある程度まで、家庭は生き残っている
（無神論者たちのただなかに輝く信仰のきらめき、
吐き気の奥底に輝く愛のきらめき）、
わからないのはただそれが
どうやって輝いているのかということ。

不可解にしくまれた仕事の奴隷であるわれわれ、
自己実現と人生にとって唯一の可能性、それはセックス

（ただしそれもセックスが許された者だけの話、セックスが可能な者だけの話だが）

思春期の少年ほど馬鹿で攻撃的で、耐えがたく、憎しみに満ちたものは想像もつかない。とりわけそれが同じ年の他の少年と一緒になっているときには最悪だ。思春期の若者というのは怪物でありかつ馬鹿者なんだよ。その画一主義たるや信じがたい。それは人間の最悪の部分が突然、不吉な結晶化を遂げたようなものさ（しかも子供時代を考えてみれば、予想もつかないことだ）。とすれば、セクシュアリティが絶対悪を及ぼす力だということに疑いの余地などあるだろうか。

唯物主義と近代的科学を生み出した形而上学的変動は、二つの大きな結果をもたらした。合理主義と個人主義だ。ハックスレーの過ちはそれら二つの結果のあいだの力関係を測り損ねたことにある。とりわけ、死の意識が強まることによって個人主義が高まることを過小評価したのは彼の過ちだった。個人主義からは自由や自己意識、そして他人に差をつけ、他人に対し優位に立つ必要が生じる。『最良の世界』に描かれたような合理的社会においては、闘いは緩和されるかもしれない。空間支配のメタファーである経済的競争は、経済の流れがコントロールされる豊かな社会ではもはや存在理由を持たな

い。生殖という面からの、時間支配のメタファーである性的競争は、セックスと生殖の分割が完全に実現された社会ではもはや存在理由を持たない。しかしハックスレーは個人主義のことを考えに入れるのを忘れている。セックスは、ひとたび生殖から切り離されたなら、快楽原則としてではなくナルシシズム的な差異化の原理として存続するということが彼には理解できなかった。富への欲望に関しても同じことさ。スウェーデン流社会民主主義モデルが、ついに自由主義モデルを凌駕できなかったのはなぜなのか？

それが性的満足の領域においては試みられることさえなかったのはなぜなのか？　近代科学によって引き起こされた形而上学的変動が、個人主義化、虚栄心、憎しみ、そして欲望をもたらしたからさ。欲望というのはそれ自体―快楽とは反対に―苦しみや憎しみ、不幸の源なんだ。これはあらゆる哲学者たちが―仏教徒やキリスト教徒だけでなくその名に値する哲学者たちはみな―知っていたことであり、説いたことでもあった。

（ミシェル・ウエルベック　野崎歓訳『素粒子』）

ミシェル・ウエルベックは一九九八年にブリュノとミシェル・ジェルジンスキという二人の兄弟を主人公とした小説『素粒子』を出版した。

この二人の兄弟は戦後ヨーロッパに生まれ育った。

兄ブリュノは学校で虐(いじ)められ続け、作家や詩人になるという夢を果たすことなく学校の

教師になる。しかし、セックスに取り憑かれている（取り憑かれているだけで、モテない）ブリュノは、うっかり教え子の女生徒に欲情してしまい、そこから先は転落の人生を辿る。

弟ミシェルは、学生時代、幼なじみのガールフレンドに告白することができず、目の前でマッチョ男に彼女を寝取られてしまう。以後、彼は童貞科学者として人間のＤＮＡその他の研究に没入する。長じてから、七〇年代から八〇年代にかけての様々な男とのセックスを通じてボロボロになってしまった元ガールフレンドと今さらながらによりを戻すが、彼女は若い頃の放蕩がたたったのか身体を壊して死ぬ。一人残されたミシェルは、自分の研究を完成させて自殺する。

ブリュノは「恋愛できない文系男」を代表したキャラクターであり、ミシェルは「恋愛できない理系男」を代表したキャラクターだ。この二人の兄弟は、現代に生きる二種類の対照的な男なのだ。

これまで、女にモテない男や恋愛できない男が、どうして社会の下部構造に押し込められ、周囲から嘲笑されたり自分で自分を責めたりしなければならないのか、という問題を「社会問題」として真剣に考えた知識人は、日本からは現れなかった。知識人という人種もまた「知」というファッションによって女にモテようとあがく「恋愛したがっている文系男」の群れにすぎなかったからである。

しかし「恋愛できない男女」の問題が社会問題だということは少し考えれば誰にでも判る

ことで、その原因は戦後世界において肥大した「個人主義」と「セックス産業社会化」にあることは明らかだった。

ミシェル・ウエルベックは、その事実を小説『素粒子』において暴露したのだが、彼は日本人でもゲルマン人でもなく、フランス人だった。フランスといえば日本やドイツと違って、「モテの国」「恋とセックスとお洒落の文化国家」というイメージがある。しかし、そんなイメージは言うまでもないがマスメディアがねつ造したものだ。実際のパリは、映画やテレビコマーシャルに出てくるパリとは似ても似つかない汚れた街だし、金髪碧眼の白人美女ばかりがうろうろしているような桃源郷ではない。まるでニューヨークのような多人種都市なのだ。「花の都パリ」というイメージは、戦後ヨーロッパ・アメリカ・日本を席巻した「恋愛セックス資本主義」という文化装置の中心に輝くイコンとしてねつ造された「妄想」にすぎないのだ。実際のパリそしてフランスは、『素粒子』に描かれたような絶望の街、恋愛できない孤独な男女の群れがセックスを求めて彷徨(さまよ)い歩く地獄なのだ。

恋愛セックス資本主義とは、「恋愛」や「セックス」が資本主義市場を流通する「商品」として売買される社会体制のことだ。

そのような社会では、人間は男も女も自分自身を「恋愛商品」「セックス商品」として売り込み続け、記号としての「恋愛」「セックス」を消費し続けなければならない。もちろん

資本主義社会とは唯物論の世界だから、恋愛とセックスは同じモノとして定義されている。セックスのない恋愛はなく、またセックスさえあればそれを恋愛と呼んでも差し支えない。マルクスは資本主義が人間を経済的に疎外すると言ったが、実際の資本主義社会はそれ以上だった。

恋愛セックス資本主義は、人間を性的に疎外するのだ。

恋愛セックス資本主義世界は、人間を「恋愛できる人間」と「恋愛できない人間」とに二分する。

かつて、ヨーロッパ世界には「王侯貴族」と「庶民」の二種類の人間がいた。両者は全く違う階層に位置しており交わることはなかった。庶民は貴族をうらやむことはあっても、真剣に自分と貴族とを比較して「俺はなんて卑小な人間なんだ、俺は社会の負け犬だ」と鬱屈してルサンチマンを感じるようなことはほとんど無かったといっていい。ニーチェが本能的に目指していたのは、そのような過去のヨーロッパ世界への回帰だった。

しかし、フランス革命が全てを変えた。フランス革命とは「自由」「平等」という近代的理念が、古代から中世へと続いてきた貴族社会を文字通りギロチン送りにして滅ぼしてしまった大事件だった。資本主義社会の発展に伴う市民階級の勃興は、「王侯貴族」と「庶民」によって構成された安定したヒエラルキーを破壊する原動力となった。「経済」という新たな力を握った市民階級は、自分たちの「上」に王侯貴族なる上位階級がのさばっていること

に激しいルサンチマンを覚え、そして、彼らを殺すことにしたのだ。
この「王殺し」によって、全ての人間が「平等」であり、「努力」さえすれば「勝ち組」になれるのだ、という近代資本主義的な個人主義の論理が確立されたのだ。そして実際にナポレオンが神聖ローマ帝国を崩壊させて自ら「フランス皇帝」を名乗った瞬間に、「平等」という概念は単なる絵空事ではないということが証明されてしまった。階級社会・貴族社会への回帰を夢見たニーチェ哲学に影響されたナチス・ドイツはナポレオンが滅亡させたローマ帝国を復興して「平等」という概念を反動的に破壊しようとしたが、歴史の歯車を逆回転させることはできず、結局は失敗した。共産主義国家もやっきになってセックスの資本主義化を抑え込もうとしたが、これも失敗に終わった。
かくして。神が死に、神聖ローマ帝国が滅び去ったヨーロッパ世界に残されたものは、アメリカから輸入されたセックス産業と近代ヨーロッパ的個人主義の融合……「恋愛セックス資本主義」だけだった。個人主義の世界では、人間はみな平等であり、そして神から切り離された単独者である。だから人間は、自分自身を幸福にするために努力し続けなければならない。さもなくば落伍者になってしまう。かつてのヨーロッパ人は神に祈りを捧げることで救われていた。しかし今では、祈る相手が見つからないのだ。そこから、「恋愛至上主義」という思想が生まれた。
恋愛至上主義とは何か。すでに神は死んだ。しかし、神がいなくても恋人を崇拝すれば救

われるのではないか、という思想のことだ。この思想が一八世紀から一九世紀にかけてのヨーロッパを席巻した。きっかけは、ルソーの「新エロイーズ」だった。ルソーは「社会契約論」で「フランス王が王を名乗る権利があるのと同等に、この俺にも人類の王を名乗る権利がある」と堂々と宣言した男だった。近代に吹き荒れたルソー旋風はつまり、「革命」と「恋愛」と、最初から二点セットだったのだ。革命も恋愛も、「ローマ帝国」「皇帝」「ローマ教皇」「キリスト教の神」といった従来のヒエラルキー制度を全て否定し、全ての人間を等しく平等の権利を持った存在として認めよ、というルソーの思想から生まれている。ルソーは神も皇帝も教皇も信じない。ルソーを救うものはただ、恋愛のみ、恋人のみなのである。革命によって権威を打ち倒した後、立ち現れてくるものが「恋愛至上主義」だと、ルソーは自分自身の内面を観照することで理解していたのだった。

ルソーに影響を受けたゲーテは「若きウェルテルの悩み」を書き、シラーは「オルレアンの少女」を書いた。パリで勃興した自然主義文学運動のもとでは、新興市民階級の恋愛とセックスがメインテーマとして描かれた。日本に恋愛至上主義思想が輸入されたのも、この頃だった。

しかし、資本主義が発達するとともに、当初は騎士道物語的な「脳内恋愛」つまりプラトニックな精神恋愛を主題としていた「恋愛」文化もまた、どんどん唯物論的な思想に侵されていった。そして最終的にはセックスによる肉体的快楽が、「恋愛」の中心に据えられるよ

うになった。現代では、もはや恋愛とセックスの区別はつかなくなっている。セックスのために恋愛する、セックスに恋愛という名前をつけてコーティングする、そんな有様なのだ。故に、本来の恋愛のメインテーマだった「運命的な恋愛」「生涯に一度の恋愛」などという主義主張(ロマンティシズム)は、現実の女を知らない童貞の妄想として片付けられるようになり、「より多くの異性とセックスしている人間」こそが「恋愛の達人」「モテ」「幸福」「勝ち組」ということになったのだ。

確かに、表層的な唯物論に基づけばそうなるのだ。資本主義では、より多くの商品を所有し消費する人間が「勝ち組」である。金持ちが勝ち組と呼ばれるのと同じに、恋愛においては女を大勢はべらせている男が勝ち組なのだ。となると、「ロミオとジュリエット」や「トリスタンとイゾルデ」のような「生涯たった一人の相手と添い遂げて死ぬ」みたいな近代恋愛、一神教の変種としての恋愛は、恋愛の理想型ではなくなってしまう。つまり、かつて「恋愛」と呼ばれていたものと、現在「恋愛」と呼ばれているものとは、名前が同じだけで中身は正反対のものなのだ。

❖ 現代は、「セックス翼賛社会」だ

近代の「恋愛」とは、精神的なものだった。情熱的な純愛である。近くはルソーに、もっと元を辿ればプラトンに遡る。恋愛は宗教的情熱の一種だ。それも、すこぶる神秘主義的な。

一方今の「恋愛」とは、物質的なものにすぎない。つまり、セックスだ。恋愛セックス資本主義は、セックスを恋愛と言い換えたのだ。故に、ソープランドや援助交際といった明確な商取引を伴わないセックス……「素人とのセックス」のほとんどが、「恋愛」にカテゴライズされるようになった。

かつては「金持ちになれば幸福になれる」という神話があったが、今では「セックスしまくれば幸福になれる」と男も女も思いこまされているのである。

恋愛もセックスも、現代では個人による自己救済のためのイニシエーションと化した。

その結果、家族制度は崩壊し、子供は生まれなくなってしまった。

最近、「日本にはオタクが増えたから少子化が進んでいる」などと言う者をちらほら見かけるが、実際にはヨーロッパのほとんどの国で出生率が下がっている。

「先進国」と言われている国で、のきなみ出生率が低下しているのだ。平成一六年版少子化

社会白書によると主要各国の出生率は、図に示したように推移している。出生率が二・〇〇を切ると人口が減ることになる。

ところで、「アメリカでは出生率がそこそこに保たれているじゃないか」と言われる人もいるだろう。その通り。アメリカでは出生率二・〇〇前後が保たれているので、人口が減るという状況には至っていない。これにはいくつか理由があるが、要はティーンエイジャーがやりっぱなし・産みっぱなし、みたいなケースが他の先進国（日本とかドイツとか）よりもずっと多いということなのだ。アメリカのセックス問題を扱っているドキュメンタリー番組では、ハイスクールに赤ちゃんを抱っこしてやってくる少女ママの姿をいくらでも見ることができる。僕の言葉で言えばこれは「セックス放し飼い政策」なのだ。子供たちが中学校でも高校でもセックスをしまくる。男の場合、思春期がもっとも性欲過多になることは誰もがご存じだろう。近代社会は人間を「社会人」に成長させなければ回転しないので、これまではセックスしまくりたい思春期の男たち（女も）を「学校」という訓練場に押し込むことで性欲を抑制してきたわけだが、これが晩婚化・少子化の一つの原因となったことは間違いない。そこで、どうせ将来たいした社会的ポストにつけっこない面々には、さっさとセックスさせて子供だけでも作らせておこう、ということになったのだ。

この政策、最近は日本でも取り入れられはじめている。二〇〇六年、日本テレビは「14

主要国の合計特殊出生率の動き

(%)

地　域	国	1960	1970	1980	1990	1995	2000	2001	2002
北部ヨーロッパ	デンマーク	2.57	1.95	1.55	1.67	1.80	1.77	1.74	1.72
	フィンランド	2.72	1.82	1.63	1.78	1.81	1.73	1.73	1.72
	アイスランド	4.17	2.81	2.48	2.30	2.08	2.10	1.95	1.93
	アイルランド	3.76	3.93	3.25	2.11	1.84	1.89	1.98	1.97
	ノルウエー	2.91	2.50	1.72	1.93	1.87	1.85	1.78	1.75
	スウェーデン	2.20	1.92	1.68	2.13	1.73	1.54	1.57	1.65
	イギリス	2.72	2.43	1.90	1.83	1.71	1.64	1.63	1.63
南部ヨーロッパ	ギリシャ	2.28	2.39	2.21	1.39	1.32	1.29	1.29	1.27
	イタリア	2.41	2.42	1.64	1.33	1.18	1.24	1.24	1.27
	ポルトガル	3.10	2.83	2.18	1.57	1.40	1.52	1.42	1.47
	スペイン	2.86	2.90	2.20	1.36	1.18	1.23	1.25	1.26
西部ヨーロッパ	オーストリア	2.69	2.29	1.62	1.45	1.40	1.34	1.29	1.40
	ベルギー	2.56	2.25	1.68	1.62	1.55	1.66	1.65	1.62
	フランス	2.73	2.47	1.95	1.78	1.70	1.88	1.90	1.88
	ドイツ	2.37	2.03	1.56	1.45	1.25	1.36	1.29	1.34
	ルクセンブルク	2.28	1.98	1.49	1.61	1.69	1.80	1.70	1.63
	オランダ	3.12	2.57	1.60	1.62	1.53	1.72	1.69	1.73
	スイス	2.44	2.10	1.55	1.59	1.48	1.50	1.41	1.40
北アメリカ	カナダ	3.80	2.26	1.71	1.83	1.64	1.49	1.51	1.50
	アメリカ	3.64	2.48	1.84	2.08	1.98	2.06	2.03	2.01
オセアニア	オーストラリア	3.45	2.86	1.90	1.91	1.82	1.75	1.73	1.75
アジア	日本	2.00	2.13	1.75	1.54	1.42	1.36	1.33	1.32

資料：ヨーロッパはEurostat（ただし、ノルウェーの2001年以降、アイスランド、イギリスの2002年を除く）、アメリカ（1960年のみ）、カナダ（1995年まで）、オーストラリア（1980年まで）はUnited Nations "Demographic Yearbook", その他は各国資料。日本は厚生労働省「人口動態統計」による。
注　：ドイツは旧東ドイツを含む。

（平成16年版　少子化社会白書〈全体版〉より）

才の母」という女子中学生の出産子育てドラマをオンエアした。かつて「14才の母」といえば「金八先生」で描かれたように「アンモラル」で「ショッキング」なテーマだったが、二〇〇六年には「女子中高生がセックスして子供を産むことは、とても素晴らしいことだ」という価値観の転換が起きているのだ。なぜ素晴らしいのかというと、ただでさえ子供が少ないのに中絶なんかされたらますます少子化が進むので、とにかく孕んだら何であろうが産め、ということだ。そう。日本においても、思春期の青少年に対するセックス政策は「セックス禁止」から「中絶禁止」に移行したのだ。少女漫画コーナーに行けば、「高校生のママ」とか「ティーンエイジャーの子育て」とか、そんな漫画が山のように積まれていることに気づいて驚かれるだろう。

現代は、「セックス翼賛社会」なのだ。

一方で、童貞を守ったり処女のまま生きていたりセックスしなかったり純愛を貫いたりする人々は、「非モテ」とか「高齢童貞」と呼ばれて差別・嘲笑されるわけである。なぜなら、彼らはセックス社会の負け組であり、しかも子供を作らないからだ。ただし、たとえ子供を中絶させまくっていてもセックスしまくっている男は賞賛される。彼らは子供こそ増やさないが、少なくとも種付けまでは実行しているのだ。女だって同じことで、貞節を守る純愛女性など、もはや褒められることはない。通俗的なフェミニズム思想は女性を解放するためにセックスの自由化と貞操観念の破壊を実行したが、それは単にありとあらゆる女性を旧来

の「純愛」世界から引き離して終わりのない「恋愛セックス資本主義市場」へ投下しただけだったのだ。「男性の放棄、セックスの否定」を唱えたラジカル・フェミニズムも存在したが、もちろんこちらのほうは恋愛セックス資本主義のシステムと対立するので普及しなかった。

ポストモダン社会、すなわち恋愛セックス資本主義の世界とは、性快楽本能に支配されて「動物化」した人間たちがセックスを求めて徘徊する地獄の世界なのだ。まるで人間は、自分の視床下部(ししょうかぶ)に支配され操られている家畜のようになってしまった。サルに「ボタンを押すとエサが出てくる」という機械を与えてみると、サルはエサという快感を求めて狂ったようにボタンを押し続けるようになる。いわゆる「サルみたいにオナニー」という状態だが、現代社会に生きる人間もまたそんなサルと同じ有様に陥っているのだ。恋愛セックス資本主義システムという機械のボタンを押し続けて、肉体的な快楽を追い求め続ける。彼らはその肉欲の先に、精神的な救いがあると信じているのだ。

なぜなら現代社会を覆い尽くしている俗流唯物論では、幸福とは「量」にすぎない。そして物質的な幸福とは畢竟(ひっきょう)「快楽」である。故に幸福とは「快楽の総量」という形のみで表現され計測されるものである。だから金持ちが勝ち組であり、セックスしまくる奴が勝ち組であり、貧乏人と童貞と処女は負け組ということになるわけだ。

❖ 一二世紀ヨーロッパに発生した「恋愛」とは、「異性の下僕になること」だった

そもそもヨーロッパが発明した「恋愛」という文化は、現代において「恋愛」と呼ばれているセックス産業とは全く異なったものだった。キリスト教への信仰が揺らいできた近代ヨーロッパは、それまでは物語の世界だけで語られてきた「恋愛」という文化を、キリスト教に代わる新しい宗教システムとして現実社会に適用したのだ。近代恋愛は、個人主義時代に相応しいパーソナルな宗教システムだったのだ。キリスト教は神があらゆる個人と契約し、個人の自我を救済するという「一対全」のシステムだった。これに対して恋愛では、個人と個人とが直接結びついてお互いの自我を救済し合うのだ。つまり「一対一」のシステムなのだ。

このような個人主義的なシステムが社会に導入されるようになった理由は、やはりヨーロッパに個人主義が根付いたからだろう。というのは、そもそもヨーロッパにおける恋愛とは、「反社会的なもの」だったからだ！

いわゆる封建社会と言われている中世では、恋愛はおおむね「情熱」につき動かされて社会の規範から逸脱してしまう「破滅」の道だった。

西洋の恋愛の起源を研究したドニ・ド・ルージュモン『愛について』によれば、元々恋愛

のルーツは非キリスト教的な古代のケルト神話が中世の吟遊詩人トルバドゥールによって復興されたものだった。つまり、恋愛とはまず「物語」だったのだ。それはそうだ。人間のDNAに生物学的な「恋愛プログラム」がセッティングされているはずがない。最初に生物学的現実として存在するものは、「情熱」などの「感情」であり「感覚」でしかない。それらの感情や感覚に付与された「恋愛」という概念は、人間の言葉すなわち幻想である。

中世に流行した騎士物語（ロマンス）では、恋愛は封建社会制度と対立する「病的な情熱」として描かれた。「トリスタンとイゾルデ」で描かれる恋愛は、騎士トリスタンと王妃イゾルデとの狂おしい不倫恋愛である。二人は王を裏切り、国を裏切って放浪する運命に陥ってしまう。トルバドゥールが歌う叙情詩とは、「恋愛によって不幸になる人間たち」を詠ったものだった。そこでは、それまでのキリスト教とは全く異なる価値観が描かれていた。

当初のキリスト教にはそもそも「男のほうが女より偉い」という男尊女卑の価値観があった。開祖キリストは男性だし、神も男性だ。そして、キリスト教における三位一体とは「父（神）＝精霊＝子（キリスト）」の三者から構成されるのだ。つまり、「父＝母＝子」という本来の三位一体構成から「母」が排除されて「精霊」にすり替えられてしまったのである。

しかしトルバドゥールの歌った「恋愛」という物語では、男（騎士）は愛する女性を神の如く崇拝する。常に彼女の言いなりになり、下僕のように恋人にかしずくのだ。だからこそ、恋愛に狂った騎士はキリスト教社会との齟齬（そご）をきたして破滅してしまうわけなのだ。

この詩が賞揚するのは、結婚を度外視した恋愛である。なぜなら結婚は肉体の結合をもっぱら意味し、これに対して至高のエロスである〈愛 Amor〉は、この世に存在しうるすべての愛を超えて、光明に満ちた結合に向って進む魂の飛躍であるからだ。この故にこそ「愛」は純潔を前提としているのだ。

また愛は一つの儀礼を前提とする。ドムネ domnei またはドノワ donnoiと呼ばれる、愛する者の臣従の義務がそれである。詩人はまず調べの美しい賛美の歌で貴女の愛をかちとる。詩人はちょうど君主に対するように、婦人の前に跪いて永遠の忠誠を誓う。婦人は愛のしるしとして、遍歴の騎士に見たてた詩人に金の指輪を与えてから、立つようにと命じ、詩人の額に接吻をしてやるのだった。それ以後二人の恋人はコルテツィアの掟によって結ばれることとなる。この掟とは秘密、忍耐そして節度を守ることである。しかしこれは後述するように、純潔とまったく同意義とはいいきれない。むしろ自制とでもいうか……そしてなによりも、男は女性の下僕となるのだった。

この〈永久に満たされることのない〉愛という新しい概念、〈常に否という貴女〉への情熱的で悲嘆にみちたこの賛美、これはいったいなにに由来しているのだろうか。

（ドニ・ド・ルージュモン　鈴木健郎・川村克己訳『愛について―エロスとアガペー―』）

永久に満たされることのない愛、常にツンツンしている女性の下僕になる男。ここにはセックスはなく、あるのは童貞の片思いの苦しみだけなのだ！

ドニ・ド・ルージュモンによれば、トルバドゥールが突如として恋愛詩を歌い始めた時期と地域は、ちょうどキリスト教の異端であるカタリ派が勃興した時期と地域に一致しているという。つまり中世一二世紀の南フランス、プロヴァンス地方である。一二世紀、南フランスを中心に勃興した異端カタリ派は、そもそもゾロアスター教やマニ教、グノーシス主義といった「精神世界と物質世界の二元論」を信奉する宗派だった。ヨーロッパの底流を成すこれらの思想は、現実世界や人間の肉体を全て罪悪視し、「彼方の世界」つまり精神世界への飛翔を理想とした。それ故に現世の権力をも否定し、ローマ教会と対立して弾圧されることになったのだが、ルージュモンは滅ぼされたカタリ派思想の一部がトルバドゥール……吟遊詩人へと姿を変えて「精神的な愛」という彼らの信仰を保持し続けたのではないかと推理している。

しかしローマ教会側も、突如巻き起こった女性崇拝・聖女崇拝をただ弾圧するだけでは済まなかった。西ヨーロッパはそもそも一神教の世界ではなかった。ローマ・ラテンは周知のように豊穣な多神教の世界であり、ギリシャ・ローマの神々は奔放に恋をしたりセックスをしたりする（だからイデア界に萌える童貞哲学者プラトンはギリシャ演劇を「神がセックスするとは何ごとだ」と批判したのだ）。またヨーロッパにはケルト文明の残り香も存在し続けてい

た。「トリスタンとイゾルデ」の原型は、キリスト教の物語ではなくそれ以前からヨーロッパに存在していたケルト神話なのだという。

だからローマ教会は、ヨーロッパの民衆の女性崇拝熱と折り合いを付けるために「聖処女マリア崇拝」という新しい教義を導入せざるを得なくなったのだ。つまり、イエスの母マリアはまず「処女のままイエスを産んだ」。

さらに、イエスを産んだ後もマリアは「処女だった」とした。四世紀にはすでにマリアは「永遠の処女」だとして人々から崇められるようになっていた。

これらのローマ教会による処女崇拝システムは、明らかにキリスト教以前の女神信仰を取り入れたものなのだが、それはつまり「異性への恋愛」に救いを求めようとする人々の欲求の高まりでもあった。一三世紀以後、ヨーロッパ各地でマリア崇拝熱が盛り上がった結果、カトリックはイエス教なのかマリア教なのか判らない状態になっていくのだが、その時期がカタリ派やトゥルバドールの隆盛と微妙にシンクロしているのは偶然ではないのだ。

また、一二世紀には修道院に入って一生涯を童貞・処女で過ごす修道士・修道女になるというライフコースが人気を博した。これは日本で言えば、出家してお寺に籠もるという生き方に相当する。

修道院に自らを隔離して世俗と超越した暮らしを続ける童貞処女の男女は、ときに性的な幻視体験に襲われた。一二世紀フランスの修道士聖ベルナルドゥスは、シトー修道会中興

の祖で一二世紀の修道院文化をリードした聖人であるが、彼はマリアを褒め称える文章を書いていたときにマリアの訪問を受け、マリアの母乳を飲ませてもらったという伝説の持ち主である。脳内マリアや脳内イエスとセックスしたり結婚したりした修道士・修道女は大勢いるが、マリアの母乳を飲んだ人は彼だけではないだろうか。なるほど、これならばベルナルドゥスは脳内でも童貞を失ってはいないのである。シトー修道会はもともとマリアを「母」とみなし、メンバー全員をイエスの「乳兄弟」とみなしている疑似家族集団であった。一三世紀に入るとこのマリア熱はますます過激化し、マリアの「下僕（はしため）」を称する人々が「聖処女マリアの下僕会」といったマゾヒスティックな名前の修道会を次々と設立していったのである。

このように、一二世紀のヨーロッパで勃興した「恋愛」とは、「永遠の片思い」であり「異性の下僕になること」であり「童貞のまま破滅すること」だったのだ！

もちろん、男たちが実際に女性の下僕になってしまったわけではない。すべては吟遊詩人……トルバドゥールの歌う「歌」でありキリスト教の「物語」の中で語られるものだったのだ。ただしカタリ派に関する資料は全て教会側が残したものだけなので、本当のところはもう判らない。後世に伝わったものは、あくまでも童貞男が女性に萌えて下僕になる、あるいはその逆という「脳内恋愛物語」だけだったのだ。

どうして一二世紀のヨーロッパで突然大勢の人間が教会（「現実」）に反旗を翻して脳内恋愛に萌えはじめたのか、その根本的な原因はいまいちよく判っていない。十字軍遠征によって男女の人口比バランスが狂い、独身寡婦が増えたためだという説もあるが、ともかくヨーロッパの「恋愛」は「脳内恋愛」つまり「物語」として出発したのだ。これだけははっきりした事実である。

この時点では、恋愛とセックスとはだから、相容れないものだった。恋愛とは「精神の世界」の事象であり、セックスとは「肉体の世界」の事象だったからだ。

騎士物語的な中世恋愛詩の世界では、だから、まず「騎士（男）が女性を神の如く敬い、下僕になる」という関係性のことを「恋愛」と名づけていたわけだ。つまりこれは、「宗教」なのだ。

ルージュモンは、『愛について―エロスとアガペー―』でこう結論する。

いまやこれらいろいろな現象の集中の総体から結論をひき出すべき時となった。すなわち、神話によって讃えられた情熱的恋愛は、その発生の時期たる十二世紀において、現実に語のあらゆる意味での「宗教」、しかもとくに「歴史的に限定されたキリスト教的一異教」だった。

そこから次のような点が推論できよう。

（1）今日小説や映画によって大衆化された情熱は、唯心論的異教が現代生活のなかに、秩序もなく逆流し侵入したものにほかならない。しかもその異教を解く鍵はわれわれの手中にはないのだ。

（2）現代の結婚の危機の起源において、二つの宗教的伝統の相克がまさに存在していた。いいかえれば、われわれは現在もはや証明する手だてのない昔から生き残ったモラルにのっとって、ほとんど無意識のうちに決意を行っているのだ。しかもその原因、結末がどうなのか、どんな危機に巻き込まれるのか、全く無知の状態にあるのだ。

ルージュモンは一九三八年に『愛について―エロスとアガペ―』を出版し、戦後に改訂版を出している。この文章は、はるか昔に書かれたものなのだ。一九三八年の時点で、ルージュモンは近代に「恋愛」という文化が突如蘇ったことを憂慮していた。精神至上主義文化である恋愛と現実主義文化である結婚とは絶対に相容れないということが、すでに一二世紀の時点で判明していたからである。

しかし、さすがのルージュモンもまさか「恋愛」の中身が「セックス」という唯物論思想に置き換えられることになるとは、予想できなかったに違いない。

❖ 恋愛とはそもそも物語だった

「恋愛」のルーツについてまとめてみよう。

一二世紀、「物語」として語られ、人々を脳内で救済するために発明された「恋愛」文化は、教会の権威が失墜した近代になって新しい「主流宗教」として復興した。近代恋愛もまた、最初はゲーテのような文学者が「物語」という形で世に出していたのだが、近代では教会の失墜と個人主義の擡頭（たいとう）という時代の流れが恋愛に味方した。その結果、ついに恋愛という「物語」が「現実」となったのだ。かつてイエスの物語が「真実」だと考えられるようになりついには「現実」となったのと同じに、「恋愛物語」もまた「真実」と受け取られるようになったわけだ。

（そもそもいつの時代の「現実」も常にそういうもので、まず脳内にあった物語が社会に逆流してきたものにすぎない。ありのままの「現実」などないのだ。「現実」が不変でアプリオリだと思っている人間は、つまり、創造説……神がいきなり現在の世界を作ったという妄想……を信じているのと同じだ。）

近代は、「個人は恋愛によって自己の救済に与る」という思想を「物語」から「現実」の位相へとコピーしたのだ。ケルト神話に発し、中世トルバドゥールが歌った「トリスタンと

イゾルデ」は、やがてシェークスピアの『ロミオとジュリエット』になり、最終的にはゲーテの『若きウェルテルの悩み』に結実した。『若きウェルテルの悩み』こそ、近代における恋愛復興、以後に続く恋愛文化の「現実化」の発端となった作品だと言える。

トルバドゥールと近代恋愛至上主義とを繋ぐ文学者……ダンテやゲーテの活躍については筆者の他の拙著を参照していただくとして、僕が言いたいことはこの一言だ。

「恋愛とはそもそも物語だった」

つまり、

「恋愛の本質は、脳内恋愛だ」

ということなのだ。

吟遊詩人の歌を聴きながら、現実には存在しない脳内キャラクターに、脳内で忠誠を捧げて下僕になる。

それがヨーロッパにおける本来の恋愛の姿だったのだ。

物語なのだから、聴き手である人間は決して現実に恋愛を成就することができずセックスすることもできない。つまり、ここに純粋に精神的な愛……「純愛」が完成する。

ゲーテは現実世界でも人間女にモテていたが、若い頃の彼は恋人から逃げ出して自分で自分を傷つけ、苦しむことが多かった。これは、人間女と実際に結婚して家庭を持ってしまったら、恋愛が終わってしまうことを察知していたからなのだ。ゲーテにとっての恋愛とは、

トルバドゥールやダンテが詠ったような「脳内恋愛」に他ならなかったのだから。

しかしルージュモンが心配した「唯心論的恋愛の暴走」は、結局のところすぐに終焉を迎えた。実際に戦後ヨーロッパ（アメリカや日本を含む）を席巻したものは、その反対。「唯物論的恋愛」つまりセックス産業の暴走だったのだ。

つまり、資本主義文明と恋愛とが癒着した結果、恋愛は純粋に生物学的な快楽の総量を求める消費活動に堕落し、この恋愛という名の消費活動が資本主義社会そのものを支えることになったのだ。

いずれにせよ、「恋愛」という文化を「現実」で実践するという人類初の試みは、「交尾する家畜の群れ」を大量生産して家族を解体し、人間の魂を救うどころか終わりなきセックス競争に陥れるという無惨な失敗に終わったと言える。

その結果、一九九八年フランスで『素粒子』が出版されたのだし、日本でも二一世紀に入ると『素粒子』と同じ世界観……恋愛セックス資本主義社会の地獄を描いた漫画「ルサンチマン」が連載された。拙著『電波男』が案外と話題になったのも、そのような社会の現実があったからこそだろう。

我々は、終わりなきセックスマシーンに改造されてしまったのだ。

だが、文学や哲学が、この恋愛セックス資本主義社会に対して何らかの一撃を加えること

はできるのだろうか？
　できない。
　なぜなら文学や哲学もまた、拙著『喪男［モダン］の哲学史』を参照していただければ判るように、すでにセックスにありつくための商品にされてしまっている。文学者や哲学者はもはや、「モテない男」を嘲笑するという「制度」側でしか食っていくことができない。
　可能性があるとすれば漫画やゲームといったいわゆるオタク産業のコンテンツだけだが、そのようなカルチャーは、はなっから知識人によって「大衆文化」というレッテルを貼られているので、知識産業というフィールドでは効力を発揮しない。故に大衆に対する力はあっても、反動的に恋愛セックス資本主義社会を維持しようとする自称知識人・自称文化人に鉄槌を下すことはできないだろう。
　では、どうすればいいのか？
　『素粒子』には二人の「恋愛できない男」が登場した。一人が文学者崩れのブリュノで、彼は最終的に精神崩壊して病院送りとなった。文学はすでに敗北したのだ。
　しかしもう一人の科学者ミシェルは、物語のラストで恋愛セックス資本主義社会を崩壊させ、「愛」を実現させる大いなる秘法……「愛の科学革命」を起こすのだ。ミシェルは、「神」につづいて「現実」という妄想を打破するのだ。言葉によってではなく、科学……数式と公理によって。

とはいえ唯物主義にもその歴史的重要性はあった。神という、最初の障壁を越える必要があったのである。その一歩を越えた人々は苦悩と懐疑の淵に沈んだ。だが今日では第二の障壁も乗り越えられた。それがコペンハーゲンで起こったことである。コペンハーゲン学派にとってはもはや神も潜在的現実の概念も不必要なものとなった。「人間的知覚というものがあり」とウォルコットは言うのだった。「人間による証言、人間の経験がある。それらを結びつける理性があり、それらに生命を吹きこむ感情がある。そのすべてが形而上学ないしは存在論といっさい関係なしに展開されていくのです。われわれにはもはや神の観念も、自然や現実の観念も必要ありません。経験の結果に関しては、理性に基づく相互主観性に依拠することで、観察者たちのコミュニティ内で合意が成り立ちえます。経験はさまざまな理論によって結び合わされますが、それらの理論はできる限り経済の原則を満たすものでなければならず、必ずや反駁可能なものでなければならない。知覚された世界、感覚された世界、つまり人間の世界があるのです。

（ミシェル・ウエルベック　野崎歓訳『素粒子』）

このような純粋に科学的な手法での「現実否定」に続き、ミシェルはついに「不死」を科学的に実現する。DNAを無限に複製する技術を開発したのだ。もちろん、ミシェルにインスピレーションを与えたのは古代ヨーロッパの異教文化が産んだ「ケルズの書」だった！

トルバドゥールが歌った「トリスタンとイゾルデ」が元はケルトの伝説だったのと同じに、キリスト教が産み出したヨーロッパ文明の再生は「ケルトの再発見」によって成し遂げられなければならない。

ミシェルはこの発見を成し遂げて自殺したが、彼の跡を継いだフレデリックという学者がミシェルの遺志を継いだ。フレデリックはこう唱える。

人類は消滅しなければならない

人類は新しい種族を生み出さなければならない、それは性別をもたない不死の種族であり、個人性、分裂、生成変化を超越した存在であろう

（ミシェル・ウエルベック　野崎歓訳『素粒子』）

その結果、

数十年に及びとんでもなく過大評価されてきたフーコー、ラカン、デリダ、ドゥルーズの仕事が、突如笑止千万とみなされ省みられなくなって以後、かわりとなる新たな哲学的思考が出現するどころか、「人文科学」を標榜する知識人全体が不信に晒されたの

だった

（ミシェル・ウエルベック　野崎歓訳『素粒子』）

こうして「恋愛できない文系男」は滅び去り、

変化は精神的ではなく、遺伝子的なものだろう

（ミシェル・ウエルベック　野崎歓訳『素粒子』）

という言葉が新たなスローガンとして掲げられることになる。そして……物語のラストで、人類は……滅亡する。科学によって誕生した「性別をもたない不死の種族」「個人性、分裂、生成変化を超越した存在」、つまりセックスと生殖と死という人間を苦悩させてきた三つの根源的悪（つまるところＤＮＡの支配）から解き放たれた新しい生物によって取って代わられていったのだ。

人類は……滅亡するしか……ない、だって？

『素粒子』が現代人の苦悩の元凶としてあげている要素は、「セックス産業」や「恋愛セックス資本主義」といった表層的な現象ではない。せっかくトルバドゥールが歌い上げ、ゲーテが「現実」に持ち込み、一九世紀のヨーロッパで真剣に追求された「恋愛による人間の救

済」という方法論が、なぜ無惨に挫折してセックス産業に乗っ取られたのか。その根本的な原因は、人間とりわけ男性のDNAに刷り込まれた「暴力性」だと『素粒子』は訴える。なぜ「愛」が実現せず、物語の世界で夢見るだけで終わってしまうのか。人間が人間を愛せないのはなぜか。なぜ人間は人間を殺すのか。古来、あらゆる哲学者や文学者、宗教者がこの暴力の問題に取り組んできた。彼らは「倫理」や「道徳」を発明し、あるいは「愛しなさい」という教義を発明して人間の暴力性を抑えようと努力してきた。しかし、二一世紀になるに至って、それらの文系男性の努力すべてが無力化してしまったのだ。正確に言えば、科学が生み出した核兵器という絶対的な暴力装置の誕生によって、言語は無効となった。哲学も文学も宗教も無効となった。フーコー、ラカン、デリダ、ドゥルーズの仕事は、何ら「暴力による人類の絶滅」という現実に対して力を持たなかった。故に知識人……人文科学者たちもまた、恋愛セックス資本主義市場における一商品とならざるを得なくなったのだ！

ミシェル・ウエルベックは、彼らフランスの人文科学者（僕にはどうしても彼らが科学者だとは思えないので、文系知識人、あるいは単に知識人でいいだろう）の言語を「笑止千万」の一言で片付け、フランスの知識人たちを「人類を救う」という舞台から退場させた。そして、代わりに「科学」に期待を託したのだ。

『素粒子』は「唯心論的恋愛」の復活を唱えた小説ではない。むしろ、徹底的に唯物論を突き詰めることで、人間の生物としての本質を改良してしまえば「恋愛」が復活するはずだ、

と言っているのだ。そもそも恋愛とは物語であって、その理念を正しく現実に輸入することはできなかったのだ。その原因の一つが人間とくに男の暴力性であり、セックスと暴力と支配が結びついてしまう男の生物学的宿命であり、恋愛の現実化と自由化が「恋愛セックス資本主義市場」という果てしなき闘争機械をもたらす結果になってしまったことをウエルベックは指摘しているのだ。

そう。問題は、人々の魂を癒し、平和をもたらす「恋愛」という文化が実現不可能だということにあるのだ。キリスト教が説いた「愛」の教えだって、一方では人々を救ったが、他方では十字軍遠征だの異端審問だのといった異教徒への「暴力」にすり替えられてしまった。ブッシュ大統領は未だに「我らは十字軍だ」などと言って他国に攻め込むことをやめない。もちろんアメリカだけが悪いのではない。男という生き物がそのように……暴力と攻撃衝動によって他の男と闘争し続けるようにプログラミングされていることがそもそもの原因なのだ。「恋愛」だって同じことで、我々は無限に終わらないセックスゲームに参加させられ、他人を貶(おとし)めて異性を支配することに夢中になっている。

つまりキリスト教の「アガペー」にしても「恋愛」にしても、ＤＮＡによって産み出される男の暴力と闘争本能を、観念（妄想）の力で抑え込もうとする試みだったわけだ。グノーシス主義者たちは、人間が愛を実現するには肉体を棄却するしかないと考えていた。仏教でも、出家して物質文明から離脱することで人間は解脱できると考えた。しかし、それらの試

みの全ては、本能の圧倒的な力の前に挫折したのだ。

人間は観念の世界を生きているが、その基盤はあくまでも肉体である。精神とは脳という構造の機能に過ぎない。

故に、観念（妄想）の側だけを書き換えても、肉体が変わらない限り、人間は本質的に変化できないのだ！

というわけで、本書が「恋愛」による人間の救済というテーマをこれ以上探究するのであれば、フィールドを生物学の分野へと移行させなければならない。人間の生物学的実質を知れば知るほど、「恋愛」がいかに現実世界において実現困難な妄想であったか、恋愛が常に「脳内恋愛」であり続けたのはなぜかという疑問も氷解するだろう。ただし僕は小説『素粒子』のように人類を絶滅させろとは主張しない。僕が探るのは、いったん「恋愛」を本来の姿……「脳内恋愛」に戻してやるという方法論である。

かつてキリスト教徒は神に祈ることで救われ、脳内恋愛教徒はゲーテやドストエフスキーを読むことで救われていたわけだ。現代人が救われないのは、表層的な唯物論思想によってそれらの「物語」の力、「妄想での癒し」「心の救済」を否定したことに由来する。現代では物語によって癒される行為は「現実逃避」というレッテルを貼られて迫害されている。これはかつてローマ教会がカタリ派を弾圧したのと同じ構造なのだ。僕は「物語」の力を復興し、「脳内恋愛」に再び市民権を取り戻させることで、とりあえず今生きてしまっている人

間は救われるようになるのではないか、と考えるのだ。まず現代では困難になってしまった「脳内恋愛」を生物学的なルールに基づいて復興することで、もう一度「現実恋愛」を実現するチャンスが生まれるはずなのだ。フロイトは人間が「無意識」に縛られていることを発見したが、実は人間は自分の「肉体」にこそもっと深く縛られていて、しかもその事実を全く自覚していないのだ。

それでは、「恋愛」の生物学的な実相とは、どのようなものになっているのだろうか。

❖恋愛のベースは、ＤＮＡが生み出す脳内ホルモン

恋愛とは脳内で起こる「脳内現象」だ。

だからこそ、元々の恋愛は「脳内恋愛」として出発したわけだ。まずトルバドゥールが歌う騎士物語の中で「恋愛」という物語が発明され、それが近代になって「現実」の中へ逆浸食してきたのだ。

ヘレン・フィッシャーの『人はなぜ恋に落ちるのか？　恋と愛情と性欲の脳科学』によれば、恋愛感情とはドーパミンやノルエピネフリンといった脳内ホルモンが多量に分泌されることで発生する感情だという。これらの脳内ホルモンは、ほ乳類と鳥類に生まれつき与えられているもので、多量に分泌されるとその動物は興奮し、行動への動機を強められるとい

う。人間様だけでなく、動物だって「恋愛」状態に陥るのだ。しかしそれは「騎士が貴婦人の下僕となる」といった宮廷恋愛とは全く異なる現象で、要は訳もなく発情し、興奮して活動的になっている状態なのである。

ドーパミンは強力な快楽物質で、例えば「ランナーズ・ハイ」状態というのはジョギングしているうちにドーパミンが脳内に分泌されることによって起こる高揚感だ。一度これにハマると、ジョギング中毒になってしまうのだ。恋愛も同じで、ドーパミンという快楽物質を得られるからこそ人間は恋愛に夢中になるわけだ。ドーパミンが多量に分泌されると、人間は爽快な気分を味わう。気力が満ち溢れたり、活動的になったり、不眠になったり、食欲がなくなったり、心臓がバクバクしたり息が荒くなったり不安になったり……といった「恋の気分」は、全部ドーパミンの作用なのだ。

ドーパミンが関与しているとすれば、恋の虜になった男女が、その恋愛関係なしには生きていけないと感じたり、相手にも同じ気持ちでいてほしいと切望することにも説明がつけられるかもしれない。なにかを切望してやまない——これは中毒の症状だ。そしておもな中毒症状はどれも、ドーパミン分泌量の上昇と関係している。恋愛は一種の中毒なのだろうか？　わたしはそうだと考えている。

（ヘレン・フィッシャー　大野晶子訳

『人はなぜ恋に落ちるのか？　恋と愛情と性欲の脳科学』）

恋愛とは、中毒である……これが、生物学的な見地から見た実相なのだ。

キリスト教や仏教は人間の欲望を全て苦悩の源泉であるとして抑制する方法を教えてきた。もちろん恋愛なんてもってのほかだ。近代は恋愛を自由化して物語どころか現実の世界でも恋愛を解禁したが、その結果人々は恋愛中毒症状に陥ってしまった。

ここで中世の騎士物語（ロマンス）では、恋愛は騎士と姫を破滅させる病気のような扱いだったことを思い起こしてほしい。そもそもトリスタンとイゾルデは、元々の話では、「恋に落ちる魔法の薬」を飲んでしまったがために、うっかり恋愛状態に陥ってしまうのだ！　そう、古代のケルト人は恐らく恋愛の本質を「ドラッグ中毒」だと知っていたのである。トリスタンとイゾルデは王を裏切り国を裏切り森の中へ逃げ込んで苦難の生活を送らねばならなくなり、はっきり言ってお互いにちっとも楽しくない。それでも別れられない理由は、トリスタンによると、

この女が私を愛するのは秘薬のせいです。
私はこの女と別れられません
彼女も私から離れられないのです。

（ヘレン・フィッシャー　大野晶子訳
『人はなぜ恋に落ちるのか？　恋と愛情と性欲の脳科学』）

イゾルデのほうも、

このかたと私が愛し愛されておりますのは
ひたすら二人が飲んだ秘薬の所業でございます。
それはもう、罪にちがいございません。

（ヘレン・フィッシャー　大野晶子訳
『人はなぜ恋に落ちるのか？　恋と愛情と性欲の脳科学』）

トリスタンとイゾルデは「恋愛中毒」なのだ。別に、本気で愛し合っているわけではなく、なんだかよく判らないけど中毒症状になって離れられないだけなのである。
そして、秘薬……ドラッグの効果には期限がある。
トリスタンとイゾルデが飲んだ秘薬の有効期限は三年だった。
だから三年が経過するや否や、トリスタンとイゾルデはさっさと別れてしまったのであった。

後世の作家たちは、「恋愛がドラッグ中毒とはいかがなものか」と考えて物語を書き換え、トリスタンとイゾルデは薬を飲んだのではなく運命的・精神的な恋愛に陥ったのだ、というお話にしてしまった。これは「恋愛」の本質が「ドラッグ中毒」という「脳の病気」だという真実が次第に忘れ去られ、「恋愛至上主義」ともいうべき新たな信仰の体系にトリスタン物語が組み込まれていったことを意味している。そもそも中世以前ではどうだったかといえば、

トリスタンとイズーの恋愛に似たものを、古代はまったく知らなかった。周知のように、ギリシャ人ローマ人にとって恋愛は、それが自然の目的たる肉欲を超越するほどになると、一つの病気（メナンドロス、ギリシャの滑稽（こっけい）詩人、紀元前三四三〜二九二年）とみなされた。プルタルコスの言葉を借りれば、それは一つの〈狂乱〉である。〈ある人びとはこれを一種の狂水病と考えた。……したがって恋する者を、病人とみなして許してやらねばならぬ。……〉

（ドニ・ド・ルージュモン　鈴木健郎・川村克己訳『愛について―エロスとアガペ―』）

昔の人のほうが常識人で現実が見えていたのだ。

ヘレン・フィッシャーの調査によると、恋愛状態つまりドーパミンが分泌される期間は、

長く続いてもおおむね一七ヶ月ぐらいで終わるのだそうだ。つまりひとつの対象に対する「恋愛中毒状態」には生物学的な「期限」がある。トリスタンとイゾルデの場合は、三年だった。

ということは、「一生涯、一人しか愛さない」という純愛の理念を現実に実践しようとしても、必ず生物学的な原因によって阻まれるということだ。この場合の純愛理念の実践とは、ドーパミン中毒状態を一生涯持続するという意味だ。つまり恋に落ちた時のドキドキ感をいつまでも持ち続けようという意味である。そんなことは無理である。いくら頑張ったところで、中毒は一七ヶ月で終わるのだ。せっかく人間女（または人間男）をゲットしても、すぐに飽きてしまう原因は脳にあるのだ。しかしひとたび恋愛中毒の味を占めた脳は、次の中毒症状を求めはじめる。故に、恋愛マニアは終わりを知らない。次から次へと異性を求め続けるのだ。近代が恋愛を現実世界で解禁した瞬間に、ドン・ファンやカサノヴァといった好色プレイボーイがもてはやされるようになった。しかし彼らは覚醒剤中毒みたいなものなのだ。『源氏物語』の光源氏はせっかく紫の上という理想の女性に出会っていながら、ドーパミン中毒症状を起こして女を漁り続け、紫の上に見放されて失意の晩年を過ごさなければならなくなった。

❖ 恋した相手とセックスしたくなるのも脳内ホルモンの仕業

恋愛中毒に陥ってドーパミンやノルエピネフリンが分泌されると、他の脳内ホルモンの分泌量にも影響が出る。

例えば、セロトニンが減少する。セロトニンが減少するとどうなるかというと、強迫神経症の症状が出るようになる。つまり、恋してしまうとセロトニンの分泌量が減って相手のことしか考えられなくなる……取り憑かれてしまうのだ。ただしセロトニンにもいくつか種類があり、恋愛によって減少する物質はそのうちの数種類だろうとヘレン・フィッシャーは想定している。

同時に、テストステロンの分泌が増える。テストステロンはいわゆる男性ホルモンの一種で、暴力性に関わっている。男が女よりも暴力的なのは、テストステロンが多いからなのだ。

ドーパミンは「快楽」「多幸感」を脳にもたらすが、テストステロンは別種の興奮を脳に与える。テストステロンは性欲ホルモンなのだ。恋した相手とセックスしたくなるのは、ドーパミンと同時にテストステロンが分泌されるからである。恋愛と性欲は、別々の脳内ホルモンの働きから生まれる感情ではあるが、完全に分離しているわけではない。連動してい

るのだ。人間は恋愛対象に出会うとまず脳内にドーパミンが分泌されて恋に落ち、次にテストステロンが分泌されてセックスしたくなるわけだ。

恋愛とセックスとは元来「発情してセックスして子供を作る」という動物的本能なのだ。そして、恋愛感情……ドーパミンの分泌は、おおむね一七ヶ月以内に終わってしまう。

ということは、人間が恋人に対して抱くことができる元々の「恋愛感情」は二年以内に消えてしまうということになるばかりか、恋愛とセックスは別々に処理することだって可能だということだ。つまりドーパミンが出なくてもテストステロンさえ出るのであれば発情してセックスすることは可能なのだ。僕がアダルトビデオを借りてきて、これっぽっちも愛していないどころか顔出しすらＮＧでどこの誰だか判らない企画ものＡＶを「使う」ことが可能なのも、人間においては恋愛感情と性欲が完全に別物として分離しているからなのだ。

ところが近代以後、元々は精神的なものだった「恋愛」は、徐々にセックス込みになっていった。恋愛を買うとセックスも一緒についてくる、という有様になったのだ。これはどうしてかというと、いくつか理由があるが最大の理由は「恋愛結婚」という制度が発明されたことによる。元々恋愛と結婚は対立する関係だった。恋愛は究極の個人主義文化で、一方結婚は家族主義・世間体主義の制度である。ところが近代では個人主義が発達した結果「恋愛至上主義」という信仰が形作られた。人間は恋愛しなければ救われないのだ、という思想。しかし、もし人間がみんなセックス抜きの純愛を実践しはじめたら、誰も結婚しなくなって

しまう。そこで社会が「恋愛」のゴールに「結婚」を無理やり繋げたのだ。そして、その接着剤が「セックス」。これはなかなかの知恵だ。

しかし、恋愛とセックスのセット販売が行きすぎた現代では「恋愛=セックス」どころか「セックスしたら、それが恋愛」みたいなことになってしまったのだ。だいたい簡単に避妊できるようになったので、セックスしたってそうそう間違って赤ちゃんができちゃった婚、なんてことにはならない。中絶だってできるし。というわけで、「恋愛」―「セックス」―「結婚」―「子育て」というラインから「結婚」―「子育て」が切り離されてしまい、「恋愛」―「セックス」というラインだけが独立して稼働するようになってしまったのだ。

事実、恋愛していない相手とセックスしているうちに、テストステロンが分泌され、そこから逆にドーパミンが分泌されて相手に恋してしまうという現象も実際に起こるのだそうだ。この現実世界では、要は「押し倒してセックスした者勝ち」なのだ。モテない僕みたいな男は少しずつ彼女の好感度パラメーターをあげていって、段階を踏んで、そしていよいよ……と段階を踏もうとするが、モテる男はさっさと彼女を押し倒してセックスしてしまう。セックスされているうちに彼女の脳からドーパミンが涌いてきて、「私はこの人に恋しているんだわ」と言い出してしまうという寸法だ。

これは、少女漫画でイヤというほど見られる展開である。

従って、モテる男とは、愛してもいない多数の女と平気でがんがんセックスできる男を意

味するのだ。

逆に「純愛」なんぞを現実で追求するような男は、まずモテないだろう。そんな悠長なことをしている間に彼女が他の男とセックスしてしまって「これが恋なのね」とか言い出されて逃げていくのがオチなのだ。

もちろん、表層的な唯物論の悪影響もある。「恋愛なんて言ってもただ単にセックスしたいだけだろう」という恋愛セックス同一論である。表層的唯物論には「精神的な世界を無視しようとする」という強迫観念的志向がある。マルクス主義もそうだったが、フロイトの「全てを性欲に還元しようとする」態度もまた、間違った唯物論から生まれたものだった。フロイトによれば恋愛どころか人間の全ての行動は性欲から生まれてくるということになるので、ということはセックスすればするほど人間は自己実現できているということになってしまう！　もちろんフロイト自身はそんな過激なことを言っていないのだが、そういうふうに解釈されたことは間違いない。ことにアメリカではそうだった。アメリカで最初にセックス産業が巨大化して恋愛セックス資本主義市場が形成された一因には、アメリカが熱狂的にフロイト理論を受け入れたことがあげられるのではないだろうか？

「恋愛」「性欲」と別の感情として「家族愛」つまり愛着感情があるが、これもまたバソプレシンとオキシトシンという脳内ホルモンによって生み出される。浮気性で暴力性の男はテ

ストステロンが多く、家族に優しい男ではバソプレシンとオキシトシンが多いという。恋愛感情は一七ヶ月で終わるが、愛着感情はもっともっと長続きする。長期安定型なのだ。そして、バソプレシンとオキシトシンが分泌されることでドーパミンの分泌が抑制されてしまうという現象も起こるらしい。つまり、長くつきあっていると、情熱的な恋愛感情が沈静化してしまい、代わりにまったりした愛着がわいてくるというわけだ。「恋愛」と「結婚」の融合が可能なのは、人間の脳がドーパミン中毒状態からバソプレシンとオキシトシン分泌状態へ切り替わることができるからなのだ。しかし、この「愛着状態」に移行すると、今度は情熱的な「恋愛」の状態を失ってしまう。恋愛至上主義社会では、だから安定した家族を振り棄てて次の「恋愛」に突撃する人間が跡を絶たないわけだ。

❖なぜ男はテストステロン過剰に陥りやすいのか？

ところで、人類、特に男の脳で問題になるのがこの「テストステロン」だ。テストステロンは性欲ホルモンで、特に男性で分泌量が多く「男性ホルモン」とも呼ばれている。性欲を増進させるだけでなく、筋肉も発達させる。いわゆるステロイドは、テストステロンと同様に働く。なのでステロイドを投与して筋トレすると、たくましいマッチョに変身できるわけだ。

『テストステロン』（ジェイムズ・M・ダブス＋メアリー・G・ダブス）によれば、テストステロンの分泌量と男性の暴力性には顕著な関連性がある。例えば、同じ犯罪者でも「暴力型」と「非暴力型」の受刑者間ではテストステロン量に明らかな差がある。

ここで「暴力的」とされている犯罪は、レイプ、児童猥褻（わいせつ）、殺人、暴行、強盗など。「非暴力的犯罪」のほうは、夜盗、窃盗、薬物規制違反など、おとなしめ（？）の犯罪である。メディアが垂れ流す「オタクは性犯罪者予備軍」という風潮に対して僕は「強姦魔には大学のラグビー部員とかヤンキーのほうが圧倒的に多い」と反論しているのだが、別にラグビーとかツッパリが悪いのではなく、過剰なテストステロンがこのように暴力犯罪・性犯罪を誘発しやすくしているわけだ。言うまでもなく、過激に運動を積み重ねたり殴り合ったりしていればそれだけテストステロンの分泌量が増える。「血気盛んになる」というやつで、そうなれば性欲も増進され、暴力衝動も高まる。おおかたはスポーツで解消されるはずなのだが、まあ中には暴発する男もいることだろう。これに対してテストステロンが低いであろう多くのインドア型オタク

テストステロンと、犯罪、および監獄の中の行動との関係

『テストステロン』（青土社）より

男性の非行・セックスとテストステロン量の関係

	テストステロン 正常	高	リスク比
少年非行	12	18	1.5
成人非行	10	23	2.3
強力薬物使用	10	25	2.5
マリファナ使用	22	48	2.2
アルコール乱用	12	16	1.3
軍隊無許可離隊	6	13	2.2
セックス・パートナー多数	23	32	1.8

男性の非行。数字は、さまざまな非行をはたらいた男性のテストステロン正常の人と、高テストステロンの人とのパーセンテージを示す。

『テストステロン』(青土社)より

の場合は、暴力型犯罪より非暴力型犯罪のほうが多いはずだ。ちなみに非暴力型犯罪者は、刑務所の中で暴力型犯罪者からシメられるので、そういうことはやらないほうがいい。アメリカだと「女」役にされてカマを掘られることになる。

そう。高テストステロンの男が問題行動に走るリスクは、通常のテストステロン濃度を持つ男より高くなる。しかし同時に、そういう男のほうが女とセックスできるのだ。上の図表も『テストステロン』からの引用である。

なんだか暗鬱な気分になるが、女はチョイワルどころか激ワルが好きなのだ。

このように、テストステロン過剰な男が犯罪（レイプを含む）に走る確率は、高くなる。ことにレイプ犯の場合、テストステロンの分泌を抑え込むことで過剰な性欲を抑制すれば再犯を防げるという理屈でアメリカなどでは「化学去勢」を行おうということになってきた。女性

ホルモンを投与して、男性ホルモンであるテストステロンを抑制する、というのだ。僕の知り合いの蓮海もぐらさんというゲーム作家は別にレイプマンではないのだが「自作に登場する両性具有キャラの心理を体感する」という目的で女性ホルモンの投与を受けたことがある。するとやっぱり性欲が落ちてしまったのだそうだ。ただし、女性ホルモンの投与をやめると、それまでのリバウンドでかえって体毛が濃くなったりしたというので、性欲抑制のために投与するにしても恒久的に続けなければならないということだろうか。

アメリカにはわざわざステロイドを投与する男が大勢いるのをみても判るように、現代文明は一面ではテストステロン過剰の方向へ向かっている。軍備は拡大され続け、戦争は終わることを知らない。しかしその一方では、低テストステロンの男性……女性的な男性も増えている。例えば日本で「オタク」、アメリカで「ナード」や「ギーク」と呼ばれているインドア型の男性がそうだ。恋愛セックス資本主義市場とは、恒久的に人間のテストステロンとドーパミンを過剰分泌させて「セックス中毒」に追い込み続け、セックスを含めた「恋愛」という商品を永遠に消費させようとする社会である。このような社会では、インドア型で低テストステロンの男は馬鹿にされ、ヒエラルキーの下部に置かれる。ボス猿のような高テストステロン型男性が理想化され、カリスマとしてメディアに祭り上げられる。それでも、そのようなマッチョ主義・テストステロン主義の陰で「低テストステロン主義」勢力もまた拡大し続けているのだ。

しかし、なぜ男はテストステロン過剰に陥りやすいのか。
テストステロンが過剰だから、男はすぐ暴力とかレイプとか戦争とか重犯罪に走るのではないか。
テストステロンは、人間の攻撃性、征服欲、支配欲、乱交セックスの原因となっている。
ブライアン・サイクス『アダムの呪い』によれば、人間の男が元々ＤＮＡによって「Ｙ染色体をより多く残すように」とインプリンティングされているからではないか、という。Ｙ染色体は性染色体の一つで、男だけが持っている染色体だ。人間は二本の性染色体を持っているが、Ｘ染色体を二つ持てば女になり、ＸとＹを一個ずつ持てば男になる。男子・女子、いずれのタイプの染色体を持っている場合も、妊娠六週間目までは誰もが「女」である。妊娠七週間目に、Ｙ染色体に内蔵されたＤＮＡが発動して、テストステロンなどの男性ホルモンが大量に分泌され、胎児はやっと男になるのだ。
「生物が生殖する目的はＤＮＡの保存だ」と考えられるようになって長いが、実は保存するべきＤＮＡが男と女とでは違う。男の場合はＹ染色体を保存することが目的となっている。最近、天皇家における「男系・女系」の継承問題が一時的に議論になったが、確かに「Ｙ染色体」という観点からみれば「男系」のみがＤＮＡを保存しているということになる。
ただし、実は女にも綿々と保存されるＤＮＡがある。それは染色体ではなく、細胞質のミトコンドリアに含まれるｍｔＤＮＡだ。どんな男に孕まされようとも、生まれてくる赤ちゃ

んのｍｔＤＮＡは常に母親と同一のものだ。男のミトコンドリアにもｍｔＤＮＡは存在するが、それは精子が卵子と受精した瞬間に死滅してしまう。
故に、最近ではミトコンドリアを基にした女系遺伝の調査と、Ｙ染色体を基にした男系遺伝の調査とが別々に実施されるようになっている。
人間の生きる目的が「ＤＮＡの保存」というのは何とも味気ない話で、それこそ千年の恋も醒めそうだが、少なくとも人間の身体はそのように作られているわけだ。

❖人間はＤＮＡに支配された機械にすぎない

テストステロンについて研究すればするほど、科学者たち（たいていは低テストステロンの男性か、あるいは女性）はウンザリしはじめている。というのは、かつて近代ヨーロッパは理性主義……啓蒙主義によって人間は暴力と戦争と貧困と犯罪を恒久的に解決できるはずだと信じていたにも拘わらず、生物学的な結論は「それは無理だ」という悲観的なものにならざるを得なかったからだ。
そもそも理性主義は、「人間は神を信仰しなくても自らの理性によってこの現実世界を天国のように素晴らしい世界に改造できる」という自信（誇大妄想ともいう）によって近代を支配したはずだった。自然に隠された科学法則を明るみに出せば、人間は自然を支配し、自

らの獣性をも支配し、失われた楽園を取り戻せる……はずだったのだ。つまり理性主義という思想も一つの信仰だったわけだが、その結果気がつけば世界中に核兵器をはじめとする破滅的な兵器が立ち並び、戦争は果てるどころか世界各地に拡散し、暴力は収まるどころかますます凶悪化し、人間に破壊された自然は様々な形で人間へのしっぺがえしをはじめる始末。そんな中、人間の理性そのものが「しょせんはＤＮＡに支配された機械にすぎず、しかも暴力的な機械にすぎない」として疑われるようになったのだ。

ここで言う「理性」の中には、そう、「恋愛至上主義」という信仰も含まれる。男が一人の女を神の如く崇拝し、お互いに情熱的に愛し合い、生涯を共にすることでお互いを救済する……。そのような「恋愛」の神話はしかし実現されることなく、結局は「恋愛セックス資本主義」という現実を生み出し、家族制度を崩壊させ、人間を「モテる者」と「モテない者」とに二分してしまった。それというのも、恋愛状態（ドーパミン分泌状態）が一七ヶ月しか続かなかったり、ドーパミンによって増幅されるテストステロンが暴力を生むことや、テストステロンが過剰な男が結局女を独占することになるという生物学的な原因のためなのであって、文系の「知」……口先だけの言葉遊びなどが太刀打ちできる問題ではないことが判ってきた。

もはや「恋愛神話」は崩壊しているのだ。

「永遠の恋愛」など脳内ホルモンに支配されている人間には不可能で恋愛を追い求める先に

は過剰なテストステロン、セックス中毒、そして過剰な暴力が待っているだけだったのだ。
しかし、そもそもなぜ近代は「恋愛」を信仰にして、そして現実にまで適用しようとしたのだろうか。
それは恐らく、キリスト教が元々人間の獣性……テストステロン過剰を抑え込むために「愛」を教えたのと同じように、やはり人間の獣性を克服するためだったと思われる。
元々、「ロマンス」という言葉は中世のトルバドゥールが歌った「騎士物語」が語源なのだが、騎士物語というのは実際には野蛮でどうしようもなかった騎士たちに「人の道」というものを教え込むために作られたとも言われている。つまり、騎士たる者は婦人にかしずき、忠誠をつくし、常に高潔に振る舞わなければならない、という規範道徳を作ろうとしたのだ。後にこの騎士文化は廃れたが、このような「テストステロン過剰な男を文明によって飼い馴らす」ための倫理規範は作られ続けることになった。
「恋愛」もまた、放置しておけば野獣のような男の群れによる集団レイプ、略奪、放火……という悲惨な状態になってしまうであろう現実世界を、どうにかして平和な世界に改造するために役立つはずだったのだ。
しかし、その有効期限はそろそろ終わりに近づいている。
もはや「恋愛」は「セックス」と同義語になってしまった。

それに、信じれば救われる宗教とは違い、「現実恋愛教」にはもう一つの大きな欠陥がある。それは、「恋愛格差」だ。つまり、「現実恋愛」では男前（イケメン）と美女だけがモテて、ブサイクな男女は（特に男は）金持ちとか有名人にでもならない限りセックスにも恋愛にもありつけないのだ。しかもこの傾向は恋愛セックス資本主義市場が発展すればするほど顕著になる。資本主義が貧富の差を増大させたのと同じで、恋愛セックス資本主義は恋愛とセックスの格差をひたすら増大させることになった。

かつて資本主義世界では、金持ちが貧乏人を馬鹿にして笑っていた。「個人主義」の世界だから、貧乏人は努力しなかったから貧乏になったのであって全部自己責任だ、という理論だ。そのため「ふざけるな資本家どもめ」と怒った人々が共産主義を生み出して資本主義を脅かすようになり、やっと資本主義社会は「福祉」などの概念を取り入れて個人主義のもう一つの理念である「平等」のほうにも目配りするようになったのだ（ソ連が崩壊してからは、忘れられて再び元に戻ってきたが）。

恋愛の世界も同じで、モテる者がモテない者を馬鹿にして笑い、それどころか「お前は努力がたりないからモテないのだ」と「道徳的」な「お説教」をたれてくる始末である。しかし、構造的にどうやったって格差が出るのは資本主義の習いだし、日米が民主主義国家を標榜するのであれば、本来は「福祉」サービスを充実させるべきではなかろうか？

もちろんここでいう「福祉」には、「美容整形」なども含まれる。

恋愛においては、「見た目」が実に重要だからだ。もちろん「金」とか「権力」も重要だが、なんといっても「見た目」である。韓国では身も蓋もないプチ整形が流行っているが、日本もいずれ同じことになるだろう。恋愛市場は、最初から不平等な市場なのだ。DNA配列によって基本が定められる「外見」によって、勝ち組と負け組が決まってしまうのである。必死でモテる努力をしている連中の多くは勝ち組と負け組の中間地帯を彷徨っていて、自分では頑張れば勝ち組になれると信じているが実際のアガリは「しょせんは……」という程度。この種の連中が、「恋愛できない人間」の層を差別化してことさら攻撃してくるのだ。僕なんかはもう人間女には恋愛できないのでそんなことどうでもいいと解脱宣言したのだが、現世に執着して地獄を生きる面々にとってはそのような解脱者がいては困るわけだ。自分の努力や「恋愛してセックスすれば救われる」という信仰が全部無駄で空しいことだと思い知らされるのが耐えがたいのだろう。しかし僕は何度でも言うが、いくらセックスしたって人間は救われないのである。Y染色体を世界中の女の子宮に注ぎ込んでも、喜ぶのは精子細胞に組み込まれているY染色体だけなのであって、彼自身はちっとも救われないのである。人間は未だにDNAの支配から自由になっていないのだ。必要なものは暴力を生むテストステロンではなく、中毒症状をきたすドーパミンですらないのだ。というのは、過剰なドーパミンはテストステロンを分泌することになるからだ。これからの人間が求めるべきものは、癒しの愛着ホルモン……バソプレシンとオキシトシンなのである。

❖「一夫一婦制」は、ドーパミンとテストステロンを抑え込むため

「現実恋愛」を普遍的に導入したことによって、人間は平和に満ちた世界を築くどころか、かえって終わりのない永久闘争に陥ってしまった。「現実恋愛」はダーウィンの言うところの「性淘汰」……一度は文明社会が抑え込むことに成功しつつあった「性淘汰」という永久闘争を、再び文明社会に導入してしまったのだ。

そもそも人間の男は他の生物のオスと同様、メスとセックスして精子をメスの膣内に放出するため「だけ」にDNAによって生かされてきた。「自由意志」など、とんでもない妄想なのだ。昔からオスは過剰なテストステロンを脳内に分泌させ、筋肉をつけ、他のオスを打ち倒して勝者になることでメスの歓心を買い、セックスにありついていた。オスが文明化されて「男」に進化しても、事態は実は同じだった。ただ、人間は前頭葉を発達させて知恵をつけてしまったため、石器を発明したり鉄器を発明したり弓矢を作ったり大砲を作ったりミサイルを飛ばしたり……と、不断の「マッチョ化」を進め、うかつにも自らの「オス度」を上昇させすぎたのだ。過剰に強くなりすぎたのだ。ただ単に「体力」をアップさせるだけなら、どこかに限界があったはずだ。しかし人間は「道具」というものを発明してしまい、自分の身体の外部に「力」を拡張する術を覚えてしまった。それでももし人間が理性のみ

によって生きている存在なのであれば、ここまで危機的な状況に陥るはずはなかった。人間は理性を発達させはしたが、結局のところは「Y染色体を保存せよ」というDNAの指令、「メスに射精する」というオスの本能からちっとも自由になっていないのだ！

文明の一つのメリットに、「一夫一婦制」という制度を実現したということがあげられる。普通に生きていればテストステロン過剰な一握りの男が女を独占するはずが、「一夫一婦制」のおかげで多くのY染色体が保存されることになったのだ。つまり文明化には「テストステロンを抑制して性淘汰を克服する」という目的が隠されていた。テストステロンから生まれる暴力衝動は村や都市から放逐され、「戦争」という非日常の空間へ囲い込まれた。だから結婚制度はテストステロンから極力切り離されなければならなかった。ヨーロッパの場合は、結婚はキリスト教の神によって保証される「秘蹟」「秘儀」として扱われた。離婚は禁止だし、浮気（特に妻の浮気）も禁止され、夫婦ですら快楽を目的としたセックスは罪だとされた。「生殖のためのセックス」だけが奨励されたのだ。つまり中世の結婚制度とは、人間のドーパミンとテストステロンを抑え込んでバソプレシンとオキシトシンだけを分泌させるために機能していた制度なのだ。

もちろん、制度を作ったからといって人間の本性（DNA）が変わるわけではない。いぜんとしてドーパミンやテストステロンは分泌され、その本能的な衝動を実行する機会を求め続けている。それらは主に十字軍遠征のような戦争において消費され、村や町といった日

常の世界からは隔離されるという扱いを受けることになった。しかしテストステロンへの欲求は戦争で満たされても、ドーパミンへの欲求は満たされなかった。だからこそ中世に突如カタリ派のような唯心論的異端宗教が大流行したのではないだろうか。カタリ派はバソプレシンとオキシトシン、つまり癒しと平安の境地ではなく、ドーパミン中毒の境地を是とした熱狂的な宗教だった。一方で、トルバドゥールもまたドーパミン中毒に陥って熱狂的な情熱恋愛の歌を歌った。故に、カタリ派からトルバドゥールの情熱恋愛叙情詩が生まれたというルージュモンの説にも頷(うなず)けるのだ。両者に直接の繋がりがあるかどうかはともかく、いずれもニーチェが言うところの「デュオニソス的」な情熱に身も心も捧げようという非理性的衝動の運動に他ならなかったのだから。

しかし、近代に入って「恋愛」が現実に敷衍(ふえん)された時から、新たな悲劇が始まったのだ。資本主義は対外的には帝国主義・植民地主義という形で文明のテストステロン過剰化という方向へ突っ走った。同時に、内部的には恋愛自由主義という形でやはり人間のテストステロン過剰化を煽ったのだ。資本主義社会では、男は、戦争と恋愛、そして経済活動という内外の複数の闘争を連続して行わなければならなくなった。バブル絶頂時代に「24時間闘えますか」なんてCMソングが流行ったが、まさしく資本主義の精神とは永遠の闘争・不断の闘争なのである。そして闘争の目的は、言うまでもなく性淘汰に勝ち残ることだった！

しかしその結果、文明は自然を破壊し、人々をノイローゼに追い込み、悲惨な経済格差を

作り、終わらない戦争の種を全世界にバラまいたのだ。
『アダムの呪い』（大野晶子訳）でブライアン・サイクスはこう嘆いている。

女性たちが富と権力とは正反対の取り柄を持つ男性を結婚相手に選ぶなら、フェラーリやローレックスを見せびらかしてもなんの効果も発揮しなくなったら、こうした傾向はあっという間にひっくり返るだろう。そうなれば、性選択の暴走列車も、やがてスピードをゆるめるはずだ。イヴが向かうところ、アダムもついて行かざるをえないのだから。

❖「脳内恋愛」が「現実恋愛」にすり替えられた

マックス・ウェーバーと同時代に活躍した経済学者ヴェルナー・ゾンバルトは『恋愛と贅沢と資本主義』において「資本主義が発展したのは、『現実恋愛』という宮廷文化が大衆化したためだ。つまり女たちが贅沢を覚えたので市場を無限に拡張しなければならなくなったのだ」とボヤいた。

中世ヨーロッパは両性間の愛の調和的な現象を、すべての人間の行為と同様に、一段高いもの、すなわち神への奉仕にしたがわせた。それは、地上の愛の思いが直接宗教的な霊感を

受け、超地上的な目標をめざす場合（マリア崇拝におけるように）でも、愛が制度的に定められ、愛を結合する制度（つまり結婚）を、神が望まれ、神が祝福される制度として（すなわち婚姻の秘蹟として）みとめられた場合についてもいえることだ。神によって浄められず、あるいは制度上結ばれていない性愛はすべて、「罪」の刻印を打たれた。
愛の本質について根本的に違った考え方がミンネゼンガー（中世の恋歌。フランスのトルバドゥールと同類）が興った世紀にまず広範囲の人々の間に浸透した。すなわち、これはあらゆる点で愛のいとなみの世俗化がはじまった一〇世紀以来のことである。

今日では、これらの恋愛詩がすべて、真実を語らず、技巧や細工ばかりの作品に思われる。だがそれだからこそ、これらの詩は近代的恋愛の自然な萌芽であることを示している。これらの詩は、恋人を天上にまつりあげ、一方おのれは憔悴して呻き声をあげ、酔いしれ、祈りに明けくれる正真正銘の青春期の性愛の表現である。

（ヴェルナー・ゾンバルト　金森誠也訳『恋愛と贅沢と資本主義』）

ゾンバルトの言葉を要約すると、中世の恋愛詩は「童貞の叫び」みたいな脳内妄想だった、ということだ。その脳内恋愛物語の中で、騎士は婦人に下僕としてかしずき、婦人の言いなりになって闘いに赴いたり贅沢な品物をプレゼントする。女性を神として崇めるという

のが中世脳内恋愛の大原則だった。

ところが、近代に入ると、まず宮廷でこの脳内恋愛が「現実化」された。もともと王侯貴族の世界というのは現実世界でありながら限りなくおとぎ話や神話に近い世界、つまり「半分現実、半分神話」のようなものだった（だからこそ近代になるまで、庶民は「革命」「平等」なんて「非現実的」なことをいちいち考えなかったのだ）。

であるから、大人気物語だった「恋愛」を「実践」しようと考え出した面々が「宮廷から」現れたのも当然といえば当然だったのだ。こうして宮廷では女性が権力を握るようになり、その結果「恋愛」が宮廷の財政を圧迫した。一八世紀になると、フランスの宮廷は王が囲っている愛妾や王妃（マリー・アントワネットなど）に支配され、ヴェルサイユ宮殿建築に代表される桁外れの消費が実行されるようになった。革命が起こって当然だったのだ。マリー・アントワネットのライバルといえるデュ・バリー夫人の勘定書は68頁のようなものだ（*l*＝リーヴル、*s*＝スー、*d*＝ドルニエ）。

ゾンバルトの「恋愛が贅沢を呼び、贅沢が資本主義を発展させた」という経済学説は、同時代に活躍したマックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの勤勉な精神が資本主義を発達させた」という、より無難な学説によって取って代わられてしまった。しかしウェーバーの「勤勉の理論」だけでは、ゾンバルトが指摘したような「世界の資本主義市場化」は説明できない。一七世紀から一八世紀にかけて、贅沢の質、消費の質が変化したのだ。

デュ・バリー夫人の勘定書

Ⅰ			
金銀細工師	313,328*l*	4*s*	
宝石細工師	1,808,635〃	9〃	
美術装身具製作者	158,800〃	—〃	
	2,280,763*l*	13*s*	
Ⅱ			
絹製品	389,810*l*	15*s*	
レース	215,988〃	6〃	
流行品	116,818〃	5〃	
小間物	35,443〃	14〃	
	758,061*l*	—*s*	3*d*
Ⅲ			
家具	24,398*l*	18*s*	
絵画，つぼ	91,519〃	19〃	
	115,918*l*	17*s*	
Ⅳ			
蹄鉄工	60,322*l*	10*s*	
刺繡師	471,178〃	—〃	
	531,500*l*	10*s*	
Ⅴ			
馬車と装具	67,470*l*	1*s*	
馬	57,347〃	—〃	
馬糧	6,810〃	—〃	
	131,627*l*	1*s*	
Ⅵ			
鍍金師	78,026*l*	—*s*	
彫刻家	95,426〃	—〃	
鍍金師(再度)	48,875〃	12〃	6*d*
鋳物師	98,000〃	—〃	—〃
大理石の石工	17,540〃	8〃	10〃
指物師、錠まえ師	32,240〃	8〃	—〃
	370,108*l*	9*s*	4*d*
Ⅶ			
リュシアンヌにおける初期の作業	111,475*l*	6*s*	9*d*
造園	3,739〃	19〃	—〃
新規の作業	205,638〃	16〃	8〃
造園	3,000〃	—〃	—〃
	323,854*l*	2*s*	5*d*

『恋愛と贅沢と資本主義』(講談社学術文庫)より

私は奢侈（しゃし）の発展内容を次のように区別する。

（a）屋内的になってゆく傾向　中世の奢侈のほとんど多くは公共的であったがそれがしだいに個人的になっていった。しかも個人的でも、往時の奢侈はほとんど家の中よりも戸外でくりひろげられていた。ところが、時代がすすむとともに奢侈はだんだんと家の中に家庭的なものに置き換えられていった。女性が奢侈を家の中にひきずりこんだわ

けである。
　往時は（ルネサンスの頃でも）、贅沢といえば、馬上槍試合、はなやかな戸外の催し物、行列、野外の宴会であった。それが家の中にひきこもった。そのため贅沢は、往時かねそなえていた時を定めた年中行事の性格を失い、いつでもくりひろげられるようになった。こうした変化と奢侈需要との増大がどれほど密接に結びついていたかは、とくに述べるまでもない。
（b）即物的になってゆく傾向……〈中略〉……かつては贅沢といえば多数の家臣や従者を動員することであり、たとえば祝祭日に彼らを集めて飲食させ、楽しませることであるとされた。だがいまや有益な品物をどしどし奢侈のために使ってゆくことが本命となり、従者の多いことはこれにともなう副次的奢侈となった。私はこうした過程を即物化と名づけているが、この即物化はまたしても婦人の関心のまとであった。なぜなら、すばらしい衣装、住み心地のよい住宅、高価な装飾などとちがって、召使いが大勢いることは、女にしてみればさほどありがたくはないからである。
　経済学的にいえば、こうした変化はやはりきわめて相対的である。アダム・スミスならきっと次のようにいったであろう。人は非生産的奢侈から生産的奢侈に移行した。なぜなら、例の人手のかかる奢侈は非生産的であり、これに反し即物的奢侈は生産的な手（資本主義的な意味で、すなわち資本主義的企業内の賃金労働者をさす）を仕事にたずさわらせるか

らであると。実際、奢侈需要の即物化は、資本主義の発展にとって根本的な意味があった。（c）感性化、繊細化の傾向　これは奢侈の即物化と手をたずさえて登場し、女性が全精力を傾けて促進した傾向である。奢侈の感性化とは何かというとそれは奢侈がしだいに理想主義的な生の価値（芸術のような）ではなくもっと動物的な、低度の本能につかえるようになる動きである。……〈中略〉……この勝利はとりもなおさず、女性の最終的かつ完全な勝利以外の何物をも意味しなかった。女性的なスタイルが文化のあらゆる領域にのさばってきたことは、ここにかかげた定理の正しさをはっきり証明している。

（ヴェルナー・ゾンバルト　金森誠也訳『恋愛と贅沢と資本主義』）

ゾンバルトが近代における贅沢の代表としてピックアップするものには、次のようなものがある。

《飲食の奢侈》　これは現代でも「グルメ」として、特に女性に持てはやされている。もちろん男にもグルメはいるが、その半分くらい（あるいはもっと大勢）は「女にモテるため」にグルメの勉強をしているにすぎない。

《住居の奢侈》　これまた現代でも綿々と続いている贅沢の一つだ。サラリーマン男性は、ほとんど一生涯を妻子を快適に暮らさせるためのマイホームのローン返済に捧げ尽くす。中

世トルバドゥールの恋愛歌の世界では、恋人は森の中でイチャイチャしていた。それが恋愛の「現実化」と「即物化」によって「マイホーム」や「六本木の高層マンション」に化けていったのだ。ゾンバルトは「恋愛は宮廷で現実化することによって即物的になった」と嘆くが、物語つまり妄想にすぎない恋愛を「現実」にするためには、恋愛という概念を「物質」によって表現する他はなかったのかもしれない。

《劇場》　オペラ劇場は当初、貴族階級だけの社交場だったが、現代では誰もが劇場や映画館に足を運ぶことができるようになった。そして、アベックは映画館をデートスポットと定め、観たくもない映画をいちいち観に行くのだ。

《一般向きミュージック・ホールならびにダンス・ホール》　これも現代に溢れかえっており、そこで何が目的とされているのかは説明するまでもないだろう。音楽やダンスでないことだけは間違いない。

《高級レストランおよび居酒屋》　これも説明不要。デートの時に気の利いたレストランを知らない男はモテない。

❖セックスに至るまでに膨大な消費が必要となった

ゾンバルトは指摘していないが、もちろん「奢侈」の中には「セックス」も含まれる。と

いうか都会における全ての奢侈が最終的には「セックス」に行き着くのだ。ただ、本来は一円もかからないはずのセックスに至るまでの過程に、膨大な消費が必要になったのである。「セックスに至るまでの膨大な消費」こそが、唯物的な「現実恋愛」の本質なのだ。セックスは女が男に売りつける高額商品と化したのだ。故に男は、多額の謝礼を「贅沢」という形で女に支払うことによって、やっとセックスさせてもらえるようになった。例えばマイホームの住宅ローンなんてのは「永久セックス権の購入代金」にも等しい。

資本主義市場が生み出した大都市とは、つまり、「恋愛」という妄想の物語をこの現実世界に現出させるべくして構築された巨大な幻想の空間だったのだ。

その都市の中で一般庶民の女たちは、宮廷貴族が造り出した「現実恋愛」という幻想を刷り込まれ、自らもマリー・アントワネットのように振る舞いはじめたのだ。

そうなれば、庶民の男も、彼女を貴婦人のように敬わねばならない。敬うだけなら良いのだが、「現実恋愛」では男性の愛情は「金」や「富」や「贅沢品」という目に見える形で表現しなければならなくなっていた（ここが元々の脳内恋愛と違うところだ）。貴族でもなんでもないただのサラリーマンの家の息子が、高価な結婚指輪を嫁に贈らなければならなくなった。家なんか買う金もないのに、一生涯をかけたローンを組んでほとんど自分が住むことのない家を妻子にあてがわなければならなくなった。

恋愛セックス資本主義市場に暮らす男たちは、涙ぐましいほどに女に奉仕し続けている。

そして、そのあげく「亭主元気で留守がいい」と言われるのだ。

確かにマックス・ウェーバーの言うように資本主義の精神とはプロテスタンティズム……ひたすら労働しようとする勤勉さである。しかし、そもそも、なぜ近代の男たちは「ひたすら働いて、働いて、働こう」などと面倒臭いことを思ったのか？　死なない程度に働いていればそれで良いのではないのか？　なぜ身を粉にして、ただ一度きりの人生を仕事に捧げ尽くそうとしたのか？

……そう。ゾンバルトの理論では、それは資本主義市場の拡大によって「富」を持たない男がモテなくなってしまったからなのだ。モテないというのはハーレムが作れないとかいう意味ではなく、「恋愛できない」「結婚できない」というレベルでモテないという意味だ。さらに僕は原因の一つに「恋愛の自由化」という要素をあげてもいいと思う。みんなが適当に見合い結婚してしまっていた世の中なら、誰が金持ちであろうがたいして関係なかったはずだ。

で、結婚相手を自分の力で獲得しなければならない自由恋愛市場では、男はよりテストステロンを過剰にしてマッチョ化するよりも、むしろ頭を使って金を稼いだほうが有利だったのだ。単なる「恋愛」でモテる男はセックスマシーンつまりテストステロン過剰型だが、「結婚」となるとやっぱり「経済力」がモノを言うのである。それに「外見」は生まれつきでだいたい決まってしまうが、「金」ならば誰だって頑張れば稼げないこともない。故にヨーロッ

パの男たちは大海原に乗り出して世界各地を植民地化し、現地の人々に多大なる迷惑をかけたのだ。「女にモテたい」「Y染色体を残したい」というだけの動物的な理由で……。
そう。文明は元来性淘汰というDNAの本能にあらがうために作られたはずだったのに、いつの間にか性淘汰に強迫神経症的に取り憑かれた現代文明に変質してしまったのだ。
もし文明が正常に「テストステロンを抑え、性淘汰の原理を無力化して一夫一妻制度を保持する」という機能を果たしていたら、江戸時代の日本のように文明はさほど進歩しなかっただろう。進歩というのはつまり欠陥があるから修復しなければならなくなったという混乱状況を近代人が「進歩」と言い換えただけのことだ。ヨーロッパの安定は近世に崩壊した。以後、あまりにも長くキリスト教に抑圧されすぎたせいか、中世の反動で全てを自由にしようとしたのだ。そして全てを自由にするということは、DNAの命令に対して全く抑制がかからなくなるということだった。こうして「欲望機械」こと資本主義システムが無限増殖を開始したのだ。
恋愛セックス資本主義に犯された女は、男にチヤホヤ崇拝されると、かぐや姫のように「あれをもってこい」「あれを買え」と贅沢するために無理難題を押しつけてくる。現実における恋愛では、愛したほうが負けなのだ。逆にテストステロン過剰男をヒモにしたりホストに貢いだりして男に食い物にされる女もいるが、この場合は逆に女のほうが男に参ってしまっているわけだ。

❖本書が「脳内恋愛の復権」を提案するわけ

　これまでの話をまとめると、中世トルバドゥールたちの恋愛物語歌とは、ほとんど童貞の妄想の如き抽象的・感覚的な恋愛だった。それはグノーシス主義やマニ教の流れをくむ「現実棄却」を理想とした空想の恋愛・この世のものにあらざる恋人への純愛だった。
　ところが王侯貴族がこの「恋愛」を宮廷で「現実化」しようとしたとたん、「恋愛の唯物化」「恋愛の物質主義化」が発生してしまった。宮廷の女たちは、男から女神のように崇拝されるという有利な立場を利用して、限りない贅沢を追求しはじめた。そのため、男は資本主義市場を拡大し続けなければならなくなった。
　さらに、民主主義の理念が王侯貴族を打ち倒すとともに、「現実恋愛」の文化は宮廷から都市へと流出した。このことが一般大衆の贅沢化を推進し、資本主義市場のさらなる拡大を運命づけた。と同時に、一般大衆もまた貴族のように「現実恋愛」という幻想に酔いしれて生きることになった。
　贅沢もまた、ドーパミンを分泌させて人間の脳に快楽を与える。「現実恋愛」は消費中毒患者を大量生産したのだ。
　また、真面目に働いてさえいれば何となく結婚にありつけるはずだった男たちは、「恋愛

自由市場」という不断の闘争の場で闘わなければならなくなった。さらに恋愛に勝利するために、他の男の何倍も働かなければならなくなった。一般的に言われる資本主義市場の拡大と、恋愛市場の拡大は、だから、連動していた。

資本主義市場で闘争させられ続けた男たちが疲れ果て、苦悩に満ちた資本主義世界から脱出するために考え出した「社会主義」「共産主義」という思想も、結局は失敗した。マルクス主義は、ドーパミンを抑圧して人間の過剰なエネルギーを沈静化させようとした運動だった。その意味で、マルクス主義はキリスト教が経済学主義の形に変化したものだったのだ。しかしマルクス主義思想によって人間の過剰な脳内ホルモンを沈静化させすぎた結果、社会主義国家では経済的な失速が発生し、資本主義市場に敗れたのだ。もはや暗黒の中世に逆戻りして幸せだと感じられるような人間はいなかったのだ。

こうして概観してみると、結局のところ、物語の中の女性キャラクターに愛を捧げて癒されようとする「脳内恋愛」という文化が、現実の女性に愛を捧げて救われようという「現実恋愛」にすり替わってしまったことが、少々大袈裟に言えば今日の世界情勢を危機的な状況に陥れたのではないか。資本主義社会は永久に拡大し続けなければならないのだが、地球の資源には限りがある。庶民を飢えさせたフランス王政は革命で倒れたが、現在の地球には一〇億人以上もの飢餓状態に置かれている人たちが存在するのだ。資本主義が全世界に拡散した結果、裕福な国と貧しい国との経済格差は広がる一方になってしまった。そして「恋

愛」に酔っている人々は、そのような問題を故意にあるいは無意識に黙殺している。また経済的に裕福な国の中では、『素粒子』で見たように「恋愛格差」が拡大し、少子化・人口減が始まった。

問題の根本には「恋愛の現実化」という過ちがあったのだ。

そしてその過ちは、Y染色体を残すために女にモテようとする男の本能が、女の言いなりになってきたことに端を発するのだ。もちろん文明とはテストステロンを抑制して暴力を軽減するための装置であるから、僕は何も「男はみんなサル時代に逆行して、ケンカで勝った奴がハーレムを作れるようにすればいい」とか「恋愛なんてろくでもないから、女を見たら人権など無視して押し倒せばいい」なんて乱暴なことを言っているわけではない。恋愛セックス資本主義はドーパミン中毒者を大量発生させると同時に、不断の闘争状態に男たちを置き続けることでテストステロン過剰・暴力性の過剰をも生み出した。これ以上の暴力性の増幅は、全人類の滅亡に繋がってしまう。だからテストステロンを抑制しなければならないのだが、マルクス主義のように国家が人間の妄想力や競争力を規制するという方法論は失敗した。近年では「女性原理」つまりアンチ・テストステロン原理によって平和を実現しようという動きもあるが、実はそのような女性性の崇拝がそもそも「現実恋愛」を生み、資本主義市場を暴走させた元凶なのだ。いや、「女性性」（アンチ・テストステロン的性質）こそ、文明が本来目指すべきものであることは間違いないのだが、「女性性」が「現実の女性」と同一

視されてしまうと悲惨なことになるのだ。ゲーテの「女性的なるもの」、「女性性」という理想（イデア）は、「現実の女性」をモデルとはしているが、あくまでも「脳内キャラクター」であって現実とは関係がないのだ！

　ここのところを、近代以後の多くの人々が誤解してきた。「女性性」は例えばダンテの脳内にベアトリーチェという形でキャラクター化され、またゲーテの脳内ではグレートヒェンという形でキャラクター化された。キルケゴールの脳内ではレギーネ・オルセンの姿を取った。彼女たちには、確かに実在のモデルが存在する。しかし、よく考えてみてほしい。伝記を調べれば判る通り、彼らは誰一人、モデルとなった現実の女性と結ばれてはいない！　そのことごとくが失恋に終わったのだ。彼らに代表される近代的男性は、だから、現実の恋愛に挫折した結果、「自分の脳内に」自分を救済してくれる「女性性」を勝手に生み出していただけなのだ！

　このように自己の内面に存在する「女性」を神の代わりに崇拝する近代ロマン主義の精神が、いつの間にか変質して現実と妄想の区別を見失って「現実の女性」を神のように崇めはじめたことが、全ての間違いの始まりだったのだ。

　なぜそうなったのか。それは唯物議論の流行とも関連している。俗流唯物議論は、目に見えるモノしか信じないので、崇拝する対象もまた現実の存在でなければならない。だから内面の女性性よりも現実の女性のほうがもてはやされたのだろう。ここから現実の異性の内面

性よりも肉体を重視する「セックス主義」というもう一つの唯物論まではあと一歩だ。

文明にアンチ・テストステロン志向を復活させようとする試みは、現実の女性を崇拝したり持ち上げたりチヤホヤしたりする試みであってはならないのだ。もちろん現実の女性を蔑視したり抑圧しようというわけでもない（それこそテストステロン志向そのものではないか）。男が自らの努力によって自分自身の脳内のテストステロンを抑制しなければならないのだ（さらに男女はともにドーパミン中毒から脱却して、地球資源を食い荒らす即物的な贅沢を抑制しなければならない）。

少なくとも、国家が人間のそれらの過剰性を抑圧するという試みは、失敗に終わった。ソ連がその代表例だ。

もちろん、反対に国家が人間の過剰性を集団組織化して暴走するという現象も避けなければならない。ナチス・ドイツはこの典型例だ。

そこで本書では、「脳内恋愛の復権」を提案することにしたのだ。

キリスト教とは「イエス物語」を現実だと思いこんでしまった人々の作った宗教のことだが、我々だって彼らと同じなのだ。我々は、中世トルバドゥールが歌っていた童貞妄想の「恋愛物語」を現実だと思いこんでしまっているのだ！　人々に無償の愛を説き、テストステロンを抑え、癒しを与える「イエス物語」は美しい話だが、それを「現実」にしようとするといろいろと齟齬（そご）が生じる。宗教戦争とか異端審問とか。それと同様に、人の魂を癒す

「恋愛物語」もまた、「現実」にしようと志向したとたんに妙な方向へ走ってしまうわけなのだ。

❖「現実恋愛」は本能に支配されている

「テストステロンによる性淘汰」を排除して、「一夫一妻」に代表される安定した平和な世界を作ることが文明の本来の目的だった。

かつては「暴力で男を殺して女を犯す」というのが原初的な性淘汰本来の姿であったろう。

しかし「一夫一妻」という制度を実現すれば、暴力は大幅に軽減できる。

もちろん人間の暴力性は生まれながらにしてＤＮＡが規定している本能なので、一夫一妻制度を実現しただけでは戦争や犯罪を無くすことはできないが、少なくともそれらの破滅的な暴力を「非日常」という領域へ囲い込むことは可能になるのだ。

中世ヨーロッパのキリスト教社会は、その目標をある程度達成することに成功した。

しかし近代に生まれた「自由と平等」という概念が「恋愛の現実化」を発生させ、そして人間は再び性淘汰に巻き込まれることになったのだ。近代がかつての性淘汰状態と違うところは、「腕力」と「外見」ではなく「経済力」と「外見」の勝負になったという点だった。

だが根本的には両者はいずれも「闘争」という意味で全く同じなのだ。

とはいえ「腕力」は単純なテストステロン量によって決まるが「経済力」にはテストステロンだけでなく知性が関連する。つまり「現実恋愛」とは「文明化された性淘汰システム」なのだ。テストステロンを抑えるために生み出された文明が、再び性淘汰に利用される。いったいなぜこんなことが起こってしまったのか？　結局のところ、現実恋愛を支配している最大のルールが「外見」「見た目」だからなのだ。人間の「見た目」は、どうしようもなく人間の精神を縛っている。「私は男（女）を見た目で判断しない」なんていう女（男）はみんな、自分に嘘をついているのか、相手に嘘をついているのか、ただの馬鹿なのか、そのいずれかなのであって、相手の目が見える限り「外見」は多大な影響を人間に振るうのだ。それは「本能」なのだ。ＤＮＡがそういうふうに規定しているのだ。生物学的にそう決まっているのだ。もちろん「外見」の中には「肉体の作り」だけでなく、「身振り」「仕種」「目つき」「話し方」なども含まれるが。

人間はＤＮＡによって基本的な容姿を規定される。

美形に生まれれば無条件で愛され、醜く生まれれば無条件に嫌われる。

もちろん、経験を重ねることで、「見た目」以外の要素を感じ取れるようになる人間もいる。しかし少なくとも、生物学的にもっとも生殖に適した年代の女性（一六歳から二〇歳）は、ほとんど「見た目」だけで男を決めるし、ある程度年を取ると今度は「経済力」を判

断基準に入れて安楽で贅沢な生活を手に入れようとする。「性格」なんていっても、外見によってほとんど判断されてしまう。同じ行動をとっても外見が良ければプラスに判断され、外見が悪ければマイナスに判断される。人間の女性が男の「内面」とかそういうものを真剣に評価しはじめるのは、彼女自身の肉体の商品価値が落ちてから……つまり年を取ってからであることが多い。しかも、それだって一部の知性的な女性だけだ。

もちろん女ばかりでなく、男の場合だって同じだ。同じどころか男のほうがより女の「見た目」や「若さ」だけにこだわる。経済的安定の基盤を女性に求めたりしないからだ。

だいいち性格だって基本はDNAからの遺伝情報で決まってしまうわけだし、何割かは環境要因だがそれだってどんな環境に生まれてくるかは本人の意志とは無縁に強制的に決定されてしまうのだから、これも「社会学的遺伝要因」と言っていいだろう。

社会学的要因はさておき、「人間が相手の見た目で好悪の判断をして、恋をする」という現象はすべて、DNAがそう定めているのだから、つまり生理現象なのだから、説教したり反省したりしたところで容易に改まるわけもない。

その上、すでに述べたように、情熱恋愛の期間は一七ヶ月で終わるのだ。だから恋愛にハマった人間は永久に浮気をやめられない。

つまり「恋愛」という理想は、理性によって「生殖」にまつわる本能を抑制し、理想郷を実現しようとしたのだが、残念ながら本能を克服できなかったのだ。近代の合理主義が人間

を「理性的存在」と規定してしまい、生物学的な要素に関して無知だったからだ。
本能を克服するどころか、「恋愛」という理想化された概念が現実に適用されたために、さらなる性淘汰競争を招いてしまったのだ。我々は「恋愛という理想を実現するために自分は人間相手に恋愛している」と信じて行動している。「自分は本能に支配されてセックス相手を探しているだけではないか」と疑ったりはしない。セックスしか頭にないテストステロン過剰男の場合、それを逆手にとって「愛している」と口先だけで女に言っておく。それだけで女は「これが恋なのね」と騙され、進んで男の肉欲処理に奉仕するという立場に収まるのだ。
「恋愛」というタテマエのせいで、我々人間は無意識のうちに性本能に支配されることになってしまったのだ。
現実恋愛の不可能性はすでに「ドーパミン一七ヶ月期限説」によって説明したが、恋愛感情が相手の「外見」によって大きく支配されていることについても少し述べておこう。人は見た目が九割なのだ。ことに恋愛においては。下手したら一〇割かもしれない。

❖赤ん坊でさえ外見に執着する

ナンシー・エトコフの『なぜ美人ばかりが得をするのか』（木村博江訳）によると、自由恋

愛・現実恋愛を大々的に市場に取り入れた現代社会では、人々はまるで動物に退化するかのように自らの、そして異性の「外見」に執着するようになってしまっているという。

美はあらゆる人間に原始本能を目覚めさせるようだ。一九九六年の調査では一年間に六九万六九〇四人のアメリカ人が、みずから進んで美容外科手術を受けたと報告されている。皮膚を破く、皮膚を焼く、脂肪を吸いとる、異物を埋めこむなどの手術である。一九九二年に食品医薬品局がシリコン移植を制限する以前には、連日四〇〇人の女性がその手術を受けていた。豊胸手術はかつてはポルノ女優が受けるものと相場がきまっていたが、現在ではハリウッド・スターにとっては当たり前で、ふつうの主婦が受けることも珍しくなくなっている。

人々は美の名のもとに極端なことにも走る。……〈中略〉……ブラジルでは、兵士の数よりエイヴォン・レディ（エイヴォン化粧品の女性訪問販売員）のほうが多い。アメリカでは教育や福祉以上に、美容にお金がつぎこまれる。莫大な量の化粧品――一分あたり口紅が一八四八本、スキンケア製品二〇五五個――が、売られている。アフリカのカラハリ砂漠のブッシュマンは、旱魃のときでも動物の脂肪を塗って肌をうるおわせる。フランスでは一七一五年に、貴族が髪にふりかけるために小麦粉を使ったおかげで食糧

難になり、暴動が起きた。美しく飾るための小麦粉の備蓄は、フランス革命でようやく終わりを告げたのだった。

世界が集団狂気に陥っているのか、この狂気になにか法則があるのかのどちらかだ。人は外見にとらわれずにいられない。心の底では誰もがそれをわかっている。『ヴォーグ』『GQ』『ディテールズ』などのファッション雑誌、ケイト・モス、ナオミ・キャンベル、シンディ・クロフォードの写真をすべて焼き払ったとしても、まだ若く完璧な肉体のイメージは私たちの心にこびりつき、それを自分のものにしたいという欲望が頭をもたげるだろう。例外はひとりもいない。

（ナンシー・エトコフ　木村博江訳『なぜ美人ばかりが得をするのか』）

「ブッシュマン」という映画はアフリカのブッシュマン（今では「コイサンマン」と呼ぶようになっている）がアメリカの大都会へ行くというカルチャーギャップを描いたコメディだったが、ブッシュマンよりも実はアメリカ人の方が「原始的」だ。文明が「進歩」した結果、肌に塗るつつましやかな量の動物の脂肪が工業生産品のスキンケアクリームに化けたのだから。

人間は太古から自分の、そして他人の「容姿」に異様な執着を抱き続け、そして、文明社会はその強迫神経症を治療するどころかますます悪化させていく一方なのだ。真に「文明

的」な社会では、人間の外見は単に個人を識別するための「記号」にすぎないはずである。しかし現実はどうだろう。全く逆だ。というより、外見に対する執着はますます深まるばかりだ。人間の精神性や叡智は年々確実に後退している。
人間が根源的に持っている美醜感覚とＤＮＡおよび脳内ホルモンとの正確な関係はまだブラックボックスに入れられたままで解明されていない。しかし、恋愛状態……異性に対して起こるドーパミン過剰分泌状態……が、相手の外見の美醜と密接に関連していることは間違いないだろう。これは学習の結果なのか、本能なのか？

心理学者ジュディス・ラングロワは、学習など必要ないという説をとっている。美に対する好みは生まれつきのものであり、赤ん坊でさえ美しいものを見わけると言うのだ。ラングロワは人びとの顔を写したスライドを数百枚用意し、まずは大人たちにそれぞれの魅力の度合を評価してもらった。すると彼らは大人が高い評価をつけた顔を、より長いあいだ見つめた。赤ん坊は複数の顔の中から美しいものを識別する。彼らはアフリカ系アメリカ人、アジア系アメリカ人、白人の別なく、魅力的な男性、女性、赤ん坊をより長く凝視する。この事実は、乳幼児が美しさを感知すること、そして人間の顔には人種的ちがいを超えて共通した普遍的な美の特徴があることを示唆している。

ラングロワは乳児が、自分の知らない美しい顔に反応した点を強調している。赤ん坊にとって身近な人は自分の生存にかかわる重要な存在なので、その顔が美しいかどうかで赤ん坊の行動が変わることはない。また、美人の母親をもつ赤ん坊がとくに美しさに敏感なわけでもない。赤ん坊は母親が美人であるなしにかかわらず、美しい顔のほうを長く見つめたのだ。

（ナンシー・エトコフ　木村博江訳『なぜ美人ばかりが得をするのか』）

つまり、「白人女性が一番綺麗だ」とか感じるような「人種的好み」は学習によるものらしいが、「この顔が美人で、これはブサイク」と感じる根源的な美醜感覚は生まれつきインプリンティングされているらしい。

どうも「子供の目は誤魔化せない」というのは本当らしい。

逆に、大人が子供に「かわいらしさ」を感じるのも、本能の一種のようだ。人間がかわいらしさを感じる要素は、コンラート・ローレンツによれば「柔らかい肌」「柔らかい髪」「大きな目」「ぽっちゃりしたほっぺた」「小さい鼻」「大きな頭」「小さくてぷにぷにした手足」である。赤ちゃんは、これら全ての要素を備えている。明らかにこれらの「かわいらしさを感じる外見要素」もまたＤＮＡによって本能的にインプリンティングされているのだ。恐らく「かわいい」という感情が喚起されると、癒しホルモン・愛着ホルモンが分泌され、暴力

ホルモンであるテストステロンが抑制されるのだろう。
ちなみに、これらの要素を備えていない赤ちゃんは母親に愛されないのだそうだ。

❖「脳内革命」の時代

もちろん外見とは無関係な男女関係というものもある。全ての場合で「見た目」が九割というわけではない。

男女ともに見かけのよさが優先されるのは、長く深い関係の場合よりも一時的な軽い関係の場合に多い。男性は女性以上に複数の相手と軽い関係をもつ傾向が強いため、必然的に見かけにたいして強い心理が働くようになる。そして一時的な関係の相手にたいしては、女性の場合も大きなちがいはない。長くつづく関係の場合はどうだろう。アメリカでおこなわれた調査では、測定尺度三（必要不可欠）からゼロ（重要ではなく無視できる）で計ると、長期にわたる相手の容姿の重要度を男性は二・一一と評価し、女性は一・六七と評価した。三七の文化圏で比較してみると、やはり男女で差はあった――見かけの重要度を男性は一・八六と評価し、女性は一・四七とした。

（ナンシー・エトコフ　木村博江訳『なぜ美人ばかりが得をするのか』）

かつて元々は、Y染色体をバラまかなければならない男のほうがハーレム本能・乱交本能が強いため、男のほうが女より異性の「見た目」にこだわっていた、ということらしい。もちろん近年では男女平等化が進んだので、男も女も大差はない。また、「短い関係」では「外見」が重要で、「長い関係」ではそれほどでもないということは、短期関係すなわちドーパミンが分泌される「恋愛期間」の一七ヶ月においてより「外見」が重要だということを意味している。情熱恋愛の感情は、つまりドーパミンは、異性の「外見」に強く反応するのだ。

翻（ひるがえ）って、すでに述べたように恋愛の期間を過ぎるとドーパミンは抑制され、愛着ホルモンが分泌される「愛着」の期間が始まる。この期間はずっと長続きする。そしてこの期間に移行すると、あまり相手の外見は関係なくなってくるらしいのだ。

例えば見合い結婚の場合、相手の容姿に情熱恋愛感情を喚起させられないので最初は幻滅するかもしれないが、長年一緒に連れ添っていれば相手の容姿に関係なく愛着ホルモンが分泌されるようになって関係が安定する確率が高い、と思われる。

一方、恋愛から結婚へ移行する場合、最初は相手の容姿によってドーパミンを分泌して快感を感じられるが、一七ヶ月以内にその時期は終わる。そしてそこから愛着期間へ移行するのだが、恋愛中毒（ドーパミン中毒）になっている人の場合、次のドーパミンを求めて別の相手と新しく恋愛をはじめなければならなくなる、というわけだ。

そして、ここが重要なのだが、恋愛では結局最初の「見た目」が重要なので、醜い人間はまず恋愛関係をはじめることができない。なんとか努力してつきあってもらったとしても、一七ヶ月保つかどうか。一七ヶ月を突破すれば醜かろうがなんだろうが愛着関係に移行できるのだが、自由恋愛のこの社会で相手がいつまで我慢してくれるのか。もっとも、お互いに醜くて他に相手が見つからないという場合は別だが……。

一方、美しい人間はあらゆる人のドーパミンを喚起させるので、周囲から引っ張りだこになる。一七ヶ月の間保てば結婚に移行するかも知れないが、お互いにドーパミン中毒をきたしている場合は一七ヶ月以内に次の相手へ乗り換えるだろう。これがいわゆる「モテる」状態だ。

このように恋愛自由市場において寡占・二極化が進む原因は、恋愛が「外見」によってスタートするように本能が定めているからに他ならない。

であるからこそ、化粧品やファッションや美容整形といったありとあらゆる「美の産業」が肥大し続けているのだ。現在は恋愛が自由化して男女が平等になってきたので、男だって「美」に取り憑かれている。というか、よほどの金持ちでない限り、ブサイクな男はモテないのだ。

その結果……現代の男はついに「経済戦争」と「美容戦争・恋愛戦争」の二つを同時に勝ち抜かなければならなくなってしまった。

現在、男性は年間九五億ドルを、美容外科手術、化粧品、フィットネス器具、染毛剤やヘアピースや植毛などの毛髪関連に使っている。若さをたもつのは職場で勝ち残るためだという説もあるが、彼らの動機は性の競争にもありそうだ。女性が自分の配偶者の競争仲間にまじって働く時間が増えると同時に、男性は武器をもうひとつ増やさざるをえなくなったのかもしれない。すなわち、彼ら自身の肉体的魅力である。

当然ながら、男女の関係には混乱と強い不満が生じた。離婚率は上昇し、片親の割合が高まり、子供のいない夫婦の数は大恐慌時代（一九二九年～三〇年代）以来最高を記録している。

（ナンシー・エトコフ　木村博江訳『なぜ美人ばかりが得をするのか』）

現代の男は、職場で富と女とを同時に奪い合わなければならないのだ。一つの戦線に出るだけでも疲れるのに、二方面作戦である。しかも結婚したからといって「恋愛戦争」は終わらない。現代人はセックスマシーンとしてセックスと恋愛を消費し続けることを半ば義務化されてしまっている。だから永久に恋愛しなければならない。永遠にセックスしなければならない。かくして、とうとう「ＬＥＯＮ」のようなチョイワル親父雑誌がヒットするようになってしまったのである。

いずれにしても、美容整形やファッションや化粧や肉体改造といった「人体改造」の流行

は、人間が（男女問わず）自分自身を「ドーパミン製造マシーン」に改造したがっている事実を示している。より多くの異性とセックスしなければならないという強迫観念に取り憑かれている。その原動力となっているのは、結局のところ、ＤＮＡ保存本能なのだ。男の本能はＹ染色体を保存しようとし、女の本能はｍｔＤＮＡを継承しようとしている。ところが、この章のはじめの方で紹介したように、先進国では出生率がのきなみ下がっている。これは「生殖のためのセックス」が廃れて「恋愛という名の、快楽のためのセックス」が主流になったからだ。「恋愛中毒」は家族制度を破壊し、人間をドーパミン中毒・テストステロン過剰へと追いやっているのだ。

フランス革命は食糧を独占する王侯貴族を打ち倒したが、二一世紀に起こる革命は「美」と「恋愛」と「セックス」を独占する階級と、それらを持たざる階級との間の闘争として勃発するだろう。ただし、それは武力革命という形では現れないだろう（「持てる階級」は目に見える支配者ではないからだ）。それではどういう形での革命なのか。そう。「脳内革命」だ。

昔、長嶋茂雄が『脳内革命』という本にハマっていたが、あの「脳内革命」とは関係ない。そもそも僕はあの本を読んだことがないし。

脳内革命とはつまり、「美」や「恋愛」や「セックス」や「暴力」といった過剰な精神エネルギーを、「脳内」で昇華するためのシステムを作り上げることを意味する。何度も書いたように、資本主義システムに組み込まれた現実恋愛至上主義は闘争を呼び、過剰なドーパ

ミンとテストステロンを分泌させる。その結果、人間はますます暴力本能と快感本能に支配されるようになり、動物化する。退化が始まるのだ。その先には絶滅が待っている。ナチス・ドイツに起きた悲劇が、全地球レベルで起きてしまうのだ。巨大なルサンチマンが、何もかもを破壊してしまうことになるだろう。すでにセックス産業超大国にして武力大国でもあるアメリカは世界各国から恨まれているし、そのアメリカの内部ではモテない男が学校を銃撃したり子供を誘拐して殺したり、といった凄惨な犯罪が跡を絶たない。

このような状況で人間……ことに「持たざる者」が発狂せず、ルサンチマンに囚われて暴走することもせずに静謐かつ幸福に生きていくには、「脳内」を鍛えるのがもっとも確実な道なのだ。

❖「脳内恋愛」に還る

近代恋愛は物語恋愛を「現実」へ逆輸入した結果生まれたことはすでに述べた。しかしそれは失敗だった。故に現代では、「脳内恋愛」「物語恋愛」の復興がはじまろうとしているのだ。

アキバ系とか萌え系と呼ばれる人たちは、いや「人たち」なんていうと他人行儀だが、中世ヨーロッパに出現したトルバドゥールの系譜に連なる「脳内恋愛者」たちなのだ。トル

バドゥールの歌う愛は、決して成就しない愛だった。騎士は婦人に忠誠を誓うが、拒絶され続けるのだ。そもそも彼らの歌は「物語」であり、イゾルデだって実在しない仮想キャラクターだ。トルバドゥールとその精神的親戚であるカタリ派は、ローマ教会があまりにも「現実」にこだわり、人々から想像力を奪ってドーパミン分泌を極限まで抑圧しようとしたことに対する反動として生まれてきた。

現代は逆ではないかという声もあるだろう。恋愛セックス資本主義市場は人間をドーパミン中毒・テストステロン過剰に追い込むシステムなのではないか、と。

しかし先ほど述べたように、自由恋愛はドーパミンを「持てる人」と「持てない人」に二分するし、それだけでなく本来文明人に必要な愛着ホルモンを慢性的に枯渇させてしまうシステムなのだ。ドーパミンを出し続けるということは、テストステロンが常に過剰になり愛着ホルモンが常に不足するということなのだから。だから、実際にはメディアが報道しているように「現実でモテないから萌えに走った」という人だけでなく（僕はこっちだけど）、現実の恋愛と並行して「萌え」も実践する人とか、現実の恋愛を重ねた結果「脳内のほうが優れている」と判断して「萌え」へ行く人だって大勢いるはずだ（僕の周りにはあまりいないが、それはきっと偶然というか「類は友を呼ぶ」の原理の故だろう）。

いずれにせよ現代人の脳内ホルモンのバランスは、完全に狂ってしまっているのだ。モテる者はドーパミンとテストステロンの過剰に追い込まれた中毒者になっており、そうでない

者は慢性的なドーパミン不足に陥り、愛着ホルモンを得ることも難しい。ローマ教会同様、恋愛セックス資本主義市場もまた、人間の脳内バランスを壊したわけだ。

だからこそ、カタリ派~トルバドゥールと同様に「脳内恋愛」によって自分自身に不足している脳内ホルモンを自己補完しようと試みる「脳内恋愛者」が現代に増加しているのだ！「現実恋愛」が猛威を振るえば振るうほど、脳内恋愛に走る若者たちは跡を絶たなくなるだろう。

いわゆる「萌え」のすべてが狭い意味での「恋愛」というわけではない。大別すれば、ドーパミン分泌型の脳内恋愛系（性欲込み）と、愛着ホルモン分泌型の癒し系の二種類がある。もっとも、現代の恋愛は恋愛感情と愛着感情がセットでついてくるというタテマエを持っているので、脳内恋愛でもこの両方を同じキャラクター相手に満たそうとする強引な試みが行われる。もちろんこれは大脳の構造に逆らった挑戦なので往々にしてうまくいかないのだが、それによって大きな悲劇が生まれるわけでもない。そこが現実恋愛と違う点だ。

脳内恋愛という言葉に語義矛盾を感じる人もいるだろうが、それは錯誤である。

脳内恋愛も脳外恋愛（現実恋愛）も、結局は「全く同じ現象」なのだ。

人間だろうが記号だろうが、何かに恋愛感情（ドーパミンの分泌）が喚起されれば、それはすべて「恋愛」なのだ。脳内で起こっている現象は全く同じだ。違うのは、ドーパミン分

泌のスイッチを入れる媒介が、生きた人間であるか、架空のキャラクターであるかだけでしかない。そもそも人間であれアニメのキャラクターであれ、いずれも網膜に映った瞬間に脳内での二次元映像に変換される。もし人間が対象に手で触れなければ恋愛できないのであれば仮想キャラへの恋愛感情喚起は不可能になるが、恋愛感情にとってもっとも重要な要素が「視覚」であることはすでに説明した。

またドーパミン分泌状態＝情熱恋愛は一七ヶ月で終わるが、対象が仮想キャラクターであれば、さらなるドーパミンを求めてあっさり次の対象に乗り換えても波風が立つこともなく他人を傷つけることもない。

ただし「萌え」の中でも「癒し系」が最近主流になりつつあるのは、現実社会の過剰なテストステロン攻撃によって生じたストレスを愛着ホルモンによって沈静化させようとする本能的なバランス感覚の故なのかもしれない。

もちろんドーパミンだって不足すればいろいろと不都合が出る。快感や行動への欲求が不足すれば、鬱になりやすいだろう。しかし脳内恋愛を実践して自分でドーパミンを分泌させられるようになれば、そのような不都合は解決できる。しかも、自力でだ。

つまり、「精神の健康（脳内ホルモンのバランスの安定）」という目的のためであれば、恋愛対象が「脳外」であろうが「脳内」であろうが同じだ、ということだ。もちろん「脳内恋愛」は「生殖」という目的から外れてしまうが、例えば、

◎脳外ではお見合い結婚して子供を育てる
◎恋愛は脳内で行う

　という社会システムを作ってしまえば、万事解決である。男の浮気性も無くなるだろうし、テストステロン過剰も抑えることができる。実は男のテストステロンは結婚して家庭を持つと減少するのだ。もちろん家庭が不安定になってしまうとそうでもないが、安定すれば確実に男の暴力性は抑制される。原因は愛着ホルモンの分泌が行われるようになるからだろう。

　要は、人間の異性に対して恋愛を追い求めるから、何もかもが狂ってしまったのだ、だからもう一度「脳内恋愛」の原点に回帰しよう、ということである。そしてそのための仮想キャラクター、物語コンテンツは、無数に作り続けられている。漫画、アニメ、ゲーム、小説、映画……。肝心なことは、これらの「物語」と現実とを完全に区別して考える習慣を身につけることなのだ。よく「アニメファンは現実と妄想の区別がつかない」と言われるが、そしてそういう人もたまにはいるが、実は映画やテレビドラマと現実の区別がついていないOLのほうが圧倒的に多い。これは映画やドラマが「実写」だからだ。アニメより実写のほうがよりリアルである（当たり前だが）。だからこそ、勘違いが起こりやすいのだ。むしろ最初から絵であることが丸わかりのアニメや漫画のキャラクターに恋愛するほうが安全だ。さ

すがに現実と混同するのは難しくなるから。
　人間相手には、わざわざ情熱恋愛を行う必要はない。長続きする愛着関係を作れればそれで良いのだ。つまり、人間相手の情熱恋愛を一度放棄してしまうことによって、逆に壊れてしまった男女関係が修復できる可能性が見えてくるのではないか、と僕は言っているのだ。人間の男女は、なんとなく見合いしてなんとなく一緒に暮らして子供を育てる、という程度の関係で構わないのではないか。そこに「トリスタンとイゾルデ」や「ロミオとジュリエット」や「タイタニック」みたいなドラマティックな情熱恋愛などを追い求めるからこそ現代の男女関係は滅茶苦茶になってしまったのではないか。我々はそもそも、人間の異性に情熱的な恋愛感情や破壊的な性欲衝動を感じる必要などないのだ。むしろそんな過剰な感情を人間に対して抱かないように自分の脳を創りあげるほうがよい。……と書くとローマ教会みたいだが、もちろんだからといってDNAが要求してくるドーパミンやテストステロンを無理に抑圧しようというのではない。それらを分泌させるための行動を「脳内」で秘密裏に処理すればいいのだ。
　人間との現実恋愛は、「人間の本能に反している」のだから。
　さりとて、暴力でメスを獲得する原始時代に退行するのも、やはり間違いである。「人間の本能に支配される」状況もまた、我々人間が望むことではない。だからこそ人間は文明を作ったのではないか。

となれば、現実と仮想世界の二つの世界を行き来しながら、脳内ホルモンのバランスと現実における本能暴走の抑制という二つの難問を同時に解決する。これが最も理性的かつ効率的な解決策ということになる。人間が文明を興し、想像力を発達させて物語という仮想世界を発明したのは、そもそも「性淘汰」や「生存競争」というDNAが課した「呪い」を無力化するためだったのではないだろうか。

茂木健一郎はワーグナーのオペラ「トリスタンとイゾルデ」を鑑賞した際に、このような感想を述べている。

現代の人間も、「トリスタンとイゾルデ」のような作品に込められた仮想のヴィジョンの真実性を受け止めることは知っている。東京でも、ロンドンでも、ニューヨークでも、成功した「トリスタンとイゾルデ」の上演の最後には、暴動が起きるのではないか、新しい宗教がそこに誕生するのではないかというくらい、聴衆が熱狂する。『たけくらべ』を読んで心を動かされるのも、つまりは同じことである。現実のどこにもない仮想は、現代人の心の中でも中枢の位置を占めている。

もちろん、私はここでいたずらに神秘主義を主張しているのではない。もっとも驚くべきことは、一見無限定に見える仮想の全てが、空間的にはきわめて限定された頭蓋骨の中の、一千億の神経細胞の活動によって精密に生み出されている「脳内現象」である

という点にある。
近代科学の明らかにしてきた、局所的因果律に基づく世界観は、おそらく揺らぐことはない。その揺らぐことのない科学的世界観の精密な局所的因果律に基づく脳の変化に寄り添って、美登利の心のゆらめきも、イゾルデの愛の死のヴィジョンも、この私の日常のとるに足らない小さな思いも生み出される。
私たちの精神は、頭蓋骨の中の「今、ここ」の局所的因果律の世界と、「今、ここ」に限定されない仮想の世界にまたがって存在する。
私たちの精神は、本来的に二重国籍者なのである。

（茂木健一郎『脳と仮想』）

『トリスタンとイゾルデ』という物語は、理想的な「恋愛」を我々に与えてくれる。そして我々は「トリスタンとイゾルデ」を鑑賞することによって感動し、ドーパミンを多量に分泌させて興奮し、アリストテレスが言ったように「カタルシス」（浄化作用）を得るのだ。アニメを観るのもゲームをやるのもそれと全く同じことだ。「トリスタンとイゾルデ」は古典で、アニメは現代の大衆文化だから、前者は「教養」後者は「オタク」と区別をつけられるが、脳内で起きている現象は同じだ。「トリスタンとイゾルデ」だってそもそも最初に上演された時には「現代大衆文化」だったではないか。

それはともかく、現代人の不幸は、「トリスタンとイゾルデ」を「本気にした」ことにあったのだ。メディアの発達によって現実と妄想の境界を喪失してしまった現代では、茂木健一郎のように「現実」と「仮想世界」の区別がきちんとついている人は、数少ない。「自由と平等」という理念は、「人間に生まれた者は、誰もが自ら『トリスタンとイゾルデ』の主人公（またはヒロイン）になる資格を持つ」という巨大な錯誤を生み出してしまった。ここには、もういちいち繰り返さないが、あらゆる錯誤が詰まっている。トリスタンとイゾルデはドーパミン中毒に冒されて熱狂し、社会適応への道を見失った「病人」なのだ。例えば「殺人」があくまで物語の中で昇華されねばならぬのと同じに、恋愛もまた物語の中のみで昇華されるべきものだったのだ。

我々は、二一世紀に復活した脳内恋愛運動によって「恋愛セックス資本主義」のシステムを衰退させなければならないのだ。

Ⅱ　評論篇　脳内恋愛の諸相を探る

1 「転身物語」と「電影少女」
ピグマリオン

古代ギリシャ神話は、仮想キャラクターに萌える脳内恋愛システムを含んでいた。父権的な一神教であるキリスト教がヨーロッパを支配する以前には、ギリシャ・ローマ文明をはじめとするヨーロッパ世界は多神教的な「妄想の自由」を謳歌していたのだ。故にギリシャ・ローマには大量の美少女・美女・美少年・美青年キャラクターが登場し、人気を競い合っていた。

しかしヨーロッパのキリスト教化は、仮想キャラクターに恋いこがれるという脳内恋愛文化を抑圧した。キリスト教、特にカトリック（ローマ教会）では、神は「父なる神」ただ一人であり、神と「三位一体」を構成するキャラクターは神の息子イエス・キリストと「精霊」だけだとされた。ギリシャ神話では、オリンパスを支配する最高神ゼウスにも嫉妬深い奥さんヘラがいて、さらに多士済々の神様キャラクターが勢揃いしていたことを思えば、ローマ教会がいかに人間の想像力を抑制することに気を配ったかがうかがえる。そしてその抑制の方法の一つとして「仮想キャラクターに萌える」という行為つまり脳内恋愛の禁止が

あったのだ。唯一の例外はイエス・キリスト崇拝のみであった。ただし、イエス崇拝とて初期の教会では「偶像崇拝」であるとして禁止されていたのだ。東方正教会はかつて蔓延するイエスの偶像（イコン）を徹底的に破壊しようとしたし、イコンの破棄を断念したのちにもイコンの描き方に関する厳密なルールを定めて人々の妄想力が自由に発達しないように腐心した。一方のローマ教会＝カトリックは比較的早期からイエスの偶像を描くことを許可せざるを得なかったが、その結果、やがて「処女マリア崇拝」や数々の天使キャラクター崇拝といった古代異教の多神教的妄想文化が復活してしまった。故にカトリックはキリスト教宗派の中でもいちばん異端に悩まされた。プロテスタントも、もともとはローマ教会のマリア信仰を「偶像崇拝」であるとして抗議した一神教原理主義的な一派だったのだ。

なぜ一神教は「偶像崇拝」を禁止するのか？　一神教とはただ一つの規範で個人の自我を縛ることで、統制された文明・安定した社会を造り出そうとする試みだった。そこでは、自由な想像力・奔放な妄想力は抑制されなければならなかった。自由な妄想は、統制のとれない混乱した状況を造り出すからだ。このことは旧ソ連のような社会主義国家を思い返しても容易に理解できるだろう。思想統制と偶像崇拝禁止は、同じ抑制政策の裏表なのだ。本書の第一部に沿って考えると、人間の過剰な妄想力と攻撃性……ドーパミンとテストステロンを「教義」によって抑制して、人々を羊のように善良で従順にしようというのが、キリスト教の元々の志向だった。仏教や儒教もそうだが、過剰な妄想・過剰な欲望を一種の中毒症状・

苦悩の原因となる迷妄だと考えて、これを理性と修行によって抑えつけるというのが、紀元前後に誕生した世界宗教に共通する特徴だった。

ギリシャ人・ローマ人は裸体やセックスを罪悪視するという抑制的・禁欲的なキリスト教文化とは全く無縁だった。ギリシャの「美の女神」アフロディテ（ヴィーナス）は、もちろん裸だった。後にヨーロッパではメディチ家を中心としてギリシャ・ローマ文化の復興……ルネサンスが興るが、ルネサンス期の芸術家たちはこぞってヴィーナスを描きまくった。中でもボッティチェリの「ヴィーナスの誕生」が有名だが、要はルネサンスで起きたことというのは、芸術家たちが古代ギリシャ・ローマを再発見し、そこで実践されていた「仮想キャラクターへの脳内恋愛」および「仮想キャラクターの裸体を観て興奮すること」を「思い出した」ということなのだ。

つまり、仮想キャラクターへの偶像崇拝という行為によって、脳内でドーパミン分泌……恋愛状態と、テストステロン分泌……性欲向上とが発生するということを、ルネサンスは再発見したのだ。もちろん、そのような脳内恋愛は人間を極力安定した状態で静かに暮らさせようとしていたキリスト教の教義に反する。ボッティチェリの「ヴィーナスの誕生」は、当時の社会にあたかもアダルトビデオやロリコンポルノ漫画の如き衝撃を与えた。しかし、ルネサンス期の面々はローマ教会の目を誤魔化すため、「芸術」といううまい「言い訳」を発明したのだ。現代でも、例えばセックスを描いても「芸術映画」ならそれは「美」で、アダ

ルトビデオやピンク映画ならそれは「猥褻（わいせつ）」というよく判らない社会規範が残っているが、それはルネサンス期にヴィーナスの裸体を見て萌え、かつ・あるいは興奮していた面々が造り出した言い訳が現代にも生き残っているという証拠なのだ。

ギリシャ神話の中でも特に異色といえるのが、ピグマリオンの物語だ。ピグマリオンはキュプロスの王（または彫刻家）で、大の女嫌いだった。しかし女嫌いと言っても、同性愛者だったわけではない。ピグマリオンの頭の中には、「理想の女性キャラクター」が住み着いていたのだ。ユング心理学風に言えば、ピグマリオンは自らのアニマ（男性の精神の中に存在する女性性）に恋していたのだ。しかし、現実の女性はピグマリオンのアニマを投影する資格を持たなかった。理想を満たしてくれる女性が現実に存在しないのなら、自分で創ろうということになったのだ。

現代の心理学者や社会学者は「長年、現実の異性と恋愛しないで独身を通していると、だんだん理想ばかりが高くなっていよいよ恋愛できなくなる」「だからハーレクインロマンスの読み過ぎはよくない、脳内恋愛をすると現実恋愛ができなくなる」と分析したりする。その元祖的存在がピグマリオンなのだ。彼は現代の「アキバ系」の遠いご先祖様にあたるのだ。そして、アキバ系の現代人がガレージキットやドールに夢中になるように、ピグマリオンもまた自らの創る女の子キャラクター彫刻に萌えていた！

そもそも芸術の出発点は、脳内にしか存在しない仮想キャラクター（すなわち、プラトンの言うところの「イデア」）に「絵」や「彫刻」や「物語」という「形」を与えることなのだ。形を与えることで、芸術家は自らの脳内キャラクターをこの現実世界に降臨させようとしているのだ。芸術とは、一種の魔術なのだ。

さてピグマリオンはある日、ついに究極の恋人像を完成させる。もちろん、モデルなど存在しない。彼自身の脳内に住み着いていた理想のアニマを彫刻という形で現出させることに成功したのだ。そしてピグマリオンはついに一線を越える。現実と妄想の区別が本当につかなくなり、自分で作った彫像にキスしたり贈り物を捧げたりして求愛しはじめたのだ！

誰だっていくら萌えてもフィギュアが動き出したりはしないことぐらい知っている。しかしピグマリオンは違ったのだ。ピグマリオンは、自分で作った彫像と結婚する、と決心してしまった。

もちろん、そんなことは不可能だ。

ピグマリオンは嘆き悲しみ、深い絶望の淵へ墜ちた。

中世の騎士物語では、恋愛は「絶対に現世で叶えられない不可能な恋」として詠われた。貴婦人たちは、騎士の求愛を冷たく断り続けた。この貴婦人と騎士の関係……「絶対に恋愛関係に陥ることのない永遠の片思い」という近代恋愛の原形は、実はピグマリオンの物語なのではないだろうか。ギリシャ神話では、たいていの恋愛はあっさり成就するし、最終的

に悲恋に終わるにしても一度はくっつくのが基本パターンである。「絶対に手に入らない苦悩」を描いた恋愛エピソードは数少ない。ピグマリオンという例外を除いて。

つまり騎士物語の恋愛は、ピグマリオンの脳内恋愛がベースになっていて、萌える対象が彫像から貴婦人に変更されたものなのだ。

さて現代の漫画であれば、ピグマリオンはマッドサイエンティストの元を訪れて「この彫像を動かしてくれ」と懇願するところだが、ギリシャ神話ではもちろん祈る相手は神様である。ピグマリオンはアフロディテに祈った。祈り続けた。するとアフロディテはピグマリオンの祈りを聞き入れてくれた。ピグマリオンがあまりにも絶望していたので、アフロディテは同情したのであろう。

こうしてピグマリオンが創った彫像は……命を吹き込まれて、動き出した！

というわけでピグマリオンは彫像の奥さんにガラテアという名前を与え、結婚した。さらにパポスという名前の子供も作ったのだった。

「想像上の仮想キャラクターに恋愛する苦悩」「仮想キャラクターが現実の異性に変身しないかという夢」は、近年の物語でも数多く描かれている。僕の学生時代には「週刊少年ジャンプ」で「電影少女」（桂正和）という漫画が連載されていたが、この漫画では主人公の弄内くん（読みはモテウチだが、モテナイと呼ばれることもあった……）はレンタルビデオショップで借りてきたアダルトビデオに出演している少女に恋をしてしまう！　すると、その女の

子（天野あいちゃんという名前）がブラウン管から現実世界へ抜け出してきて、弄内くんと同居生活をはじめてくれるのだ！　天野あいは、未来人が造り出したプログラム……仮想人格キャラクターだったのだ。弄内くんは言うまでもなくあいちゃんに恋をするが、そこに「彼女は人間ではなくビデオテープに記録されているプログラムにすぎない」という大きな障壁が立ちはだかる。「神様の奇蹟」が「未来人の科学」に変更されている点はやはり現代的だが、「仮想キャラクターに恋をして、彼女を人間にしてくださいと祈る」という物語の構造はピグマリオン物語と同じだ。

脳内恋愛の対象が「彫刻」なら芸術で、「アダルトビデオ」なら猥褻だ、というのが現代の倫理規範のベースとなっているキリスト教的価値観だが、いずれも「脳内の仮想キャラクターに恋愛する」という全く同一の行為なのである。ギリシャ時代にはビデオやテレビといった文明の利器はまだ発明されていなかったというだけなのだ。

なお、ありとあらゆる萌えシチュエーション・萌え属性を描き尽くした手塚治虫もピグマリオンものを描いているが、それは「男の子の鼻から出てきたエクトプラズムをダッチワイフの中に詰めたら、生きている女の子ドールになった」というシロモノだったので面白すぎて読者は誰も萌えられなかった。

2『饗宴』の両性具有論と「らんま1／2」

両性具有

ヨーロッパに大きな影響を与えたギリシャ哲学者には、プラトンとその弟子アリストテレスの二人がいる。プラトンは「イデア界」という「この現実世界とは異なる理想の異世界」なる妄想のアイデアを形而上学という論理体系にまとめた人で、世界最古のオタク理論家の一人といっていいだろう。プラトンについては後述する。アリストテレスは師匠プラトンがあまりにも非現実的なイデア界にこだわりすぎたことを反面教師として、地に足が着いた現実主義的な世界観を構築した。中世初期のヨーロッパにおいては、神の国について語るキリスト教神学は仮想世界主義者だったプラトンから出発した新プラトン主義と相性が良く、神学と哲学とは共に手を携えて発展していった。しかし中世の後半になると東方からアリストテレス哲学が逆輸入され、アリストテレスの現実主義的な世界観が、中世スコラ哲学が構築した神秘主義的な世界観を破壊していくことになった。

それはさておき、プラトンは『饗宴』という著作の中で、「恋愛とは何か」という命題について様々な論説を紹介している。プラトンの思想の中心には「現実世界・対・イデア界」

という二元論的対立があったが、イデア界とは何かという問題を考えるにあたって、「恋愛」は決して避けて通れないテーマだったのだ。プラトンが「イデア界」というアイデアを得た背景には、人間の精神がこの目の前の現実世界ではない「どこか」に常に引きつけられているという経験的直観があった。つまり、人間には過剰な想像力・妄想力があり、決して現実世界のみに甘んじて生きてはいられない、生きる限り「どこか」に憧れ続け妄想し続けなければならないように造られている、とプラトンは気づいたのだ。

ここで、「人間が最もその想像力・妄想力を発揮する状況」というものを考えてみると、その中にはやはり「恋愛」という現象が必ず立ち現れてくる。日頃はおとなしく淡々と日常を生きている人も、ひとたび恋愛に陥れば別人のように想像力過多となり、エネルギー過剰となり、非日常の世界へ没入してしまう。「神話」や「芸術」などの妄想活動の多くは、この現実の許容量に対しても過剰すぎる恋愛感情を消費するために生まれてきたといっても過言ではない。ことに地中海のギリシャ世界ではそうだった。過酷な砂漠の地に生まれてきたユダヤ教とは異なり、暖かい気候と豊饒な土地に恵まれていたギリシャでは、「生き延びるための哲学」は必要とされず、「より良く生きるための哲学」が発達したのだった。

そもそも、人間が他の動物と同様に本能のみで生きているのであれば、「ただ生きるだけ」で「勝ち組」だったはずだ。しかし人間は、ただ生きているだけでは満足できない。それは、人間には高度な知性があり、過剰な想像力があるからなのだ。「恋愛」もまた、人間が

抱えた余計であり過剰なのだ。故に恋愛論とは常に「人間とは何か」という問題を論じるものになる。

『饗宴』におけるプラトン自身の思想については後述するとして、ここでは有名なアリストパネスの恋愛論を紹介したい。アリストパネスの説によれば、人間は元々男と女が一心同体となった両性具有者（アンドロギュノス）であった。ところが嫉妬深いゼウスが人間を男と女とに分裂させてしまったため、人間は失われた自らの半身を求めるようになったのだ、という。

つまり人間はかつて「全き者」だったはずなのに、男女という二つの性に引き裂かれてしまったことによって欠けた者になってしまった。故に異性を求め続けなければならなくなった、というのだ（なお、同性愛者の場合は元々二人の同性が「全き者」として結合していたという）。

この話はプラトン自身の説の「前振り」でしかなかったのだが、後世にも大きな影響を与えた。ユングは、男性の精神には女性性（アニマ）が隠されており、また女性の精神にも男性性（アニムス）が隠されていると提唱した。つまり、人間の精神は本来、両性具有的なものなのだという。しかし社会においては、生物学的な二つの性（セックス）にそれぞれ、男性性と女性性が振り分けられることとなった。これが社会学的性差（ジェンダー）である。ジェンダーは、生物学的なセックスとストレートに繋がっているわけではなく、社会が規定

する「男らしさ」「女らしさ」をそれぞれ過不足無く分業させるために発明された、と考えられる。もちろんジェンダーの根底にはセックスがあり、多くの場合はセックスが男の場合はジェンダーも男になる。しかし、時々セックスは男だけどジェンダーは女という人もいて、そういう場合は何やら小難しい症候群の名前が与えられるのだ。

また、生物学的にも、元々男性も女性も発生の途中までは同じルートを辿っていて、途中で分岐するということが判っている。全く異なるように見える二種類の外性器……女性器と男性器は、元は同じ器官なのだ。男は、はじめは女なのであるが、母親の胎内で男性ホルモンの大量分泌を受けて無理やり男にされてしまうのである。

このように社会学的にみても生物学的にみても、「男」ないし「女」はいずれも「人間」という種族の「片割れ」でしかないことは明らかであって、あらゆる人間は何はなくとも異性（同性愛者の場合は、同性）のパートナーを得なければ「人間」として良き人生を生きることはできない、という強迫観念を抱いて生きなければならないのだ。この強迫観念の半分はセックスが要求してくる本能的欲求（性欲）であり、半分は自らに与えられたジェンダー的役割を果たさなければならないという社会的要請＝「男は男らしく」「女は女らしく」という思いこみである。このジェンダーからの要請から逸脱すると、性的錯誤者とか不適応者とかいった少数派のレッテルを貼られて「正常者」と区別されるのだ。カタリ派が異端として狩られるのと同じに（実際、ローマ教会は同性愛者を非難していた）。

社会が両性具有の達成を阻害する最大の理由は、生殖の問題であろう。もし人間がアリストパネスの言うような両性具有者になれば、もはや異性を求めて生殖行為にいそしむ必要を見失うだろう。そうなれば生殖活動が行われなくなってしまう。故に社会は、人間に「ジェンダー」を与えた。本来は両性具有的な精神を持っていた筈の人間は、男と女に分割され、抑圧された「異性性」を獲得して「全き人」になるために永久に外部の異性を求め続けなければならなくなったのだ。

人間の恋愛は本来、脳内恋愛……自分自身の内面に存在する異性性への恋愛なのだ。ギリシャ神話にもナルキッソスが登場する。ナルキッソスは泉に映る自分自身に恋をして、一日中自分の姿に見とれているうちにやつれて死んでしまう。自分の鏡像に恋をするナルキッソスや、自分で創った彫像に恋をするピグマリオンの物語は、人間の恋愛が単純な生殖本能（性欲）だけでは割り切れない、過剰にして余計な妄想力・想像力によって生み出されていることを示している。

キリスト教文化が人間の想像力を抑え込もうとした一因は、人間の過剰な精神を抑制して彼らを本能的な「生殖」に向かわせるためであったと思われる。実際、文明が爛熟したギリシャでは異性愛は程度の低いものとみなされ、壮年男性による少年愛志向がもてはやされていた。プラトンにしてもソクラテスにしても少年愛者である。もちろんキリスト教では同性愛は重い罪とされた。キリスト教文化は、人間の想像力を「生殖」という動物的本能本来の

ルートに流し込む作業を連綿と続けたのだ。人間の想像力を放置しておけば、彼らは何にでも恋をする。人間は、何にだって恋愛するし、何にだって発情もする。相手が彫像だろうが鏡像だろうが少年だろうが関係ないのだ。ヨーロッパ文明はキリスト教の価値観に基づいて生殖を目的とした成年異性愛のみを「正常」とし、それ以外を全て「異常」とした。故にフロイトが性欲と神経症の関連を研究するにあたって、彼はありとあらゆる性目的倒錯および性対象倒錯の様々な症例を並べなければならなくなった。

しかし、どのような倒錯でも起こりうるとはいえ、ほとんどの「倒錯者」は「外部」ないし「他者」を求める。社会はそのためにジェンダーを発明し、人間が決して自給自足で恋愛欲求を満たせないように彼らの目を外部へ向けさせ続けてきた。だが、ユングが気づいたように、実は異性性とは自分自身の内部に存在するイメージなのだ。我々が誰かに恋愛する場合、実は自分自身の理想の異性のイメージを相手に投影して恋しているにすぎないのだ。恋愛から愛着の段階に移行できれば、ようやくありのままの相手に愛着を抱けるようになっていくのだが、最近ではその前の段階で「相手が自分の理想と違っていた」と言って破綻してしまうケースが増えた。これは恋愛至上主義の弊害で、人間のパートナーに自分の完全な理想を投影できなければならないという誤解から「理想と違った」「イメージと違った」という不満が生まれるのだ。

結局のところ、理想の異性は外部には存在せず、自分の内面にしかいない。つまり恋愛を

突き詰めるとそれは脳内恋愛に帰結してしまうのだ。そうでなければ、この世界に溢れる無数の恋愛物語を誰が何のために消費してきたというのだろう。よもや世界中の「モテない男女」だけが「現実恋愛できない代償」として消費してきただけなのだと言い出す人はいまい。恋愛映画を観に行く観客の多くは、周知のように「カップル」なのだから。そう、たとえ人間のパートナーを見つけても人間の恋愛欲求は決して外界では満たされないのだ。故に人間と恋愛していようがしていまいが、脳内恋愛の物語は消費され続けなければならないのだ。

男らんま（左）と女らんま（「らんま1／2」③全38巻　コミックス累計5600万部
©高橋留美子／小学館・少年サンデーコミックス）

　かつて「週刊少年サンデー」に連載された「らんま1／2」という少年漫画があった。作者は「うる星やつら」で現代のアキバ系ラブコメの基礎を創った

高橋留美子。主人公の早乙女乱馬は「水を被ると女の子になってしまう呪い」にかかっていて、しょっちゅう水を浴びては女の子に化けてしまう。つまり一人で「男乱馬」と「女らんま」という二人の人間の人生を生きているから「らんま１／２」なのである。

この漫画がなぜ興味深いかというと、ファンが創った同人誌が面白かったのだ。八〇年代、同人誌文化の中では「うる星やつら」のヒロイン・ラムちゃんがセックスする漫画というのが流行っていた。「うる星やつら」は男子高校生・諸星あたるの家に、宇宙人の美少女ラムちゃんが住み着くという物語だったが、連載誌が少年誌（「週刊少年サンデー」）だということや作者・高橋留美子の志向性もあってこの二人は絶対にセックスしなかった。セックスどころか、愛を語らうことすらなかったのだ。あたるはラムを愛しているくせに、ひたすらラムから逃げ続ける。二人は一緒に暮らしているのに、絶対に結ばれないのである。

このオリジナルの原作がすでに騎士物語の現代版アレンジであることは明らかだ。異なる点は、主人公が貴族の騎士階級ではなく普通の高校生だという点、追いかけるのが男性ではなく女性で、逃げる側が男性になっているという点だ。これはまあ現代が民主主義でかつ男女平等主義（ということは、恋愛においては実際には女が強くなる）の時代だという理由からの変更だが、「うる星」の同人誌では、だからオリジナルの原作では絶対に見ることができない恋愛成就シーンが大量に生産されたのだ。

「うる星」の連載が終わると、すぐに同じ作者による「らんま」がスタートした。ここで「うる星」同人誌市場の描き手と読み手の一部がそのまま「らんま」に切り替わっていったわけだが、驚いたことに……本来は男である主人公の乱馬が女の子のらんまになって、他の男性キャラクターとセックスするというパターンが大量に生産されたのだ！　普通に考えて、漫画の主人公は読者が感情移入する対象として描かれているし、そのように読まれるのが一般的である。ということは、「らんま」ファンの一部は、両性具有キャラクター乱馬の中に「両性具有者としての自分自身」を見ていたということになる。もちろん、らんまを「恋愛対象」や「性欲対象」と見ていた男性読者のほうが圧倒的に多かっただろうが、その場合だってらんまが元々男だという重大な設定を軽々と乗り越えてしまっているのだ。オタク市場においては「らんま」の登場によって「男性性・女性性」というジェンダーのくびきが破壊されたのだ。

長年抑圧され続けてきた「両性具有」志向は、「らんま」というキャラクターによって現代に復活したのだ。そして、この「脳内両性具有」……「自らの内面にいるアニマ」の再発見は、以後の「脳内恋愛」文化の驚異的な復興に大きく寄与したはずなのだ。もちろん、脳内恋愛＝偶像崇拝は文化、特にキリスト教文化にとっては人間を生殖本能から遠ざける故にタブーであり、社会システムによって差別されなければならない異端ではあったのだが……。

両性具有者と脳内恋愛の相性がすこぶる良いことについては、他の作品（「オルレアンの少女」「リボンの騎士」「セラフィタ」）を引き合いに出しながら後述する。

3　カタリ派の弾圧とアキバ系差別
現実か仮想か

「Ⅰ　理論篇」でも書いたように、キリスト教文化＝ローマ教会が支配した中世ヨーロッパの歴史は、人間の過剰な想像力を抑制して静謐（せいひつ）な社会を実現しようとする試みの歴史だった。そのために偶像崇拝、ことに女神崇拝・女性崇拝はいっさい禁止され、天上の神はただ一人となり、その神の偶像を描くこともまた禁止された。後にイエス・キリストの偶像を創ることは許可されたが、それもまあキリスト教を布教する過程で生じた妥協の産物だった。原始キリスト教では、キリストの姿は「魚」という象徴的・記号的な形で表現されていたのだ。

しかし、人間の本能を宗教という理論体系つまり「言語」によって封じ込めることは不可能だった。一二世紀頃から、沈静を強要されてきたヨーロッパ社会に反動が来た。対外的には十字軍遠征という熱狂が始まり、内部ではカタリ派やアルビ派と呼ばれる現世＝肉体否定の異端宗派がこれまた熱狂的な勢いでヨーロッパ中に広まったのだ。このような情熱にうかされた者が異端として狩られないためには、修道院に入るしかなかった。カタリ派と修道院の違いは、ほとんど単にローマ教会に所属しているかどうか、体制の内側か外側か、だけの

違いであった。両者はいずれも「この世界ならぬ彼方の世界」に憧れ、萌え、エクスタシーを感じる禁欲童貞主義集団であった。長年にわたってキリスト教教義によって抑え込まれていたドーパミンやテストステロンが、イデアの世界を幻視するという形でいっせいに暴れはじめたのだ。

こうして、中世ローマ教会はヨーロッパ各地に「異端審問所」を設置することになった。異端の中でもっとも隆盛を誇っていたのが、南フランスで興ったカタリ派（アルビ派）だった。カタリ派は二元論宗教マニ教の流れをくむキリスト教の一宗派で、現実世界のいっさいを悪として否定し、物体を持たない精神世界のみを善の世界であるとして熱狂的に「脳内崇拝」した。もちろん教会は悪の殿堂だし、そもそもイエスは肉化などしておらず、現世に出現したイエスは幻想だと言うのだ！

また、教会は快楽のためのセックスは悪徳として断罪したが、それはセックスを「生殖」という生物本来の目的に向けさせるためだった。つまり「肉欲に耽っていないで、結婚して子作りしなさい」と主張していたのだ。これに対してカタリ派は徹底的な現世否定・脳内肯定の宗教だったので、セックスそのものを悪として断罪した。子作りのためのセックスすら悪と見なされた。子供を現世に産み落とすことさえ悪だったのだ。

このようなカタリ派の究極の童貞主義・処女主義と、トルバドゥールの情熱恋愛叙情詩が同時期に同じ地方で発生したということは、どういうことか。両者の間に繋がりがあった

のか、あるいは、同じ「脳内恋愛志向の復権」という爆発的な情熱が、ある者の場合は「宗教」に向かい、ある者の場合は「詩（芸術）」に向かったということかもしれない。両者ともに「童貞の脳内恋愛」を理想としていた。しかし両者の運命は大きく違ってしまった。自らの想像力を「恋愛詩」という形で表現した吟遊詩人たちは弾圧されることなく、現実世界そのものを否定したカタリ派はローマ教会から徹底的に弾圧され、最終的には十字軍を送られて全滅させせられてしまったのだ。

現実社会の権力を握り、社会体制の維持を目論んでいたローマ教会は、異端審問と十字軍によってカタリ派を殺し、あるいは改宗させ、ついには一人残らず滅ぼしてしまった。現世を支配する者にとって、現実を否定し脳内世界への飛翔を訴える人々は絶対に許してはならない悪だったのである。むろん悪といっても体制側にとって悪だというだけだが。「セックスしない罪」とか「子供を作らない罪」があったわけではない。しかし、このような現実ドロップアウト組が増殖するという現象は、体制維持派にとっては非常に厄介なことなのだ。だから教会は、「修道院」というドロップアウト組のための体制維持システムを整備しなければならなかった。

現代は資本主義社会であるので、例えば労働しない人間は差別される。最近では「ニート」とか「ひきこもり」と呼ばれている高等遊民の人々がそれだ。明治時代には「高等遊民」として憧れられていた「無職人」が、今では「ニート」と呼ばれて社会問題扱いされる

ようになってしまったのだ。

同様に、現代は恋愛セックス資本主義社会であるから、セックスしない人間とか恋愛しない人間もまた差別される。ありていに言えば、女の膣にペニスを挿入しようとしない男は異常者・変質者予備軍のレッテルを貼られるわけである。彼らは頭の中で恐るべき性倒錯に陥っており、すきあらば近所の幼女を誘拐したり女子高生を監禁しようと狙っている、というイメージがメディアによって量産され続ける。また、教会を「悪魔の殿堂」と見なして礼拝を拒否し、脳内で神に萌えたカタリ派が教会に弾圧されたのと同じく、現代の恋愛セックス資本主義市場に背を向けてアニメやゲームなどのコンテンツで「脳内恋愛」を行ういわゆる萌えオタクは、ただ脳内恋愛をしているというだけで異常者にカテゴライズされる。つまり「萌えオタク」と「童貞」と「変質者」を、メディア（現代の「教会」）は勝手に同じものとして結びつけ、弾圧するのだ。古くは「宮崎事件」の時からスタートしたこの「現代のカタリ派弾圧」は、「オタク＝童貞＝変質者」というマス・イメージを大衆に植え付けるために開始され、現在でも続けられているのである。

そして、その一方では『電車男』のような説教説話を垂れ流し、「オタク＝童貞であろうとも、人間女とセックスできる！」という改宗キャンペーンを張るのである。これもまた、ローマ教会がカタリ派の信者を改宗させるために行ったキャンペーンと同じである。カタリ派から金と権力に汚れていることを批判されたローマ教会の内部でも、清貧主義的な内部

改革勢力が登場し、カタリ派を取り込もうとしたのだった。清貧・禁欲・奉仕を旨とした修道院活動を行ったドミニコ会やフランチェスコ会である。しかし、内部改革は結局うやむやとなり、カタリ派に対抗して「清貧で厳格な教会活動」を実践しようとしたドミニコ会は、結局のところ異端審問官として大勢の人々を死罪にする側に回ったのだった。現代でもオタクを差別する言論活動をしている人間の多くが、そもそもはオタクであった。すなわち、文化人というポストに収まるためにメディアに尻尾を振ったオタクが、オタク狩りに回ったのだ。

キリスト教自体、元々は現世の棄却と脳内で神の国を幻視することを目的とした現実棄却・仮想世界崇拝の宗教だったはずだ。ところが現世での「権力」を握るとともに、逆に現実肯定側に回り、本来のイエスの教えに忠実たらんとした脳内萌えのカタリ派を弾圧する側になってしまった。この逆説的な構造は現代も同じだ。恋愛セックス資本主義が掲げる恋愛とは、もともとはトルバドゥールが歌っていた童貞恋愛・脳内恋愛だったのではないのだろうか？

この世に弾圧と差別を発生させる「悪」の原因は「教義」や「思想」ではなく、支配する「体制」そのものにあるのだ。「体制」とは自らを維持する目的のためには個人を圧殺するものなのだから。故に体制を打倒した救世主が創った次の「体制」もまた、同じことを繰り返すのだ。

4　ヒルデガルトと「オルレアンの少女」
神様に脳内恋愛した少女

キリスト教、というよりもローマ教会には「暴力・性欲・脳内恋愛の抑制」という一面がある一方で、他方では湧き上がってくる脳内恋愛の情熱を抑えきれないで妥協案・折衷案を作り続けるという一面もあった。いくら過剰な感情は罪だから抑制しろと人々に教えても、生理現象なのだから精神の過剰性を消し去ることはできないのだ。そこで、例えば結婚は「神の秘蹟」ということになり、神の意志である「生殖」以外の目的でのセックスは罪とされた。もちろん浮気……姦淫も罪だし、婚前交渉も罪だし、離婚も罪とされた。罪だらけである。近代以後の市民社会が史上稀にみる勢いで恋愛とセックスの中毒症状を呈したのも、ローマ教会による長期間に及ぶ抑圧の反動だと考えれば特に不思議ではない。

しかしキリスト教の世界観に組み込まれていても、脳内恋愛という本能的欲求を制御できない人は大勢いた。それらの人のうち、何割かは「神秘主義」に走った。キリスト教における神秘主義とは、神と人とが直接交歓するという思想である。そこには本来は禁止されているはずの圧倒的な宗教的恍惚感(エクスタシー)が伴う。恍惚感といえばつまり脳内でドーパミンが分泌され

ているわけであるが、対象が「神」であればぎりぎり容認されることが多かったのだ。
神秘主義の本場はドイツだった。南仏でカタリ派やトルバドゥールが情熱的な脳内恋愛を「宗教」や「叙情詩」という形で表現していた一二世紀、ドイツでは脳内恋愛を「神秘主義」という形で理論化・体系化するようになっていたのだ。一二世紀にはヨーロッパ人の精神に何らかの大きな変化があったに違いない。

さてドイツ神秘主義の発端は、修道院の内部で起こった。修道院に入った修道女たちは、当然ながら生涯独身を義務づけられる。しかし人間であるからには本能的な恋愛欲求や性欲は消えないわけで、抑圧された衝動は一種のヒステリーとなって現れることになる。後のウィーンでフロイトは近代ヨーロッパで猖獗(しょうけつ)をきわめていた神経症の原因が抑圧された性欲であることを発見したが、中世ドイツではそれらの人々は「魔女」だったり「カタリ派」だったりしたわけだ。だが、修道院内部ではキリスト教の教義と脳内恋愛の妄想とをうまく折衷させて異端審問を免れる方法論があった。これがつまり、「神との結婚」である。

ヒルデガルトに代表される神秘主義修道女たちは、人間の男が不在の修道院の中で、自らの脳内に存在する「神」と直接交歓し、宗教的恍惚の境地を自在に得られるようになった！　そしてその行為を「神との結婚」と表現することで、異端のそしりを免れることにも成功したのだ！　ヒルデガルトは修道女であると同時に、幻視者であり神秘家であり、そして詩人であり作曲家であり作家でもあった。宗教家であると同時に芸術・創作全般に才能を発揮

したのだ。この過剰な想像力と篤い信仰心が、「神との結婚」というコペルニクス的な新しい恋愛形態の発明を可能としたのだろう。

ヒルデガルトは幻……ヴィジョンをしばしば見た。要は過剰な精神エネルギーによって生まれる妄想なのだが、キリスト教保守派としての豊富な知識と経験がヒルデガルトを異端化から守ったのだ。しかし、ヒルデガルトたち修道女が体験した「神との結婚（エクスタシー）」はカタリ派やトルバドゥールと非常に近かった。ヒルデガルトは聖母マリアや聖ウルスラといった聖女の「処女性」を崇拝した。「神の花嫁」となるためには、肉体の処女性が欠かせないというのだ。神は物質世界＝現実世界の存在ではなく、精神世界にのみ存在するから、その花嫁たる資格を与えられる者は処女のみだという。これで教会から分派でもしていたらヒルデガルトもカタリ派同様の運命に陥っただろう。カタリ派、トルバドゥール、修道院にひきこもる幻視家たち、これらの人々の活動はいずれも教会によって長年抑圧され続けてきた脳内恋愛への情熱の爆発だった。

修道院における恋愛革命の本質を一言で言えば「生涯処女を義務づけられた修道女は、神と脳内で結婚すれば良い」というものだ。情熱恋愛の呼び起こす恍惚や性的なエクスタシーは、結局のところは脳内ホルモンの分泌によってもたらされる「脳内現象」なのであるから、対象が現実の人間である必然性は実は無いのだ。砂漠を彷徨（さまよ）う旅人がオアシスの蜃気楼を幻視するように、生涯処女を義務づけられた修道女は脳内に「夫」たるイエス・キリスト

の姿を幻視することができるのだ。
　ヒルデガルト修道院が創始した「神との結婚」（これは女性の場合で、男性の場合は、聖処女マリアとの結婚）という新しい文化……「脳内結婚・脳内恋愛」は、後世に大きな影響を与えた。ドイツやフランスからは、続々と幻視者・神秘家・預言者が登場するようになり、その何割かは女性だった。一五世紀にはフランスの田舎に住む娘ジャンヌ・ダルクが神と天使からの啓示を受け、英仏百年戦争で英国に併合されかけていたフランスを救うために男装して戦場に赴くという事件が起こった。もし神がかりのジャンヌがフランス軍に参加していなければ、恐らくフランスという国は一五世紀の段階で英国に併合されて消滅していただろう。もちろんジャンヌはヒルデガルトの系譜に連なる神秘主義者・幻視者であるから、純潔の処女であった。フランス政府はわざわざ何十日もかけてジャンヌが処女かどうかを調べたのだった。というのは処女であれば預言者だが、処女でなければ魔女に違いないからである。それがヒルデガルト以来のルールだったのだ。結局ジャンヌはイギリス側に囚われて異端として火刑にされてしまったが、その原因は幻視者・神秘家であったからというよりは、恐らく「女でありながら剣をとって英国軍と戦ったから」という政治的な理由だった。
　一七世紀以後、ロマン主義の時代になるとジャンヌ・ダルクは文学者たちによって再発見された。シラーは戯曲「オルレアンの少女」を書いた。その中では、ジャンヌは「神と結婚した聖処女」として登場するが、英国と戦っているさなかに敵将ライオネルに恋をしてし

まう。つまりジャンヌはシラーによって中世的な「神と結婚した聖処女」と近代的な「人間恋愛に苦悩する一人の少女」という二面性を与えられ、近代的キャラクターとして再生したのだ。ジョルジュ・サンドは「現代フランスにジャンヌ・ダルクの精神を持つ少女が現れ、やはり処女のまま人間との恋愛を拒んで死ぬ」という物語「ジャンヌ」を書き、バルザックは両性具有者セラフィタが人間との恋愛をやはり拒んで処女（童貞）のまま天界へ飛翔する「セラフィタ」を書いている。

ヒルデガルトではなくジャンヌ・ダルクがロマン主義者たちに好まれた最大の理由は、恐らく、ヒルデガルトがひきこもりの修道女だったのに対し、ジャンヌは甲冑に身を包み、剣をとって戦ったからであろう。つまりジャンヌは両性具有的なキャラクター、「全き者」として後世の男たちの脳内恋愛対象となったのだ。このことは、「神と結婚し、人間の愛を拒んで死んでいく」という点で「セラフィタ」といくつかのジャンヌ・ダルク物語の構造が酷似していることからも判る。

現代日本では、ジャンヌの両性具有的イメージは「宝塚少女歌劇団」という形で輸入され、宝塚に幼少時から親しんだ手塚治虫が「リボンの騎士」を描くに至って物語文化の中に確固たる一ジャンルを築くこととなった。「リボンの騎士」は女の子でありながら王子として育てられたサファイアの冒険&恋愛活劇だが、その源流は明らかにジャンヌ・ダルクにあった。ただし二〇世紀の作品である「リボンの騎士」になるとすでにジャンヌが「神との

結婚」を果たした脳内恋愛者であったというオリジナルの設定は忘れ去られ、サファイアは普通に人間に恋する女の子になっていた。また、ジャンヌの幻視癖・神との交歓についても「脳内妄想」という精神医学の知見から斬って棄てる解釈が多い。例えばリュック・ベッソンの映画「ジャンヌ・ダルク」では、ジャンヌの幻視体験はすべて「妄想」「幻覚」だということを再三強調していた。物質至上主義文明が支配する現代においては、脳内恋愛・脳内結婚は愚かな「幻想」に「すぎない」と言われてしまうのだ。故に、ジャンヌの「脳内結婚・脳内恋愛」という属性のほうは忘れ去られ、「武装して戦う両性具有の少女」という属性のみが現代のキャラクター市場に受け入れられたのだ。

女の子でありながら王子として育てられたサファイア（「リボンの騎士」少女クラブ版1　手塚治虫漫画全集　講談社より
©手塚プロダクション）

5　錬金術と恋愛至上主義
男女の結合が奇蹟を生む

中世から近世にかけてヨーロッパで流行した「錬金術」は、キリスト教によって滅ぼされてしまった古代異教思想の復活だった。錬金術には主に二つの系統があり、一つは物質世界における錬金術……卑金属を黄金やエリクサー（霊薬）、賢者の石に変換する化学としての錬金術で、もう一つは術者である人間の精神を解放・発展させるという精神世界における作業だった。ユングは後者に注目して錬金術を自己変容の象徴的研鑽の過程として捉えたのだが、実際には前者と後者は分かちがたく融合していた。錬金術においては現代化学のように誰もが同じ手順で同じ効果を得られるのではなく、術者の精神が熟達していなければ望ましい結果を得られないとされていたのだ。しかしいずれにせよ錬金術は「男女の結合」「両性具有」というイメージにこだわり続けた。ここで思い起こされるのが、『饗宴』に登場した「人間はかつて両性具有だった」という神話だ。錬金術においては、硫黄と水銀から賢者の石を得るプロセスを「男と女の結合」という象徴によって描くことが多い。男性性と女性性が結合してはじめて賢者の石は「全き者」となることができるのだ。

故に、錬金術師は単独で作業を行うよりも、「神秘なる妹」と呼ばれる女性パートナーとの共同作業を行うことが推奨された！　しかもこのパートナーは、人間の女性である必要はなく、「脳内パートナー」であっても構わなかったのだ！

近代に勃興した「恋愛至上主義」は、錬金術思想から派生した一種の神秘主義思想である。人間の男女が恋愛することで、宗教的陶酔の境地に至ることができ、人はそこではじめて魂の救済に与ることができる、という思想なのだ。かつては神への信仰によって救われていたヨーロッパ人は、神への信仰ではなく異性との恋愛によって救われるという新しい物語に移行したのだ。その源流がトルバドゥールにあったことは「Ⅰ　理論篇」で述べたが、トルバドゥールと近代恋愛の間にはまずヒルデガルトからジャンヌ・ダルクに至る「脳内恋愛」の文化というものがあり、近代に至ってルソーの影響を受けたロマン派のゲーテやシラーが「人間恋愛」を文学のテーマとして取り上げたという過程があった。しかし実は、その陰で「錬金術」という隠された（オカルトな）形での恋愛至上主義運動もまたひっそりと行われていたわけなのだ。錬金術は、本来は象徴にすぎなかったはずの「男女の結合によって完全な物質……賢者の石が得られる」という思想を、いつしか字義通りの思想に発展させていったのだ。

現代における恋愛至上主義もまた、近代が生んだ幻想なのだが、ということはその源流は実は錬金術にあるのだ。ハリウッド映画「40歳の童貞男」では、童貞生活を続けるオタク中

年に向かって同僚たちが「恋愛がいかに素晴らしいか」「恋人とのセックスがいかに神秘的で宇宙愛を感じられる体験であるか」という話をひたすら吹き込む。その様は、新興宗教に洗脳されている信者の如くだ。実際には、一人のパートナーとの恋愛感情などすぐに廃れるし、性欲も（たぶん）無くなってしまうのだが、信者たちはそのような現実から目を背け、「人は恋愛によってのみ全き者になれる、恋愛しなければ人間とはいえない」と信じ続けているのだ。錬金術から「脳内パートナー」や「象徴」といった精神世界的な要素が全て取り除かれた結果生まれたものが近代恋愛なのかもしれない。だとしたら、近代恋愛が物質主義に汚染されてしまい当初の精神性を喪失したのも当然といえる。

しかしながら、錬金術は結局のところ、疑似科学にすぎなかった。いくら硫黄と水銀を混ぜ合わせて加熱しても賢者の石は得られなかったし、卑金属を黄金に変換するなど夢のまた夢だった。だから科学が発達するとともに、錬金術は忘れ去られていった。現代ではとうとう、象徴としての錬金術を再発見されるのみとなってしまった。

ユングは「錬金術は象徴だ」と言っているが、これは現代人の目から錬金術を見れば「まさか本気だったわけではあるまい」と感じてしまうということにすぎない。当時の錬金術師たちは、賢者の石や黄金を手に入れることを真剣に夢見ていたのだ。しかし、卑金属を黄金にするには元素転換を行わなければならない。元素転換は水銀と硫黄を混ぜて加熱するといった程度の操作で実現できるような簡単なものではなかった。そもそも中世には現代的な

意味での「元素」という概念そのものが無かったのだ。世界は「四大元素」と呼ばれる四つの要素（空気・火・土・水）から構成されていると錬金術師たちは考えていた。これはギリシャ時代の世界観がそのまま継承されたものだった。これだけではどうもうまく黄金を生成できないということで「第五元素」なる仮想の物質が追求されたりもした。しかし化学が発展した現在では、一〇〇種類をはるかに超える元素（中世的な意味の元素ではなく、化学的概念としての元素）が発見もしくは生成されている。錬金術の操作には、何らの現実的な根拠もなかったのだ。従って錬金術は化学の発展と同時に哲学的・神秘主義的な側面だけを残して滅び去ってしまったのだ。

同様に現代の恋愛もまた、疑似宗教・疑似科学にすぎないのだ。いくら膣にペニスを挿入して混ぜ合わせても、何か神秘的な救済が訪れるわけではなく、人間性が完全になるということもない。我々はやっと脳内ホルモンの働きの一部を知ることができた程度の段階に留まっており、恋愛中に脳でどのような現象が起きているのかを完全に理解できてはいない。例えば情熱恋愛中に脳内でドーパミンが分泌されることと、その分泌期間が古来経験則的に言われてきたように案外と短いということは、すでに明らかになりつつある。つまり「永遠の恋愛」など現実には不可能なのだ。にも拘わらず人間同士で「永遠の恋愛」を求め続けようとする行為は、硫黄と水銀を混ぜあわせて黄金を生成しようとする錬金術師の魔術的行為と何ら変わりがない。それどころか肝心の生殖行為すら実は魔術なのだ。生殖によって保存

される「命」とは、単にＤＮＡ……ただのタンパク質にすぎない。我々人間の自我は生殖活動によっては決して保存されたりしない。いくら生殖しても、子供を増やしても、死んだら自我は消えるのである。つまり現代における恋愛もセックスも、いずれも非科学的かつ魔術的な行動なのであって、科学的には「意味がない」。

「恋愛しなければ現代人にあらず」という迷信は、「サバンナでライオンと闘ったら大人になれる」というような呪術的風習と何ら変わりがないのだ。現代人は、「恋愛とセックス」によって奇蹟を起こせると信じ、未だに呪術と魔術の世界からぬけ出せないのだ。

このような原始的な段階に留まっている現代の恋愛は結局のところ脳科学を無視した単なる本能的欲望の発露にすぎないのであり、我々は非科学的な迷妄を夢中になって繰り返しているにすぎない。錬金術師が無知を無知とも気づかずにできもしない黄金の生成に夢中になっていたのと同じなのだ。

脳科学が発達すれば、恋愛もまた錬金術同様に忘れ去られていくだろう。そして現代の恋愛物語は、後世の学者によって「この物語は何を象徴しているのか」と読み解かれる運命に落ちるだろう。後世の人には、まさか現代人が本気で男女の恋愛の果てに奇蹟が起こって救済が訪れると信じているとは理解できないだろうから。

6『饗宴』プラトンのイデア論と「ルサンチマン」
イデア界は「インターネット」に進化した？

プラトンの『饗宴』の話に戻る。先ほどは両性具有説を紹介したが、『饗宴』の主人公はプラトンの師ソクラテスである。『饗宴』においても、いろいろな人間が各人の恋愛論を語った後、ソクラテスの語る恋愛論が最後に登場するわけだ。語っているのはソクラテスというキャラクターで、しかもソクラテスはディオティマという巫女から聞いた話を人々に語り直しているという設定なのだが、実際にはプラトン自身の恋愛論と考えていいだろう。

ここで語られるプラトンの恋愛論では、恋愛はいくつかのレベルに分類される。肉体的な美を求める「生殖本能」は愛と呼ばれる活動の中でいちばん低いレベルに位置づけられる。生殖本能つまり性欲は、「不死」というＤＮＡの要請に基づいた本能である。個人は死んでも、ＤＮＡを保存することができればＤＮＡレベルでは死を免れる。しかし、そのような過剰な性欲を伴う情熱的な恋愛は、プラトンにとっては絶対的に重大なものではない。

二番目の段階は精神的な美を求める愛。具体的には青年愛・少年愛である。少年愛は生殖本能とは無縁であるから、それだけ純粋（プラトニック）な愛ということで生殖本能がベー

スになっている異性愛よりも上位に置かれるのだ。
しかし最終的には、そんな少年愛すら否定される。究極の愛は、「美のイデアそのものへの渇望」という抽象段階に突入するのだ。「美」そのものを愛するというのだ。
ソクラテスが自説を語り終わった後、アルキビヤデスという美青年が現れて、ソクラテスの言葉に偽善や嘘がないことを証明する。アルキビヤデスはソクラテスの愛人になろうとして、ソクラテスと二人きりになる機会を何度も手にしたという。そしてソクラテスに口説かれることをいちいち期待したのだが、ソクラテスは常にアルキビヤデスを口説くこともなく何もせずに帰ってしまうのだというのだ。
つまり、僕用語で言うところの「モテの魔の手」をソクラテスは完全にはねのけ、一人脳内で「美のイデア」「美自体」「絶対美」という観念に萌え続けていたというわけだ。
そう。プラトンは『饗宴』で、恋愛にこのような序列をつけているのだ。

脳内恋愛>少年愛>異性愛

プラトンのイデア論は、現実世界をイデア界の不完全な影だと捉える点で現実棄却的でありグノーシス的であった。そしてイデア論は、当然、恋愛という人間にとってもっとも根源的な本能欲求に対しても適用されなければならなかった。故に、プラトンは生殖本能を恋愛

のうちでもっとも下位に置き、いわゆるプラトニック・ラブ（精神的な恋愛）を上位に置き、しかし最上位にはそれらを全て超越した「脳内恋愛」を掲げてみせたのだった。
もちろん、現代の恋愛観においては、プラトンが最終的に掲げた「脳内恋愛」という概念は綺麗さっぱり拭い去られてしまい、序列はすっかり逆転されてしまっている。

異性愛＞少年愛＞脳内恋愛

これが現代の恋愛観なのだ。なぜ逆転したかは、言うまでもない。現代は表層的な唯物論の時代、物質至上主義の時代だからだ。「表層的」という言葉を使うのは、唯物論が中途半端な状態のまま放置され、形骸ばかりの「愛」だの「神秘」だの「幸福」だのといった精神論用語が残存し、唯物論がまったくもって徹底されていないからだ。つまり現代の疑似唯物論的恋愛は、未だに「四大元素」をこねくりまわしている状態を脱していないのだ。化学の元素記号表の如き完璧な脳の見取り図ができあがった暁には、人間は恋愛感情や性欲やその他の感情を科学的にコントロールすることが可能になるだろう。だが、我々は「愛」だの「恋」だのといった脳内現象を、何やら神秘的で神の世界に繋がっている神聖な現象だと思いこむという中世的迷妄から未だに脱出しておらず、恋愛を科学的に完全に解明しようという一部の科学者の試みは「常識人」たちによって否定されねばならないのだ。

現代は一見、唯物論に支配されている世界でありながら、その陰には中世の迷妄が未だに除かれずに生き延びている。恋愛の中身はブラックボックスで人間は相変わらずＤＮＡに支配されたままだというのに、我々は訳知り顔で恋愛の全てを理解しているような気になって振る舞っているのだ。この中途半端な状態が、現代恋愛の混乱の原因なのだ。

「週刊ビッグコミック スピリッツ」に連載されていた漫画「ルサンチマン」（花沢健吾）は、現代のインターネットがさらに発達したバーチャルリアリティ世界における新しい恋愛スタイルを描いている。現代で「脳内恋愛」をしようとすれば、漫画やゲームやアニメの仮想キャラクターを対象にするしかない。しかし仮想キャラクターと直接交歓できるようになる神秘家は、これまで数が限られていた。恐らく同じ人間にも脳の状態によって「脳内恋愛」しやすい人とそうでない人がいるのだ。ヒルデガルトのような幻視体質の持ち主は少ない。これはいくらでも妄想を生み出せる人と、そうでない人との間には生理的な差があるのだ。これは体力に個人差があるのと同じだろう。そして恐らくは、ドーパミンの分泌量の違い、ないしはドーパミンを受容するレセプターの数の違いに還元されるだろう。

だが「ルサンチマン」では、ほとんど現実世界と区別がつかないレベルにまで進化したバーチャルリアリティ世界が実現している。仮想世界でありながらも肉体的なリアルな感覚を感知することができる。人間の脳にリアリティを感じさせるものは、神経から入ってくる

情報の質量だ。現実から入力される情報と寸分違わない疑似情報が脳に入力されるならば、もはや脳は現実と仮想の区別をつけることができない。また、高度に発達したＡＩ（人工知能）は本物の人間の精神との区別がつかない。故に、これらの進化を遂げた「ルサンチマン」の世界では仮想世界における仮想恋愛が実現しているのだ。そのような「現実と仮想の二つの世界が並立する」新しい世界においては、現実世界における恋愛は衰退することになる。なぜならば、現代の恋愛セックス資本主義市場が構築している恋愛のヒエラルキー、

異性愛＞少年愛＞脳内恋愛

は真っ赤な嘘であり、実際にはプラトンが大昔にすでに喝破していたように、

脳内恋愛＞少年愛＞異性愛

これこそが本当の恋愛ヒエラルキーだからだ。ただ、ソクラテスやヒルデガルトのように何らの情報入力も行わずに「脳内恋愛」のスイッチを入れられる体質の人間は少なく、多くの人間は「生身の肉体」から豊富な情報を入力しなければ脳内で恋愛状態を起こすことができないというだけのことなのだ。故に、現実と同等の仮想情報を任意に入力可能な世界で

「ルサンチマン」の1コマ（©花沢健吾）
『ルサンチマン』小学館ビッグコミックスピリッツ

は、誰もが平等に脳内恋愛という究極の恋愛体験を得ることが可能になるのだ。

　つまり、科学の進歩の向こうには、プラトンが説いた「脳内恋愛至上主義」を科学の力で実現させようという隠された欲望がある。だからこそ「ルサンチマン」は「ルサンチマン」というタイトルなのだ。この作品は、モテない男たちの怨念が科学を発展させ、万人に平等に開かれた仮想世界を創りあげ、現代の物質主義に塗（まみ）れた人間恋愛を打破しようとする物語なのだ。

　資本主義の問題の一つに「不平等」「経済格差」がある。それと同様に、恋愛セックス資本主義にもやはり「恋愛の不平等」「恋愛格差」がある。現実世界、つまり物質世界においては、平等の実現は困難なのだ。恋愛においてはまず「美」が圧倒的な力を持ち、美しくない人間が美に対抗するには「権力」を持つしかない。故に異性を獲得するための闘争が（主に男性の間で）果てしなく繰り返されるのだ。しかし本当の格差、本当の不平等とは何かと

いう問題を突き詰めて考えていけば、それは結局のところ「脳内ホルモンの格差」「脳内ホルモンの不平等」という現象に還元される。多幸感を感じていられれば人間は幸福なのであり（もちろん生存に必要な最低限の衣食住環境は保障されなければならない。たとえ多幸感を感じていても死んでしまったらそこで終わりなのだから）、どれほどセックスにいそしみ金を稼いでも脳が抑鬱（よくうつ）状態に陥っているのならばその人間は不幸なのだ。「幸福」を数量的に測定するとなれば、資産やセックス回数ではなく脳内ホルモンの状態の平均値を取るしかない。

これが本当の唯物主義である。

故に、「ルサンチマン」のように、人間が生命活動を維持するための物質的な要請を満たすために動いている「現実世界」と、人間が脳内ホルモンを充足させるために動いている「仮想世界」とに社会が二分割されるという状況は、実はある種の理想郷に近いのだ。もちろん多くの現代人にとっては、恋愛信仰がテクノロジーによって崩壊させられたデストピアに見えるのであろうが。

7 新プラトン主義と「涼宮ハルヒの憂鬱」
世界は、一者から流出した

プラトンのイデア論（世界を、現実世界とイデア界に分ける思想）は、その後「ネオ・プラトニズム（新プラトン主義）」という神秘主義的哲学を生んだ。新プラトン主義は「流出説」によって知られている。新プラトン主義では世界を複数のレイヤーに分類しているが、それら全てのレイヤーは元を辿れば「一者」というただ一つの存在から流出して生成された存在だというのだ。つまり世界は無から突然生じたのではなく、「一者」なる何者かから漏れ出したという考え方だ。この一者という考え方にはキリスト教の一神論思想と共通する点が多かったため、中世初期のキリスト教神学およびキリスト教哲学は積極的に新プラトン主義哲学を取り込んだ（一方、世界を善と悪に二分して考えるグノーシス主義はキリスト教から徹底的に弾圧された）。

「一者」とはつまり神のことなのだが、新プラトン主義においては人格化されて語られることはない。世界の根源的エネルギーのようなものである。世界は神が「創った」のではなく、一者が持つ無限大のエネルギーが溢れるように「流出」したものなのだ。物質世界つま

り現実世界はこの流出して拡散した世界のヒエラルキーの中でも地位が低い。故に人間は世界のレイヤーを上昇していって「一者」と自己を合一させなければ真の幸福を得られないのだ。このような新プラトン主義を広めたローマの哲学者プロティノスは、一者（神）と自己を一体化させる目的で禁欲生活をしながら瞑想を実践し、瞑想がうまくいった時には宗教的恍惚状態（エクスタシー）に陥ることもあったという。プロティノスは「一者との脳内恋愛」を実現したのだ。ただし、エクスタシーに到達できる人間は限られており、プロティノス自身もそうそう何度も到達できたわけではなかったらしい。

流出説は、現代では「ビッグ・バン理論」として宇宙物理学の分野に継承されている。ビッグ・バン理論では、宇宙はまず極小のエネルギーの塊であった。そのエネルギーがある時に大爆発を起こし、以後、そのエネルギーは宇宙空間全体に拡散し続けているのだという。つまり無から宇宙が創造されていたのではなく、すでにエネルギー自体は存在していた。それが薄く拡散した状態が現在の宇宙だというのだ。この理論の弱点は「その最初のエネルギーはどこから来たのか」という謎に尽きるのだが、少なくとも「無から突然宇宙が創造された」という説よりははるかに科学的な説得力を持つのである。

また、「流出説」を物語化した作品が最近テレビアニメ化されて話題になった「涼宮ハルヒの憂鬱」（谷川流）である。この作品はライトノベルらしく普通の高校を舞台にしているが、ヒロインの涼宮ハルヒが実は「一者」なのである。「涼宮ハルヒの憂鬱」の世界は、涼

「涼宮ハルヒの憂鬱」（角川スニーカー文庫）著：谷川流
イラスト：いとうのいぢ

宮ハルヒの存在からある日ある時ある瞬間に突然流出して生まれた世界なのだ！　ハルヒ自身は自分が一者つまり神であるということに全く気づいていないのだが、周辺の面々……「SOS団」というハルヒが創った部活のメンバーはそのことを知っている。もしハルヒが「こんな世界は要らない」と思ってしまったら、この世界は消滅してしまう。だからみんなでハルヒの下僕となってハルヒの気分を盛り上げよう……というお話なのだ。つまりプロティノスにおいて「一者」と呼ばれていた存在（神）は、現代では「涼宮ハルヒ」という女子高生の姿で描かれるようになったのだ。

いきなり両者を結びつけると牽強付会のように聞こえるかもしれないが、もちろんそうではない。

ローマ時代と現代の間を結ぶルネサンス期、それまで完全に忘れ去られていたプラトン哲学および新プラトン主義がヨーロッパで「再発見」された。東方世界から逆輸入されたプラ

トンやプロティノスの著書が復刻されたのだ。プラトン復興の中心人物フィチーノは、その名の通りの「プラトン・アカデミー」をフィレンツェに設立し、プラトンのイデア論や『饗宴』の恋愛論、さらにプロティノスの流出論を広くヨーロッパに広めたのだ。もちろん、そこで再発見されたのはイデアや一者という観念だけではない。「一者との合一化によるエクスタシー」という「脳内恋愛」の方法論もまた再発見されたわけだ。プラトン・アカデミーがルネサンスに果たした功績は大きかった。中世ヨーロッパでは、人間は神の被造物にすぎず、主体性を持たない人形のような存在だと考えられていた。そのような規制をかけることで人間の想像力過剰を抑えてきたのだ。しかしフィチーノは「人間は神の被造物ではなく、人間と神とは元は同一の〈一者〉なのだから脳内瞑想によって神と一体化することができる」と唱えたのだ。こうして再び人間は想像力を取り戻し、脳内恋愛の再興つまり「人文復興」（ルネサンス）への歩みをスタートさせることとなったのだ。

「プラトニック・ラブ」という言葉も、ルネサンス期に誕生したものである。もちろん脳内恋愛の復興はギリシャ・ローマ時代に想像されていた仮想キャラクター（つまりギリシャ・ローマの神々）の復権でもあったため、ボッティチェリは「ヴィーナスの誕生」を描いた。一者と涼宮ハルヒの間には距離がありそうだが、ヴィーナスから涼宮ハルヒまではそう遠くない。

後にこの「一者（神）との脳内合一」（脳内恋愛）は、さらなる近代主義・個人主義の影響

を受けて「人間同士での合一」(人間恋愛)という新しい神秘思想を生んだ。そこから現代の恋愛が生まれてきたわけだが、「涼宮ハルヒ」の世界観は現代的な恋愛神秘主義を維持しつつも、実は「神との合一」「一者との合一」というルネサンス時代の世界観へと回帰しているのだ。ハルヒは恋愛対象の人間であると同時に、神＝一者でもあるのだ。もちろん主人公キョンとハルヒとの間での恋愛は、肉体関係を伴わないいわゆるプラトニック・ラブであることは言うまでもない。ライトノベルの分野では、このような「仮想キャラクターの神格化」と「プラトニック・ラブ至上主義」とが他の分野よりも進行していて、そこに登場するヒロインたちは人間を模したミメーシスというよりももはやギリシャ・ローマ時代の女神キャラクターたちに近い存在となっている。ハルヒのような新プラトン主義の香りがする「神＝一者」だけでなく、もっと古典的な「女神」や「魔女」といったキャラクターも多数登場するし、近代的な「ヴァンパイア」やもう少し現代的な「超能力者」など、非現実的な属性を持ったキャラクターが多い。あるいは、ごく普通の人間の女子高生だとしても、性格がほとんど唯我独尊の如く大いばりしていて主人公の少年を犬や下僕として虐げてくるとか、そんなシチュエーションが多数見られる。「ゼロの使い魔」では主人公はヒロイン・ルイズの「使い魔」として飼われているばかりか、鞭でぶたれて「この駄犬！」と調教されたりする。「我が儘な少女キャラクターにひたすら下僕のようにかしずき、彼女を守るために闘う少年」を描き続けるライトノベルが実は中世騎士物語の復興であることは間違いない。

その中でも「涼宮ハルヒ」は中世以前の「一者」「流出説」にまで遡ったという点でエポック・メイキングなのである。「ハルヒが神様」という設定が広く市場に受け入れられた事実は、近現代恋愛において「恋人」とは「神」であるという事実を示しているのだ。また同時に、神とは「脳内恋人」を象徴的・抽象的に言い換えた概念なのだということも証明しているのである。だからニーチェが「神は死んだ」と叫んだ瞬間に、世界は恋愛信仰に覆い尽くされることになったのだ。

8　三葉虫と「火の鳥・復活編」
視覚と闘争と恋愛

「I　理論篇」で書いていることを要約すると、
◎恋愛とは脳内現象（脳内で発生する化学反応）である。
◎現代の人間は、脳内での生物学的反応にすぎない恋愛に、神秘性を付与している。つまり「恋愛神秘主義」とでも言うべき迷妄に陥っている。
◎現代恋愛のルーツは中世トルバドゥールの恋愛詩やカタリ派の二元論的かつ情熱的な信仰にある。
◎つまり我々現代人は中世ヨーロッパ的な迷信の世界から未だに醒めていない。
◎現実の生物学的な恋愛の実体と、恋愛至上主義が抱く神秘的な恋愛観との間には大きなズレがあり、理想的な恋愛は決して現実では実現しない。
◎故に我々の恋愛は全て間違っている。これを克服するには哲学や現代思想などの人文科学はまったく無力で、科学のみが恋愛の真の法則を明らかにして無知な妄想の世界に生きる我々を啓蒙してくれるはずである。

ということになる。

そもそもプラトンの時代、恋愛とは「美に対する愛」であった。いや、実は今でもそうなのだ。我々は美しいものに憧れ、それを愛する本能を持っている。もちろん「美」の中には「精神の美」というものもあるが、「美」の大半は「見た目」である。容姿の美、外見の美こそがもっとも普遍的で強力なのだ。そうでなければ「一目惚れ」という現象が起こるはずもないし、人間がこぞって偶像を崇拝するはずもない。親密な愛着の感情は長期におよぶ人間関係の中で生まれてくるが、情熱的な恋愛は人間関係や相手の内面などとは全く無縁なのだ。恋愛現象……対象を発見するや否やドーパミンが分泌される中毒症状は、多くの場合、視覚から引き起こされる非常に原始的・動物的な生理反応である。もちろん「匂い」や「声」に反応する場合もあるが、それでもなお「視覚」が最重要なのだ。人間は恋愛市場において、生まれながらに徹底的な不平等に晒（さら）されているのだ。

そもそも視覚とは何のために獲得された機能なのか?

『眼の誕生　カンブリア紀大進化の謎を解く』（アンドリュー・パーカー）によると、生物の進化ははじめの三四億年の間、実にゆっくりとしたものだった。三四億年もの時間をかけて、生物はやっとクラゲとかカイメンといったホワホワした海の生き物になったのだ。ところが今から五億四三〇〇万年前に「カンブリア紀大進化」とも「進化のビッグ・バン」とも呼ばれる特異な現象が起こった。突如として、生物は爆発的な進化を開始したのだ。アンド

リュー・パーカーは、この大進化の原因を「光スイッチ説」で説明している。かいつまんで言うと、カンブリア紀に生物は「眼」を獲得した。それまでの生物……例えばクラゲでは、光を感知するセンサーは持っていても、内部で立体的な映像を再構成する「眼」は持っていなかったのだ。ところがカンブリア紀に突然「眼」を持つ生物が登場した。その結果海の中で何が起こったかというと、凄まじい「捕食」という地獄が現出したのだ。「眼」を持たないクラゲやカイメンにとって、外界というのは深い意味を持たなかった。ほとんど情報が入ってこないのだ。だからカイメンは岩に張り付いて海水に混じっているプランクトンをこしとって食べていただけの横着な生き物だし、クラゲに至ってはぷかぷかと海にたゆたっているだけなのだ。

しかし「眼」を獲得した生物は違った。「眼」によって、生物は自分を取り巻く外界の様子を詳細に知覚できるようになってしまった。最初に「眼」を獲得した生物は、三葉虫だった。「眼」さえあれば、エサがどこにいるのかが一目瞭然である。エサを「眼」で発見し、エサに接近して捕食することができる。こうして海中には三葉虫が大発生し、しかも三葉虫はエサをガツガツと食べられるようにより凶悪で強力な身体へ進化し、攻撃力と捕食力をいっそうアップさせた。海は三葉虫による狩りの場と化した。

こうなると現代国家の軍備拡張競争と同じで、他の様々な生物も生存競争の中で生き延びるためにありとあらゆる方向の進化を開始する他はない。あるものは堅い外骨格で身を守

り、あるものは体色を忍者のように変化させて環境の中に隠れる術を覚え、あるものは捕食者よりも強く大きな身体を手に入れ、そしてその進化の競争の果てには体長二メートル、全身を堅い外骨格で覆い、強力な顎でエサを食い散らかす「アノマロカリス」のような怪物が誕生した。……これがカンブリア紀の大進化の実態だった、というのだ。

つまり、いわゆる生物の闘争本能・過酷な生存競争は、「眼」……視覚によって誕生した、というのがアンドリュー説なのだ。

生物は「眼」を獲得したことによって、凶悪になったのだ。生物というよりも「動物」と言ったほうがいいかもしれないが。植物は光を光合成に利用したのに対して、動物は光を「視覚」という捕食のための器官に利用したのだから。

もともとは植物と大差なかった動物が「動き回ってエサを捕食する」という現在の状況に追い込まれた原因は、「眼」の獲得だったのだ。

しかし、「眼」がもたらした厄災は、捕食という闘争だけではなかった。「性淘汰」というもう一つの闘争が始まったのだ。

捕食が異種間での闘争ならば、性淘汰は同種間での闘争だ。

「眼」が存在しない世界には視覚的な美醜感覚は存在しえない。美という感覚は、視覚が高度に発達したことによって生まれてきたのだ。

いつの時点で人間が「美」という感覚を観念化したのかは定かでないが、視覚を持つ動物

が行っている性淘汰の延長線上に「美」があることは間違いない。クジャクや熱帯魚の例を出すまでもなく、動物の性淘汰の中には「美」つまり外見の優位性による競争が存在する。もちろん、もう一つの性淘汰競争は、オスとオスとの同種間闘争である。要は腕力・暴力だ。「暴力」と「見た目の良さ」が、性淘汰の二大方法論となった。このうち、見た目の良さ……美は言うまでもなく視覚による性淘汰システムだ。またオスとオスとの闘いだって、視覚が無ければオス同士が出会わなくなるのだからはじまらない。例えばイソギンチャクの有性生殖は、精子と卵を水中に放出するだけの植物に似た平和なものだった。岩に張り付いているから闘争のしようもなかったのだ。しかもイソギンチャクは自己分裂して無性生殖することもできる。ところがカンブリア紀以後の有性生殖は、「闘争」「性淘汰」とワンセットになってしまったのだ。むしろ有性生殖がカンブリア紀の大進化を促したという説もある。しかし、「捕食闘争」と「性淘汰闘争」は同時に発生したと考えたほうがいいだろう。いずれも、動物が「眼」を持って自らの意志でエサなり異性なりに突撃しはじめたことが闘争の呼び水となっているのだから。

アダムは知恵の実を食べて楽園を追われることになったのだが、動物は光によって外界を知ってしまったために補食闘争と性淘汰闘争に巻き込まれることになってしまったわけだ。人類はその両方を文明の力で抑え込もうと努力し続けてきたが失敗した。「言葉」や「文化」や「道徳」はＤＮＡに勝てなかった。むしろ文明は逆に全人類を滅ぼす軍事力と末期的

な恋愛セックス中毒を生んでしまったのだ。

さて視覚とは何かということを突き詰めていくと、結局は「光を利用して外界の情報を脳に入力しつつ、その情報を元にして脳内に仮想の映像を再構成するシステム」ということになる。つまり「眼」の性能によって「世界」は全く異なったものに見えるのだ。色覚のない動物には、世界はモノトーンに見えているのだし、人間には見えない波長の光を感知できる動物だって存在する。その仮想世界の映像から発生してくる「美しいという感覚」や「恋愛感情」といった現象も、だから、元はと言えば脳内映像の刺激によって分泌される脳内ホルモンに還元されるのだ。

ということは「視覚」が変わってしまえば「美しいという感覚」や「恋愛感情」が発生するシステムも変わってしまうわけだ。

手塚治虫の「火の鳥・復活編」では、未来を舞台に設定し、実際に視覚が変わってしまった人間レオナを描いている。レオナは物語の冒頭、事故で死亡するが、科学者から人工脳を与えられて生き返る。ところが人工脳の処理方法が天然の脳とは少し異なっていたために、レオナの視覚は変化してしまう。人間が汚らしい無機物に見え、無機物が有機物に見えるようになってしまったのだ。かくしてレオナは、無骨な工業用ロボット・チヒロが「美少女」に見えるようになってしまい、ロボットに恋をするのだ！

脳や視神経や眼球を人工化しない限り、これほどドラスティックな視覚の変化は人間には訪れないと思うが、しかしすでに「人工の眼」を創ろうという研究は行われている。ＮＨＫスペシャルで立花隆がレポートしていたので知っている人も多いだろうが、カナダで盲目のイエンス・ナウマン氏を対象にした人工視覚研究が行われたことがあった。

ナウマン氏は見えない「眼」の上にビデオカメラを内蔵したサングラスをかけた。サングラスのカメラから入力された信号は、いったんコンピューターで処理されてから脳の視覚野へ送り込まれる。すると脳の内部で、入力された信号が映像化されて「見える」のである。もちろん本物の「眼」に比べればこのシステムはまだまだ初歩的なもので、見える映像は粗い光の点の集合でしかなかった。これに対して人間の「眼」はハイビジョン映像よりもはるかに鮮明である。しかしそれでも明らかになったことがある。脳や神経で起こっている現象は、コンピューター処理された信号と代替可能なのだ。

これまで人間は自らの外見を化粧や装飾や外科手術によって「美」のイデアに接近させようとする試みを繰り返してきたが、逆にあらゆる人間が「美」のイデアそのものに見えるように脳の側を改造すれば、恋愛の不平等・外見の不平等という問題は解決されるだろう。しかし、そのような試みは「倫理的」「道徳的」な抵抗にあって失敗に終わるかもしれない。いずれにせよ、人間は「視覚」に縛られているのだ。

Ⅲ　実践篇　脳内で物語を紡ぎ自らを癒す

❖ 幼児期の「脳内初体験」

現代日本は、脳内恋愛文化復興の急先鋒を担っている国ではないかと思う。ことに、漫画やアニメ、ゲームといったいわゆる二次元メディアの仮想キャラクターに関しては、アーサー王伝説が流行していた中世ヨーロッパを超えるほどの盛況ぶりなのではないだろうか。きっかけは、ひとえに手塚治虫という漫画家・アニメ作家の功績と言っても過言ではない。もちろん、コンテンツを大量に供給する情報インフラが急激に整ったことも一因ではある。週刊漫画雑誌、漫画単行本などの刊行、テレビ放送の開始、ビデオデッキ、DVD、インターネット、携帯電話などの普及……現代社会は、ありとあらゆる情報に満ち溢れている。かつてショーペンハウアーは芸術による癒しを、一部の特権階級のみが享受可能な生き方であると書いて貴族主義的だと非難されたが、一九世紀のドイツと現代の日本とではインフラがまったく違う。キャラクタービジネスは大衆化され、過剰に複製・再生産され、人間は生まれてすぐに仮想キャラクターの洪水の中に晒(さら)されるようになった。であれば、仮想キャラクターを対象とした脳内恋愛や脳内セックス、脳内癒しを、人間を相手にしたそれよりも先に覚えてしまうケースも大幅に増えているに違いないし、人間の持つ想像力そのものが（平均としては）上昇しているはずなのだ。

筆者は一九六九年生まれで手塚アニメの全盛期とは少しズレるのだが、それでも当時はテレビで旧作アニメを盛んに再放送していたので生まれて初めて見たテレビアニメは手塚の「リボンの騎士」や「ジャングル大帝」だった。当時まだ幼稚園児だった僕は、手塚が描く天使やライオンやオウムの愛らしさに夢中になっていた。手塚のキャラクターは、どれも丸っこくてふにふにしていて、一言で言えば「かわいい」のだ。

現代のアキバ系市場では、この種の愛らしい丸っこい絵柄を「萌え系」と称する。特徴は、瞳がやたらに大きくて、鼻と口は小さく、輪郭は丸く、頭身は短いといったところだ。アキバ系においては「萌え系」キャラクターは、受け手によっていずれに該当するかは異なるが、「恋愛感情（ドーパミン）」「性欲（テストステロン）」「愛着感情（バソプレシンとオキシトシン）」それぞれを喚起させるための対象として見られる。ただし「性欲」対象のキャラクターは、萌え系のちっちゃな子供っぽい絵柄であるケースもあるが、それよりも「プレイボーイ」的な「女性のセックス」記号を搭載した巨乳キャラクターであるケースのほうが多いかもしれない。逆に「恋愛感情」「愛着感情」を主眼としたキャラクターは、萌え系が圧倒的に主流で、セクシャルな記号を排除していることも多い。

つまり、一口にアキバ系、萌え系と言っても、一つの萌えキャラクターに恋愛感情・愛着感情・性欲の全てを見出そうとする一点突破型の受け手と、それぞれの感情の対象を異なるキャラクターに振り分ける機能型の受け手がいると思われる。たとえば僕は性欲と愛着感

情を同じキャラクターから喚起させることができない後者のタイプにあたる。性欲と恋愛感情であれば、なんとか同じキャラから喚起することが可能だが、これも正直言って苦手である。むしろ恋愛感情↓愛着感情へと移行するほうが楽だ。つまり僕のようなタイプの場合、性欲と恋愛感情・愛着感情が内面で分裂している。二次元の仮想キャラクターに対してばかりでなく、三次元の実在キャラクター（つまり人間の女性）に対してもそうなのだ。この問題を突き詰めていくとデカルトの心身二元論や中世カトリックが女性を聖女と娼婦とに二分した問題などに行き着きそうだが、また話が逸れそうなのでここではそれぞれを異なる対象に振り分けるほうが機能的だという事実だけを書いておくにとどめる。

さて、話を戻すが、僕が仮想キャラクターに愛着を感じるようになったのは手塚アニメがきっかけだった。この時点では五歳くらいなので、まだ性欲なんて感じなかったし（漠然とした小児性欲のようなものはあったが、あくまでも自体愛のようなものであって、リビドーが対象に投影されることはなかった）、恋愛感情も未発達だった。初めて恋愛感情のような気分を感じた相手は仮想キャラではなく、同じ幼稚園に通っていた女の子だったと記憶している。ただし彼女は引っ越しでいなくなってしまった。それに恋愛感情といってもまだまだ原初的なもやもやとした感覚で、そもそも恋愛という概念を当時の幼い僕は知らなかった。

性欲を対象（自分以外の何か）に向けるきっかけとなったのは、「週刊少年マガジン」に連載されていた永井豪のオカルト漫画「手天童子」だった。この時、僕は七歳か八歳くらい

だったと思う。この漫画、少年誌なのに女の子キャラクターがすぐに裸にされ、あまつさえ鬼に捕まって舌でペロペロと舐められて「あ〜っ」とか悶えるという実に永井豪らしい作品だった。もちろん永井豪なので、女の子キャラクターと言ってもいわゆる「萌え系」のぷにぷにした子供ではなく、八頭身でバストもヒップも大きくて腰がくびれている、いわゆるプレイボーイ系の体型を持ったキャラクターだった。

してみると僕の場合、最初に愛着を感じたキャラが手塚キャラ（萌え系）で、最初に性欲を覚えたキャラが永井キャラ（プレイボーイ系）という具合に、はじめから愛着感情の対象と性欲の対象がそれぞれ機能的に振り分けられていたのだ。未だに僕はこの両者の対象を同じキャラに統一することができないわけだが（もちろん、別に無理に統一する必要なんかないが）、それは幼児期の「脳内初体験」がそれぞれ異なる系統のキャラを対象にしていたためなのだろう。

萌えキャラと性欲対象とを脳内で統一しようとする運動は、おそらく、一九七〇年代終盤から一九八〇年代初頭にかけて起こったロリコン漫画ムーブメントがきっかけではないかと思う。このムーブメントの中心には、たぶん吾妻ひでおがいた。アニメに登場する清純な美少女キャラクターが同人誌漫画の中で悪役に犯されるようになったのも、この時期からだろう。手塚（愛着）と永井（性欲）の統一運動は、しかし、世間からオタクが「ロリコン」「小児性愛者」と白眼視されるきっかけを生むことにもなった。僕自身はスタート時点から手塚

（愛着）と永井（性欲）が分裂していたので、当時のオタク界の流行りに沿ってこの両者を統一しようと努力しても、どうにもうまくいかなかった。だがそれは、もう少し後の話である。

一二歳頃になると、第二次性徴期が訪れた。ここから一八歳くらいまでが僕の脳内ホルモンバランスがもっとも危険な状態に陥っていた時期で、一言で言えばドーパミン過剰状態になっていた。いわゆる「恋愛」を知ってしまい、中毒となったのだ。もちろん恋愛といっても僕は容姿および性格に非常に問題があったので、人間の女の子と交際できるはずもなかった。小学校五年生の時に奄美大島から転校してきた巨大な女の子（胴体が異常に長かった）になぜか恋をしたのだが、もちろん振られた。さらに周囲からは「ゲテモノ好き」のレッテルをいただくというまったく嬉しくない思い出となってしまった。恋愛とはまず恋愛対象である相手を発見して、そこから恋愛感情を抱く行為ではなく、最初に脳内に恋愛感情が渦巻いていて、たまたま目についた対象にその恋愛感情を投影するのである。それがこの時に僕が気づいた一つめの現実で、もう一つの現実は「外見が醜いからといって内面が美しいわけでもない」というあたりまえのものだった。

当時の僕はどこでどういう教育を受けてそうなったのか思いだせないのだが、「外見が醜い人間こそ内面が美しい」と思いこんでいたのだった。だから小学校における正式な初恋の相手は、ＥＴそっくりな同級生となったのだろう（かくいう僕は彼女よりもさらに醜い超ゲ

テモノだったので、彼女からも好かれなかったわけだが)。以後も二〇歳くらいまで、僕の三次元恋愛における趣味趣向は「ゲテモノ好き」を貫いた。もちろん周囲が「ゲテモノ」と呼ぶだけで、僕の目にはスタンダール風に言えば恋愛の結晶作用が働いているから相手が神々しい美少女に見えていたわけではあるが。恋愛は、脳でやるものだ。

外見が醜い人間は、相手の外見にこだわらない、あくまでも内面にこだわる、という確信を一〇代の僕がずっと抱いていたことは間違いない。

この確信のきっかけは思いだせないが、なぜこのような迷妄を頑固に信じ続けたのかはなんとなく推察できる。要は、僕自身がさして外見にこだわらなかったということ、そして内面にこだわってもらえなければ僕が恋愛対象に成り得るはずがないということだ。恋愛の可否が人間の外見によって定められてしまうのであれば、僕はいつまでも人間と恋愛できないし(実際にできなかったのだが)、それにそれは……「愛」ではなくただの「快楽志向」にすぎないではないか。別にプラトンを知らなくても、どこからか(おそらくは手塚漫画などから)一〇代の僕はプラトニック・ラブのイデオロギーを刷り込まれていたわけだ。

実際、小学生の頃の僕は、人間の「顔」に対してまったく興味を持っていなかったのだ。顔は個人を識別する記号だ、くらいの感覚しか持ち合わせていなかった。故に、後に鏡や写真を見るたびに僕をさいなむようになった自虐的な自意識ともまだ無縁だった。

❖ アニメによって決定づけられた恋愛志向

小学校から中学校に移る時期に、僕の内面で重大なことが起こった。当時「機動戦士ガンダム」というSFロボットアニメが大ブームになっていた。「ガンダム」の内容についてはいちいち説明するまでもないだろう。僕は最初、ガンダムに登場するモビルスーツ（ロボット）のフォルムの美しさ・かっこよさに惹かれてガンプラ（「ガンダム」のプラモデル）を集める普通の少年だったのだが、ちょうど一二歳から一三歳へ、小学校から中学校へと移行する多感な時期だったために、アニメのキャラクターに性欲を感じるようになったのだ。劇場版アニメ「機動戦士ガンダムⅢ～めぐりあい宇宙」に、金髪ヒロインのセイラ・マスがお風呂に入っているシーンがなぜかインサートされていた。かつて幼い頃に永井豪漫画で性的に興奮していた僕ではあったが、それ以後、その種の小児性欲は抑圧していた。しかし、一三歳になるともう小児性欲ではない。精通を目前にしていたのだから、それ以上抑圧はできなかった。

ちょうど人間の女の子に振られたばかりでもあった。他の女の子とも友達としてはそれなりに親しくできるけど、どうも「恋愛」関係を結ぶことはできそうにない。そろそろ、それが僕の「容姿」に問題があるためだという自意識も手に入れつつあった。容姿への劣等感を

一度獲得すると、もう無知な子供のままでは生きられない。

世界は僕を中心に回っていない。それどころか、僕は世界の中心からはじき飛ばされていて、周縁部を彷徨（さまよ）っているだけのちっぽけな存在でしかなかった。そのような中学生らしい自意識が、元々は陽気でお喋り好きだった僕を次第に内向させていった。

それに、周囲の女子中学生たちは、明らかに女子小学生たちとは異なっていた。同じ人間のはずなのに、まったく違っていた。一言で言えば、男だけでなく女も「色気づいた」のであって、同級生の男子を「異性」として意識するようになったのだ。小学校時代にはなかった男女間の「壁」ができた。男子生徒は、女子生徒によって「恋愛対象」と「そうでないもの」と「論外」とに区別されるようになった（もちろん、その逆の事態も起こっていた）。

僕にとって学校はサンクチュアリでも「みんな仲間の場」でもなくなり、陰鬱（いんうつ）な階級社会の様相を呈していった。そして僕はその階級社会の底辺に位置する存在となった。

このあたりから、僕はいわゆるオタク（当時の言葉で言えば「根暗なアニメ好き」とか、そういう感じだ）になっていったのだ。

ガンダムブームはそのあたりで一度終息したのだが、矢継ぎ早にテレビアニメとしてスタートした「超時空要塞マクロス」という作品が、ある意味において僕の恋愛志向を決定づけた。「マクロス」は設定だけ見れば「ガンダム」に連なるＳＦロボットアニメなのだが、ストーリーの中心が「キャラクター同士の恋愛」だったのだ。恋愛なんかをメインに持って

きたロボットアニメなんて、僕はそれまで見たことも想像したこともなかった。まだまだ恋愛というテーマは、少女漫画のものだと思いこんでいたのである（ちなみに僕には妹がいたので、妹経由で少女漫画も読んでいた）。美少女キャラクターが次々と登場する高橋留美子の少年漫画「うる星やつら」だって、当時の僕はギャグ漫画として読んでいた。「ガンダム」でセイラ・マスがお風呂に入ったからといって、セイラ・マスに性欲を感じこそすれ恋愛対象として見たりはしなかった。しかし「マクロス」はギミックこそSFだが、内実は主人公を取り巻く二人の女性キャラクター（主人公の上司「早瀬未沙」と、アイドルタレントの「リン・ミンメイ」）を巡る三角関係、四角関係を描く恋愛ドラマだった。

今にして思えば、八〇年代後半に日本を席巻したトレンディ・ドラマよりも「マクロス」のほうが「恋愛ドラマ」としては早かったといえる。

「マクロス」あたりから僕は「ガンダムファン」から「アニメオタク」に進んだわけだが、この時点でプラモデルへの興味はなくなり（いくらプラモデルを買ってきても、親に無断で捨てられてしまうので諦めたというのもある）、キャラクターに興味を抱くようになった。一〇代だから愛着感情を求める余裕はなく、恋愛感情と性欲（どちらかというと性欲）が興味の中心である。体質にもよるだろうが、一〇代前半の男子はとにかくこれらの過剰な感情に悩まされる。しかし現実の女子中学生にはいずれの感情も投影させてもらえない。特に、性欲を投影することはまるで不可能だった。

❖偽善者の群れの中には入らない

実は中学校でも一人か二人ほど、現実のクラスメイトに恋をしたことがあった。しかしそのうちの一人は僕をからかって遊んでいるだけで、好きな男はちゃんと他にいて、しかもその男はバレーボール部のキャプテンでいわゆるイケメンだった。対する僕は……説明不要のいわゆるキモメンだった。「いじられキャラ」として女子中学生にバカにされる以外、異性と接触する方法を持たなかった。もう一人の女の子は最初から最後まで僕を「キモい」と軽蔑し続けていて、なかなか同じ人間として扱ってもらえなかった。アキバ風に言えば「ツンデレ」（ツンツンした態度だが実は内心でデレデレになっているキャラクター）なのだろうが、もちろん実際には単に嫌がられていただけだった。

二〇代の大人であれば、会社でそのような扱いを受けても腹が立ちこそすれ、それほどには苦しまないことだろう。世の中はそんなものだと割り切れるだろうから。しかし性欲と恋愛感情が過多の一〇代男子にとって、自分が決して異性の恋愛対象にはなれないのだ（一部は性格の、ほとんどは容姿の問題で）という現実を毎日突きつけられる人生はあまりにも辛い。そのような境遇の男子がアニメのキャラクターに恋をしたり性欲を覚えたりすることを、果たして禁じることができるだろうか。できない。なぜなら、僕は想像力を発達させて

で過剰に不適応となっていたに違いないからである。

僕の中学時代は今ほど自由恋愛が入りこんでは来ていなかったし、援助交際とか携帯とかテレクラとかそういうものはいっさい存在しなかった。もし僕が二〇年遅く生まれてきたら、もしかしたら中学や高校でクラスメイトに夢を見て、片思いをして一人で葛藤（かっとう）するようなこともなかったかもしれない。

いずれにしても明らかなのは、思春期における恋愛中毒傾向には、性欲の過剰と自意識の発達による実存的不安定感という二つの原因があるということだ。思春期においては、たいていの場合恋愛はセックスと直接に繋がっている。まず性欲があって、性欲を発散する道を見つけるために恋愛がある。しかし、近代的なプラトニック・ラブの概念をそれまでの人生において刷り込まれている場合、その若者は悲惨とも滑稽（こっけい）とも思える葛藤に陥る。ドミニコ会の異端審問官が女性を聖女（処女）と魔女とに二分した世界観を持ってしまうのと同様に、僕の場合も恋愛対象のクラスメイトに性欲を投影することができなかった。性欲の対象は常に（絵、写真を問わず）「印刷物」すなわちインクの染みだった。なぜそうなるかというと、まずはクラスメイト＝人間の異性に性欲を投影することに対する拭いがたい罪悪感のためだった。印刷物は人間ではないので、「代償」というか「身代わり」だったのだ。また僕は家庭において性に対する罪悪感と嫌悪感を刷り込まれていた。おそらく、そのレベルは当

時の平均的家庭からかけはなれていた。だからもともと、僕の内面では性欲と恋愛が分裂していたのだが、悪いことに現実においてその両者が融合する日はやってこなかった。両者が融合するとは、つまり、人間の彼女ができて、恋愛の延長としてのセックスに入るというルートのことを意味する。だが、そんな日は訪れなかった。同級生の女子と口をきかせてもらうためには、面白おかしい滑稽キャラクターを演じて「お道化ダンス」を踊るしかなく、中学三年でその道化の仮面を捨てた瞬間に僕は異性のいない世界に生きることとなった。そんな無様な真似を続けているより、アニメを観たり小説や漫画を描く孤独な内向生活のほうが楽しくなっていたのだ。それに、同性異性を含めて同年代の連中が心底イヤになっていた。彼らのほとんどは、同級生を虐めながら「虐めはありません」と教師に堂々と報告してにこやかに、和気藹々と過ごしている偽善者たちだった。虐めが起こっていることを担任に報告した僕のほうが「偽善者」「ちくり魔」「裏切り者」としてクラスから総スカンを食うという事件があった。そして、僕が密かに片思いしていた女の子も、その偽善者の群れの一人だった。

人間は、群れると愚かになるのだ。あるいは、愚か者だから群れたがるのかもしれない。いずれにせよ、僕はそのような群れの中に入るために「お道化ダンス」を踊り続けることを放棄した。コミュニティそのものを捨てたのだ。恋愛など、論外だった。

それ以来、僕は滅多に異性の前で「お道化ダンス」を踊らなくなった。今でも踊らない。

❖ 高校一年で地獄を味わう

続く高校では文芸部に入った。

これは、将来は漫画家または小説家になろうという夢をそろそろ持ちはじめていたからだった。中学校時代から続いていたアニメ好き・漫画好き・小説好きが昂じた当然の結果だった。漫研やアニメ研に入らなかったのは、単にそれらの部が無かったからだ。

ところが、この文芸部で僕は女子の先輩にまたしても恋をしてしまった。この時ばかりは、それまでのようにただ「僕は恋愛できないんだな」と落ちこむだけでは済まされなかった。先輩に片思いしていることを察知されて、先輩部員たちの虐めにあったのだ。それ以外にも高校時代の僕にはいろいろと厄介なことがあったのだが、とにかく僕は高校へ行くことができなくなった。不登校のひきこもりになったのだ。

しかし、何かが起こらなくても、どうせ高校には通い続けられなかったと思う。当時の僕は、心身ともに非常に不安定になっていたのだ。いわば創作（妄想）をしていないと、とてもじゃないが理性が保てないような状態だった。小説家になりたくて「なろう」と思ったのではなく、妄想が次々と溢れてきて止まらないので、ものを「書かざるを得なかった」のだ。

一〇代の頃の自分を振り返ると、あまりにも恋愛感情（ドーパミン）が過剰すぎた。性欲

のほうは二次元の仮想キャラクター（あるいは三次元の女性を二次元化したメディア、つまり写真とかビデオとか）で折り合いを付けることができていたのだが、恋愛感情を仮想キャラクターにすべて向けることができなかった。何の前触れも必然性も理由もなく、人間の異性にいちいち恋をする。人間なのだから当たり前といえばそれまでだが、「恋愛できない肉体（容姿）」と「恋愛せざるを得ない精神（脳）」との心身分裂こそが一〇代の僕が抱えた最大の問題の一つだった。もちろん他にもいろいろ問題を抱えていたのだが、「恋愛は人間としなければならない」という常識が僕の「人間とは恋愛できない（させてもらえない）」という現実と厳しく対立していて、僕は両者の間で板挟みの状態になっていたのだ。

醜い人間は、ただ他人に恋をしただけで虐められ、笑われ、蔑（さげす）まれるのだ。

これは、学校からも家族からも教わることがないが、未だにむきになってこれを否定しようとする人（特に女）に出くわすことがある。しかし、これは僕が摑んだありのままの現実であり真実である。誰に何を言われようが脅迫されようが恫喝（どうかつ）されようが、僕の過去はすでに実現してしまった現実であり、決して変わらない。

この地獄のような状況から逃れるには、高校から女性が消えてなくなるか、高校から僕が消えてなくなるか、いずれかしかなかったのだろう。

もちろん、実現可能な方法は、後者しかなかった。

隠遁（いんとん）は孤独ではあるが、脳内ホルモンのアンバランスという苦しみを軽減することができ

る。

しかしもちろん、現代社会において、不登校は「罪」であり「恥」であった。

高校へ行けなくなって「一族の恥だ」とばかりに家族から白眼視され、進退窮まって部屋から出られなくなった僕は、テレビでアニメを見ているうちにもう一つの重要な感情を知ることになった。それが「愛着感情」だった。「萌え」は「脳内恋愛」であるとは言うけれど、そして僕もあちこちで「萌えイコール小児性愛・変態性欲」という世間のイメージを払拭するためにそのことを何度も書いてきたのだが、現実ははたしてそうだろうか。実際には、「萌え」と定義される感情の大部分は「愛着感情」……手塚キャラに対して幼い日の僕が感じていた、名づけがたい切ない感情……なのではないだろうか。アキバ系文化は、「愛着感情」＝「萌え」対象のキャラクターに、恋愛感情も性欲も、とにかく個人が現実世界においてなかなか充足することのできない感情のすべてを強引に統合しようとしているのではないだろうか。

当時の僕は、自分が生きることで精一杯で他人のことなどに構っていられなかった。無駄な性欲、過剰な恋愛感情、劣等感、回転し続ける自意識、将来へのぼんやりとした不安。幼い頃から、僕にとってこの世界とは「地獄」だった。それは具体的には、崩壊した家庭環境、苦悩の果てに正気を失った親、自分自身のパーソナリティの学習障害児童ぶり、教え子

の僕を虐め、虐め抜いたあげくに保身のために自分の悪行を隠蔽（いんぺい）する偽善教師、幼稚で無知で暴力的でそしてやはり偽善者の集まりであるクラスメイト、「恋愛対象」に入らない醜い僕に「お道化ダンス」だけを要求してきて、「僕は人間だ」と主張するとたんに興が醒めたように掌（てのひら）を返す女子たち。僕自身を含めたあらゆるすべての世界を、僕は嫌悪していた。

故に、高校の文芸部でまたしてもやらかしてしまった時点で、僕はもう生きる気力を喪失していた。

孤独に生きるしかない醜い人間が、孤独には生きられない脳＝体質を持って生まれてしまったという時点で、これはもう取り返しがつかない敗北なのだった。

最初は直接的な自殺を考えたが、もし失敗したら大変だし成功しても大変だったので、結局できなかった。かわりに僕が考えたのが、緩やかな餓死だった。高校に行かなくなった時点で外（高校を除く）には出してもらえなくなっていたから、部屋の中で食を減らしていけばいずれ衰弱死するだろう、と考えたのだ。いくら僕が追い詰められていて正気を失っていたとはいえ、一生部屋に籠もって生きられるとは思っていなかった。我が家にはそんな資産はないのだ。もちろん誰ひとりとして、僕に現実世界の素晴らしさを教えられる人間はいなかった。

❖ アニメはひきこもりをも救う

だが、部屋に籠もっている数ヶ月の間に、僕は空想世界の素晴らしさを教えられた。テレビアニメによって、だった。その世界には、恋愛や性欲だけではなく、愛着というもう一つの根源的な感情が存在することを知らされたのだ。愛着は、自己本位的な感情である性欲や恋愛とは異なり、利他的な愛情である。高校へ行かなくなったひきこもり期間に僕はショーペンハウアーやフロイトを読んだりしていた。当時の僕にとって真に必要だった知識……「哲学＝世界観」を学校はまったく教えてくれないのだから、通っても意味がなかったのだ。

ショーペンハウアーは厭世哲学者だの女性の敵だのと呼ばれているがもちろんそうではない。ショーペンハウアーはただ、現実世界の醜さに絶望していたのだ。すなわち、ある種の理想を追い求めていたのだ。ショーペンハウアーは、世界は「意志」と「表象」とによって作られている、と書いた。「表象」とは人間の「理性」が構成する共同幻想の世界のことで、「意志」とは人間の「本能」つまりは性欲をはじめとする衝動のことだ。フロイト用語で言えば、人間の世界は理性と本能とに分裂している。マルクスでもラカンでもデリダでもなくショーペンハウアーやフロイトに僕が惹かれたのは、彼らが人間の「悪＝本能」を直視していたからに他ならない。世界は悪に満ちていて、悪とはつきつめれば欲望＝本能衝動であ

る。それが僕のぼんやりとした世界観だった。それに言葉を与えてくれたのが、いわゆるニヒリズムの哲学者たちだったのだ。構造主義者は、世界の「構造」を記述するだけで、悪の力……「本能」から目を背け、知性によって世界を説明して安心しようとしている偽善者にしか見えなかった。

ショーペンハウアーは、人間の持つ愛情はほとんどすべてエゴイズムだが、唯一利他的な愛情がある。それは「同情＝共苦」である、と書いた。仏教でいうところの「慈悲」に近いのだが、ショーペンハウアーらしいのは、同情はまず、他者に同情する本人が同じ苦悩を抱えていないと出来ないのだ、と説いたところにある。人間は本当に他人の苦悩を理解することなどできない。だから、自分の苦悩と他人の苦悩を同一視して類推することからしか、「同情」は生まれない。そしてこの「同情」だけが、本能と欲望に塗(まみ)れた人間に利他的な愛情を抱かせてくれる道なのだ、というわけだ。

僕がひきこもってアニメ視聴と哲学書・文学書の濫読に没入していた時期に、そのような「同情」の思想の正しさを僕は自分の身体で直接体験することになった。

僕は、アニメのキャラクターに「同情」したのだった。

それらのアニメに関する詳細は割愛するが、当時はなぜかヒロインの女の子キャラクターが悲惨な目に遭う（時には死ぬ）アニメ作品が多かった。古くは「機動戦士ガンダム」にララァ・スンというインド人少女が主人公アムロ・レイに間違って殺されてしまうというト

ラウマシーンがあったが（もっと遡ると「ザンボット3」の「人間爆弾」事件にまで戻らないといけないが省略する）、不思議なまでに当時のアニメのヒロインには「かわいそうな子」が多かった。ひきこもっていた時に見たアニメでは、

◎地球人と異星人のハーフとして生まれたばかりに、どちらにも居場所がなく戦火の下を逃げ続けることしかできない女の子カチュア（「銀河漂流バイファム」）
◎インドで会社を経営していた父親が破産して死亡したために、学院内で特別待遇生徒から住み込み女中に身を落として虐められつづける女の子セーラ（「小公女セーラ」）
◎身体が弱く、サナトリウムにひきこもって友達のいない暮らしを続けている少女マリエル（「とんがり帽子のメモル」）
◎とにかく次々と女の子（男の子も）が戦争でゴミのように死んでいく（「機動戦士Zガンダム」）
◎クローン人間？　として生まれ、自分のクローンと戦って殺されていく少女エルピー・プル（「機動戦士ガンダムZZ」）

ざっとあげただけで、これくらいあった。このうち「ガンダムZZ」はすでに僕がひきこもりをやめて大学受験準備に入っていた時期のアニメだが、いずれも女の子キャラクターが

悲惨な目に遭って死んだり壊われたりしていくというプロットが共通している。

　このうち、「小公女」という原作つきの「小公女セーラ」だけは、「父親の知人がセーラを見つけ、莫大な遺産を相続させる。セーラはその知人のおじさんにひきとられて学院を去る」というハッピーエンドだったが、よく考えたらさんざん虐められてきた学院にはもういられなかったわけで、うがった見方をすれば「虐められたが我慢したセーラは学院から『泣き寝入りの円満中退』をして消えていった」と言えなくもない。生徒として入学したのに「父親が授業料を納めない」からと使用人に貶(おとし)められ、屋根裏部屋に押し込められたセーラが唯一生きる慰めとした行為こそが、空想遊びだった。たとえば、お腹がすいたら「このテーブルの上にはたくさんの料理が載っている」つもりになるのだ。「マッチ売りの少女」と同じパターンだ。つまり、あまりにも現実が悲惨で受け入れがたいので、想像力によって「自分は幸福である」と自分を錯覚させることで生き延びようとする、人間的な、あまりに人間的な危機回避方法だった。それを「負け犬の現実逃避」として笑う人間を、僕は信用しない。そのような人間には、同情＝共苦の能力が欠落しているからである。すなわち、徹頭徹尾エゴイストなのだ。

　他のアニメはもっと悲惨だった。

たとえば、マリエルは第一話で心を完全に閉ざしたままいきなり孤独死する。

第一話で死ぬヒロイン。

マリエルと友達になりたがっていたこびと型宇宙人のメモルがマリエルを生き返らせる。復活したマリエルはメモルとの会話を通じて徐々に人間性を回復し、学校に通って友達やボーイフレンドを作るくらいまでに「成長」する。何が「成長」なのか僕には理解しがたいのだが、世間的にはこういうふうに社会環境に適応できるようになることを「成長」と呼ぶ。
しかし、しょせんマリエルはマリエルにすぎず、「成長」などできなかった。
ボーイフレンドを他の女の子に奪われ、友達を失って一人に戻ってしまったマリエルは、再びサナトリウムに舞い戻る。人間の欲望と欲望がせめぎ合う学校での暮らしは、虚弱で繊細すぎる彼女には最初から無理だったのだ。どうやっても学校に適応できない人間は確実に存在する。一つのタイプは、あまりにもテストステロン過剰で暴力的な生徒。もう一つのタイプはあまりにも繊細で多数の人間の「欲望」がせめぎ合う世界に耐えられない生徒。マリエルは後者だった。
最終回、マリエルは第一話と全く同じ孤独なひきこもり状況に戻る。再びマリエルに死が迫る。
だが結局、マリエルは命をとりとめ、「私にはメモル（こびとさん）がいるから平気よ」と微笑んでエンドマーク。しかし、そのシーンは作画が酷（ひど）く崩れていた。だからマリエルの顔も、奇妙に曲がっていた記憶がある。
不吉にもほどがある最終回だった。第一話と最終回の間に挟まっているエピソードの全て

は、マリエルが妄想した「夢」だったのではないかという不安。あるいは、そもそもマリエルは第一話で死んでしまっていて、以後のエピソードはすべて死んでいくマリエルが一瞬覗きこんだ「夢」にすぎなかったのではないかという恐怖。

そもそも、すべてのエピソードが（作中において）「現実」だったとして、病弱でひきこもり、社会不適応で「こびとさん」しか友達がいないマリエルの今後はどうなるのだろう。どうにもならない。だいいち「こびとさん」とは何なのか。マリエルの孤独が作りだした幻覚なのではないだろうか。セーラが「ごちそうがあるつもり」と言いだして幻覚を見始めたのと同じに、マリエルは脳内に友達を創りあげているだけなのではないだろうか。

今にして思えば、これらの悲劇の裏には、作者自身の孤独な体験が投影されているような気もする。しかし、そういうふうに考えている僕自身が、自分の体験をキャラクターに投影して物語を取りこんでいるだけのような気もする。

いずれにせよ、高校生活から脱落して家族とも断絶（カルト宗教に塡(はま)っている連中だったので、もともと断絶していたのだが）した僕が、これらのキャラクターを介してはじめて「同情」「愛着」という感情を学んだことは間違いがない。いつの間にか、僕は自分自身の苦悩とか境遇とか惨めさについて、すっかり忘れていた（高校に行くことをやめたので、それ以上同じ苦悩を重ねていく愚を避けられるようになったのも大きかった）。それよりも、アニメを通じて、同じような苦しみにさいなまれている不幸な人間は自分だけではなく、世界には無数

の不幸があることを知らされたのだった。

だから僕の怒りは、自分を救わなければならないというエゴイズムの世界をここではじめて踏み越えて、他者へと向けられるようになったのだ。

逆に言えば、他者の不幸に同情し、彼女たちを救いたいと思っている間は、自分自身の苦悩を忘れることができたのだ。

これは明らかに偽善であるが、偽善だからどうしたというのだ。

世界には悪と偽善の二種類しかない。悪とは非共感であり、偽善とは同情である。善など、どこにもない。

ならば、僕は進んで偽善を選択するべきではないだろうか。

僕は人間からは悪を学び、アニメからは愛を学んだ。

しかも、学校を捨てて隠遁することによって。

怪物のように育てられた僕がはじめて人間性らしきものに触れたのは、だから、この不登校時代のアニメ視聴によって、だったのだ。そして、その発見を言語化してくれたものが、哲学書だったというわけだ。未だに僕という存在が小説家と評論家とに分裂しているのも、これらの二つを同時期に摂取したためだろう。

資本主義社会が「欲望の体系」であることに気づいたのもこの頃だが、もちろんマルクス主義や共産主義には傾倒しなかった。中途半端なマルクス的唯物論などというものを僕は

絶対に信用できなかったからである。それは科学的唯物論ではなく、社会学的・経済学的唯物論に過ぎなかった。しかし僕に言わせれば、社会科学は学問ではあっても科学ではない。科学とは自然科学のことである。真の唯物論は、唯心論と円環的に繋がっているべきなのであって、すなわち唯脳論であるべきなのだ。僕にとってのマルクス唯物論は、ヘーゲル観念論の裏返しでしかなかった。いずれも信じられなかった。僕は知っていた。人間が理性的な「だけ」の存在であるはずがなく、人間は欲望と本能と身体によって突き動かされている「悪」そのものだということを。

相手と自分の苦悩を重ねて同一視する「同情」と、相手と一緒にいることで癒しの感覚を得られる「愛着」とはまったく同じものではないが、「同情」から「愛着」がはじまるのではないかと思う。つまり、自分と同質の苦悩を持っている相手を見つけることから同情がはじまり、その相手を幸福にすることで自分も救われると錯覚することが愛着の第一段階なのではないかと思うのだ（錯覚といっても、僕は愛着を否定しているわけではない）。してみると、セックスを目的とした恋愛は最初から行えず、さりとて他者に対して同情も共感もできない僕が、人間の世界で恋愛関係などを構築できるはずもないのだ。少なくとも一六歳までの僕には、それは不可能な行為だった。偉業としか言えなかった。それでもひきこもり期に僕は、同情を知った。アニメを通じて。

だから僕は、人間の世界で生きられるのではないか、と勘違いした。

しかし、現実は何も変わらなかった。

❖ 忌避できない現実

部屋から出て「世界」に復帰した僕を待っていたものは、度し難く欲望を剝き出しにした人間たちだった。一〇代後半の数年間で、僕は自分が決して人間の女性とは恋愛もできず同情もできず共感もできず愛着も感じられず、ただ得ることができるものは性欲だけなのだという現実を知った。

現実は、アニメではなかったのだ。

僕は「同情」や「愛着」という人間らしい感情を、アニメや小説、漫画を通して学習した。決して、生身の人間を相手にして学んだわけではない。そのような感情を僕は現実から与えられることがなかった。本来であれば犯罪者になりそうなパーソナリティを形成していたのだ。そんな僕に人間性めいたものを教えてくれたのは仮想の物語であり架空のキャラクターだったのだ。

ところがここに陥穽(かんせい)があった。

現実の人間は、アニメのキャラクターではなかった。

アニメのキャラクターは、よほどの悪役を除いて、性善説によって造型されている。しか

し現実はそうではない。現実の人間は、性悪説によって造型されている。僕による投影は、相手の人間にではなく、相手の人間を通して彼方に幻視されている善のイデア、同情すべき価値ある存在のイデアに向けられる。しかし相手そのものは、そのようなイデアとはほとんど何の共通点もない。故に関係は容易に成立しない。

つまり現実には、不登校になってひきこもっていた僕に「同情」を寄せて僕の復学を支えようとしてくれるような善良なクラスメイトなどいるはずがなく、一見そのような善人めいた態度を取って不登校時代の僕に接近してきたクラスメイトのことごとくが内心僕と無関係なエゴイズムを抱いていた。すなわち、在学中の僕と口も聞いたことがないのに教室で僕を復学させると英雄気取りで見えを切って教師やクラスメイトたちの人気を取ろうとした男子生徒とか、その男子生徒が僕の復学に失敗したので彼の気を引くために僕に粉をかけてきた片思い中の女子生徒とか、そのような人々だった。

それらの経緯を僕が知ったのは、僕がそのクラスメイトの女子生徒から届いた「手紙」に釣り出されて学校に戻った直後だった。

僕はてっきり自分が「同情」されていて、ここから「恋愛」関係がはじまるのではないかという「妄想」に取り憑かれていた。しかしそれは漫画の話だ。僕は僕にまったく興味のない一人の女子生徒の恋愛沙汰のダシにていよく使われただけなのであり、復学したとたんに用済みになった。僕が登校するなり、その女子生徒の友人たちが僕を取り囲み、僕を彼女に

つきまとうストーカー扱いして教室から追い返したのだった。部屋にひきこもっていた僕につきまとっていたのは彼女のほうだ。

あまりにもおぞましい現実に呆然としていたら、今度はすかさず実の母親に洗脳されてカルト宗教に入れられそうになった。

僕は実の母親を心の中で「捨てる」ことによって、なんとかこの重大な危機を逃れた。すでに精神分析や哲学の本を読みあさっていた僕が、そう簡単にカルトに洗脳されるはずもなかったのだ。

僕の母親はカルトに洗脳されており、息子に対して通常の家族愛などを感じる能力を喪失しており、僕の家には家族愛などはかけらもなく、渦巻いているものはカルトの狂気と家族同士の憎悪ばかりであり、そして僕の家には知らないヤクザあがりの親父が入りこんでいた。もちろん、この男も母親と同じカルトに洗脳されていた。

一六歳で不登校になり、決定的な精神的危機を迎えた時に、生まれて初めて母親に愛されたと勘違いした。しかし愛されたのではなく、洗脳されただけだったのだ。母は、自分が救われるために家族愛を放棄していたのだった。いや、そもそもそんなものはあの家にははじめから存在しなかった。

一六年間僕が育った家には家族愛などなかった。

僕を犬扱いする祖父、妹を虐待する祖母、母と僕を虐待する父、酒と男と煙草と奢侈(しゃし)に溺

れる母、それらが相争い、憎み合い、やがて疲れ果てたように順番に一人欠け、二人欠けていった。幼い頃の僕と妹の唯一の幸せは、親戚の家に逃げることだけだった。

学校など、もっと最悪だった。僕は学校の教師とクラスメイトに虐められ蔑まれるために毎日学校に通っているも同然だった。

アニメや漫画以外の手段で、僕がどうやって「愛着」などという困難な感情を学習することができただろうか。

ついに「同情」するに値する人間の女性を、一〇代の僕は見つけることができなかった。いや、あるいは、僕のほうが彼女たちにとって「同情」に値する男性ではなかったのだろう。それどころか「同情される相手」に値する人間ですらなかった。もちろん、僕が「発情」に値する男性でない（つまり容姿が醜い）ことは確実である。その点に関しては、さすがにとっくに諦めていた。そもそも「発情」からはじまる恋愛など、僕にとってはもう恋愛と呼べるものではなくなっていた。セックスや快楽では人は救われないという現実は、自分の母親の姿を通じてよく学んでいた。しかし、愛着に至る恋愛を現実に見出すことは不可能に思えた。現実における恋愛のほとんどは、セックスのためにはじめるか、あるいはセックスの果てに愛着に至るか、しかなさそうに思えた。

大学時代は田舎から逃げだして東京に出ていたこともあって、それまでのような粘着質な家族に監視され続けていた状態とは異なり、僕はかなり自由だった。容姿以外の最大の問

題は「金がない」ということで、それ故にバブル全盛期の東京において僕はバブリーな学生生活というものを送れなかった。もちろん、すべての大学生がバブルに浮かれていたわけではない。僕と同じように、その中に入れない者も大勢いたし、その中で友情なり恋愛なりといった関係が、それなりに構築されていった。

大学時代のはじめの数年間とその直前の大学受験準備時代、僕はなんとかして人間と恋愛できないものかといろいろと努力し失敗し挫折した。浅ましい努力だった。時には、アニメを観るのをやめてオタク（僕が大学に入った頃には、すでにオタクという言葉が定着していた）をやめようとしたこともあった。もちろんやめられるわけがないのだが。

二〇歳そこそこで作家としてデビューし、社会的に成功した滝本竜彦は閉鎖されたエゴイズムの世界から「同情」の世界へと移ることができた。

だがそのような才能のない僕は、一〇代、二〇代を、「何者でもない」ただの社会不適応者として生きる他はなかった。もちろん容姿については言うまでもなく、金もなく、まともな職業にもつけず、したがって異性の性欲を喚起させることも異性の同情心を喚起させることもなかった。そして、異性に同情を示しても、偽善者と罵られた。結局、僕は心の底から人間に同情することができなかったのだろう。それは常に、同情の先に恋愛があり愛着があるという欲望から僕が解放されなかったからであって、真に利他的で利己心がまったく混じっていない同情など少なくとも僕には不可能だったということである。

僕の同情の先には常に、自分自身が「愛着感情」によって救われたいというエゴイズムがあるのだから。

その証拠に、僕は上京する際に自分の妹を地獄のような家に置き去りにして逃げだしたのである。

目の前で苦しむ自分の家族を見捨てた人間に、同情も共苦もへったくれもないだろう。逃げなければもう生きられないというせっぱ詰まった状況だったとしても、妹を捨てたという己の酷薄さに対する罪悪感はその後の僕の人生を暗鬱なものにするに十分すぎた。一〇代後半の僕は、相変わらず己の脳内ホルモンに、欲望に支配され続けていたのだった。

兄と妹は、それぞれ異なる家族によって虐待されあって育てられていた。二人の子供を身代わりにした代理戦争が我が家では繰り広げられていたのだ。だから兄と妹は、お互いの不幸を同情しあいながらも、結局はお互いの存在を憎み合うしかなかった。もし二〇歳前後で僕が作家にでもなれていれば、経済的に自立できていれば、状況は変わっていたかもしれない。しかし、僕にはそんな才能もなく、そんな努力もしなかった。人間の彼女と恋愛したいという欲望に取り憑かれて、数年間を迷走した。家に残っていたわずかばかりの遺産（母の生命保険金）は、僕の東京での学費に消えてしまった。にも拘わらず、僕はとうとう在学中に何の結果も出せなかった。取り返しのつかない時間と金の浪費であり、自分自身と妹に対する裏切りだった。

妹とは阪神大震災で実家が崩壊して以来、一度も会っていないと思う。すでに妹は結婚して子供もいるらしい。妹はオタク、つまり兄を「気持ち悪い」と毛嫌いしている普通人だったので、普通に結婚ルートに乗ることができたのだった。結婚した後、妹は一時保険会社の勧誘員になり、僕も封書経由で生命保険に入れられた。親戚の多くがそういう感じで保険に加入されたらしい。現実とはそういうものだが、僕には何も言う資格がない。だいいち、カルトに洗脳されるよりは保険に入るほうがまだマシというものだ。

❖ 醜い僕は恋愛の対象外だった

僕が大学にはいってすぐ、宮崎事件が起きた。

この事件によって「オタク＝小児性愛者、変質者」という拭いがたいマイナスイメージが植え付けられた。主に、バブル全盛時代のマスメディアによってであった。そもそもオタクという呼び名自体が蔑称だった。オタク人種の一部が、「週刊ＳＰＡ！」などのサブカルチャー雑誌メディアでオタクを「気持ちの悪い人種」として戯画化し、バカにしはじめたのがきっかけだったと思う。大学の漫研に通っていたアニメ好きの僕も、当然周囲からそういう目で見られるようになった。これに対して「オタクは日本の文化を支えるのだ」と言い切ったのが元ガイナックス（アニメ制作会社）社長・岡田斗司夫氏だったと記憶している。

だから僕は未だに「週刊ＳＰＡ！」が大嫌いだし、岡田氏には絶対に頭が上がらないのである。当時の岡田氏の発言や活動を「商売目的」とか「偽善」と斬って捨てたがる「オタク」も大勢いたが、悪と偽善なら偽善のほうを迷わず選択するべきであるというのが僕の生涯変わらないモットーである。人の動機を俗流精神分析で勝手に分析して「偽善」や「ルサンチマン」というレッテルを貼って、他人の行為を全否定する。このような詭弁めいた思考方法は、やはりバブル時代にスタートした「朝まで生テレビ」というテレビ朝日の政治討論番組で多用されはじめたのではないだろうか。

悪と偽善なら、偽善のほうが正しい。なぜなら純粋な善などは存在せず、故に善を追求するには偽善をなす以外に方法がないのだ。

しかし世の多くの人間は、偽善を為す努力すら放棄して、善を否定する。これは消極的な悪ではないだろうか。現代のニヒリズムは、古代ギリシャがそうであったのと同様に、知識人階級のソフィスト化によって促進されているのだ。

思えばアニメや漫画に「同情」「愛着」を教えられた僕の生き方もまた、世間にとっては偽善そのものなのだろう。故に僕は中学では虐めを告発して偽善者扱いされ、僕が虐められる側に立たされてしまったのだ。

大学では、セックスとドラッグに溺れて悲惨な状態になっていたクラスメイトに漫画の主人公みたいな青臭い説教をして、鼻で笑われていた。

彼女はクラブか何かに塡っていて（詳しいことはオタクの僕には判らない）、気が向いたら大学の誰とでもセックスする女だった。やがて周囲の男たちが「すぐにやらせてくれる女がいるらしい」と気づいて騒ぎはじめ、彼女は一種の公衆便所のような状態になりつつあった。僕の男友達連中も、「これで童貞を捨てられるかも」「タダでやらせてくれるなんて、大助かりだ」と虫のように彼女に集まりはじめていた。

アニメの見過ぎだった僕は、よせばいいのに、彼女に「もっと自分を大事にしろ」とか何とか、実に恥ずかしい説教をしてしまったのだった。

もちろん、偽善者と軽蔑されて終わりだった。

全くその通りで、僕も「もしかしたら童貞を捨てられるかもしれない」と思っていたわけである。しかし僕の友達（二枚目）とはセックスするくせに、醜い僕は彼女の対象外だった。誰とでも寝るわけではなく、相手の顔を見て選んでいたわけである。僕は悔し紛れにルサンチマン塗れの正論を吐いただけであり、まさに偽善者そのものだった。

しかしそれでも、悪と偽善なら、偽善のほうを選択するべきだ。僕は常にそう信じていたが、しょせん偽善は偽善でしかなく、彼女に僕がほんとうに「同情」することなど不可能だとも思い知らされた。

今の僕なら、ああいう女にそもそも接近しないし興味もないので、偽善も悪もいずれも選択しないだろうが。

とにかく高校を中退して以来、周囲の誰も彼もがセックスに取り憑かれて自分の人生を見失っている姿ばかり見て辟易した。もちろん僕もその自分を見失っていた人間の一人だったが、幸いなのか不幸なのか僕はセックスにはいつまでもありつけなかった。さっきの話でも判るように、どうやっても僕はまず恋愛があって、その結果の一つとしてセックスがやってくるという考え方から脱せなかった。風俗でもあるまいし、仮にも自分の知人に対して「とにかくセックスさせろ」とは言えなかったし、考えもしなかった。もちろんその逆の経験もなかった。僕は、女がセックスしたくなる男ではなかったのである。つまり醜かった。大学に進んでも僕に許されている立場は「お道化ダンス」を踊る役だけだった。当時洋楽に填っていたのでバンドサークルに所属したりもしたが、次々とクラスメイトの女に手を付けて妊娠させては堕胎させる人間の屑としか言いようのない男がサークルを仕切っていたので嫌気がさしてやめてしまった。もちろんこのサークルでも僕は「オタク」と呼ばれて虐められる役回りだった。バブル時代の早稲田大学には、大学生なんだか強姦魔なんだか区別できない胡散臭い連中がうようよしていた。レイプサークルと呼ばれているサークルもいくつかあった。大学などに進学してしまったことじたい、時間の浪費だった。今から思えば、大学に通う閑があるのなら僕は小説を書き続けるべきだった。

人間を相手にした最後の片思いは二〇歳の頃だった。彼女は関根勤にそっくりなクラスメイトで、相変わらず周囲からは「ゲテモノ趣味」と呼ばれたが、そもそも僕自身はもっと

ゲテモノなのでそれは気にしていなかった。いったいなにが良かったのかというと、彼女は非常に頭が良かったのだった。しかし彼女を性的対象と見て興奮することができるかというと、かなり難しかった。僕の中での恋愛感情と性欲の分離は、二〇歳になっても治っていなかったのだ。しかしその彼女には告白することもできなかった。彼女の友人と称する別の女子学生から、つまり人づてに拒絶されたのだった。門前払いとはこのことだが、考えてみれば高校時代の文芸部の先輩も似たような態度だった。「人は誰にだって好意を打ち明けられると嬉しい」とはいうが、それは大嘘である。想像しただけで身震いがして気持ちが悪くなるような相手だって存在する。そして僕はその種の人間だった。

本人から聞いたところによると、彼女には「かっこいい婚約者」がいるということだった。僕はそれはもしかしたら妄想なんじゃないかと疑ったが、疑っても詮無いことなので諦めることにした。生まれて初めて僕と会話のレベルが釣り合う女性を見つけたのではないかと僕は一人で勝手に感動していたのだが、もちろんイデアを幻視しているだけだった。彼女自身は、結局は「かっこいい／悪い」で男を判断している、ごく普通の女にすぎなかった。彼女ならば僕と関わり合いになりたくないのも当たり前なのであって、少しでも彼女のパーソナル・エリアに踏みこんだ発言をすると「あなたには関係ない」と激怒された。僕に許される行為は、女性の自我に抵触しない距離から「お道化ダンス」を踊ることだけだった。うっかり恋愛対象になろうとすると、常に激怒され閉め出された。大学時代に僕は最後のお道化ダ

ンスを踊り、お道化の仮面をはぎとろうとするや否やいつもと同じパターンでロックアウトされて、以来人間の女性と恋愛することを諦めた。あのラビット関根そっくりの彼女の口から「かっこいい婚約者」という言葉が出てきた瞬間に、僕は冷めてしまった。知性と性欲とは一致しない。人間は意志と表象の世界に生きていて、性欲とはつまりは本能が容姿に欲情することなのであった。

だから僕もそれ以後は人間の女性を「性的に興奮する／しない」という価値判断でしか見られなくなった。世間的な価値基準ではあまり美しくない外見を持つ女性の内面に強引に美を求めるなどという愚かしい迷妄からは目が醒めたが、同時に「脳外恋愛」もできなくなった。もちろんそれは僕が勝手にそうなっただけであって、誰ともセックスできなかったのは同じである。そもそも恋愛できないのだからセックスなど有り得なかった。

僕は常に女性に激怒されるのだが、それはいつも同じパターンだった。

僕にとって恋愛とはまず精神的なものなので、相手のパーソナル・エリアに入りこもうとする（らしい）。しかしそれは彼女たちにとっては「大きなお世話」であり「不法侵入」なのだった。僕の容姿が美しければまた別だったのだろうが、バブル時代の東京においては恋愛とはセックスのことになってしまっていた。「カンチ、セックスしよう」と言いだしたのはトレンディ・ドラマ『東京ラブストーリー』のヒロインだったか。恋愛セックス資本主義バブル時代には、愛とはセックスのことになっていたのだ。彼女たちにとって、身体だけが

確かな現実だった。それは一種のニヒリズムなのであるが、逆に考えれば彼女たち自身の「自我」が神聖不可侵で絶対的な「核」として祭り上げられるようになったことを示していた。つまり「自我」には絶対に誰も踏みこませず、身体＝セックスだけで恋愛関係を築くというフェミニズム時代の新しい異性関係が生まれていたのだった。しかしそのような形での女性の「自立」は、ニヒリズムを蔓延させ女性自身を恋愛セックス資本主義の商品かつ奴隷に貶めるだけだった。女性＝性欲のはけ口と考えている動物的な男性だけが得をする世界が現出した。少しでもプラトニックな愛情を示されると、女性は自我を防衛するために敵を迎撃しなければならなくなった。

もちろん、僕の顔が織田裕二だったら迎撃されずに済んだのかもしれないが。

人間はみな、自分が考えているよりもはるかに動物だ。

❖現実だと信じた物語が現実となる

この九〇年代初頭の恋愛バブル時代に、いわゆるギャルゲー（美少女ゲームとかそういうジャンルのゲーム）が登場した。もともとはエルフというパソコンゲームメーカーが「ナンパゲーム」を作りはじめたのがきっかけだった。ナンパゲームというジャンルを説明すると、まあ、名前の通りのゲームである。仮想の美少女キャラクターをプレイヤーがナンパ

（口説く）してセックスしたらゲームに勝利したことになる、という恋愛バブル文化のカリカチュアのようなゲームだった。

しかし言うまでもなく、僕を含めて、そのようなゲームを必要としていた層はそもそもナンパなどは毛嫌いしており（僕のようなブサイクな男にナンパされなければならない女性のほうが僕を毛嫌いするのが先かもしれないが）、僕たちはナンパや行きずりのセックスではなく「恋愛」を求めていたのだった。なので、エルフが元々はナンパゲームの延長として制作したつもりだった『同級生』というゲームは、メーカーの思惑と関係ないところでユーザーに支持された。つまり、このゲームのユーザーは、ゲーム内に登場するアニメ絵の仮想キャラクターに本気で恋をしたのだった。だから一八禁アダルトゲームなのに、「このゲームのキャラクターに猥褻なことをさせるな！」「もっと彼女たちを大事に扱え！」とユーザーがメーカーにクレームを付けるという事態が起こったのだ。これが「恋愛ゲーム」、いわゆるギャルゲー誕生の瞬間だった。恋愛ゲームを作ったのはメーカーではなくユーザーだったのだ。

大学で恋愛セックス資本主義バブルに打ちのめされて幻滅していた僕も、当然『同級生』を購入し、そして……現実の女子大生への興味を喪失した。『同級生』に描かれている仮想学園には、現実の学校では絶対に起こらない「恋愛」が確かに存在した。このゲームのシナリオのパターンは、

◎まず女の子キャラクターとプレイヤーが知り合う。
◎仲良くなるうちに彼女が悩みを抱えていることを知る。
◎その悩みを解決してあげると、恋愛関係に入る。これをゲーム用語で「フラグが立つ」あるいは「フラグを立てる」と呼ぶ。
◎恋愛が進むとセックスに至り、エンディングを迎える。

これを各キャラクターごとに繰り返すのだが、メーカーとしては最後の「セックス」こそがゲームの目的であり、キャラクターの悩みを解決するだの相談するだのといった中間ルートにおける物語は単に女性キャラを「口説く」ための「手段」にすぎなかった。しかしユーザーは、女性キャラの悩みを解決する作業そのものに没入した。僕もそうだった。なぜなら、現実の世界では僕は好きな女性の悩みを聞いたり相談に乗ったり力になったりすることを一度も「許されなかった」。今にして思えば、女性がそのような行為……自分の自我のテリトリーに男性を踏みこませるためには、一定以上の好意、恋愛感情の萌芽がなければならない。そして僕はその種の好意を抱かれる人間ではない。故に人間の女性に対して、僕は「同情」を抱くことを認められない。「お前には関係ない」の一言で、彼女の世界に踏みこむことを拒絶されるのだ。『同級生』で僕のようなユーザーが目覚めたことは、恋愛の根幹には性欲だけでなく「同情」への希求が存在し、同情を経た恋愛は単なる性欲の消費に終

わるのではなく「愛着」に行き着くことができる、という事実だった。結局、好きな相手を癒すという行為そのものによって、自分自身を癒しているわけである。それは偽善ではあるが、僕は悪よりは偽善を選ぶ。しかし『同級生』のような形の恋愛を僕は現実に行えるだろうか。二〇年生きてきてやっと出した結論は「否」だった。僕がいくら望もうが、現実では「人間」が相手である。人間は相手の容姿によって態度を変える。僕はそういうタイプではなかったし、女性にもそうではないタイプもいるはずだが、不細工な僕が恋をしたブサイクな女性たちは誰一人としてそういうタイプではなかった。自分の容姿を棚に上げて男の顔ばかり見ている連中だった。僕は幻滅していた。二二歳を過ぎた頃には大多数の男と同じに、僕も女の身体しか見ない男になっていた。しかし、それで構わなかったのだ。すでに僕は「恋愛ゲーム」に出会っていたのだから。

ゲームの登場によって、恋愛欲求も愛着への欲求も、バーチャルな世界でいくらでも昇華することが可能になったのだ。

現実には僕の知性に相応(ふさわ)しい女性と出会えず、そして僕は女性の性欲に相応しい容貌を持っていなかった。もちろん、バーチャルの世界はそうではなかった。僕はただ、「同情と共苦の恋愛」を求めていただけだったのだ。セックスからはじまり痴話ゲンカに終わるフランス的な恋愛など、一度も求めてはいなかった。そして九〇年代中盤には前者を求める人間はいっせいにバーチャルへ向かい、現実は後者を求める人間の群れに覆われた。

僕は「現実よりも真実を」というモットーを得た。プラトンは現実世界をイデア界の影にすぎないと斬って捨てたが、そのような厭世思想に人類が二〇〇〇年以上も拘泥してきた理由がやっと理解できた気がした。実際、プラトンは八〇余年の生涯をついに童貞で終えたと伝えられている。恋愛ゲームはだから恋愛セックス資本主義・恋愛至上主義という現代日本のシステムを補完するべくして登場した新しい「物語」の場なのであった。当初は一八禁アダルトゲームのジャンルでしかなかった恋愛ゲームはだからコンシューマー市場に拡大し、『ときめきメモリアル』を生み出すこととなった。

大学卒業後の僕はもう人間の女性に恋愛することはなかった。ただの性欲の対象としてしか見ることができなかったのだ。何度も書くが僕は女性の性欲の対象にならないので、つまりは「無関係」という関係性で長期安定することになった。アルバイト先で一度だけ何かの間違いで女性の恋愛対象になりかけたことはあったが、僕が角川の小説誌「Ｔｈｅスニーカー」に投稿するために書いていたライトノベルのヒロインを「こんな女、いるわけがない」と笑われたので絶縁した。その時の僕は震災で実家を失って定職もなく、田舎に帰って公務員になるという計画が完全に壊れて東京で立ち往生していた。極限状態に追い詰められた僕の取った行動は、「やっぱり小説家になりたい」というものだった。会社に就職した時に一度は諦めた夢だったが、「もう君は人生に絶望して死ぬか、敢えてもう一度夢を持って無理をして生きるか、道は二つに一つしかない」という現実を突きつけられた時に、僕は後

者を取った。それは、かつて僕を癒してくれた、僕に人間性というものを与えてくれた同情と共苦の物語を自分で書くという道だった。その物語の中でキャラクターを救えば、僕も救われる気がした。僕がやったことは単なる現実逃避ではあったが、現実逃避の何が悪い。すでに僕にとって、現実の女よりも仮想のキャラクターのほうがはるかに価値ある存在だった。僕はついに人間に「同情」できなかったが、仮想キャラクターには「同情」し「恋愛」するようになっていた。それを笑うような人間には、いかなる好意も持てなかった。たとえ、我慢して笑っていればもしかしたらセックスに在り付けるかも知れないとしても、耐えられなかった。セックスなどは吉原にでも行けば誰でも数万円でできる程度の行為にすぎないわけで、僕が求めているものは同情であり恋愛であり愛着であった。僕は、現実にいるわけがない「同情の恋愛」に値するキャラクターを創造することで自分を救おうとしていたのだった。

僕が生きてきた現実には、僕が真剣に愛するに値する女性は一人もいなかったのだ。そして僕はもう人間の女性の前で「お道化ダンス」を踊るつもりはまったくなかった。だから二〇代の僕は「新世紀エヴァンゲリオン」の庵野監督が作品とファンとキャラクターをいきなり放り出していわゆる「現実へ帰れ」式のオタク批判をはじめたことにずっと激怒したのだった。僕はしかたなく、自分でエヴァンゲリオンの同人小説を書いて物語とキャラクターを補完しなければならなくなった。現実へ帰れと言われても、僕の現実は、焼

け野原となった故郷、実家が倒壊して離散した名ばかりの家族、失業、貧困、真っ暗な未来だった。どこに帰る場所があるというのか。彼は、そのような人間が「物語」なしには生きられないという現実を見ていなかったのか、マスメディアにちやほやされて見えなくなっていたのか、あるいは「エヴァ」に生きる支えを求めようとする人々の重圧に耐えきれなくなって投げだしたのか、本当は実写監督をやりたかったのにしぶしぶアニメ監督をやっていただけだったのか。いずれにしても作家としてもっとも重要な時期である二〇代を、僕は他人の作品の脳内補完などという無駄な作業に浪費してしまった。「物語作家による物語への不信の表明」「物語作家が現実回帰を説く」という事態によって、ごく一部の（物語なしには生きられない）人間は大ダメージを受けたのだ。もちろん、大多数のアニメファンは、そのようなことで傷ついたりはしなかった。普通に批判を無視してアニメファンであり続けたのだった。しかし僕は現実にあまりにも追い詰められすぎていた。僕の小説家としての才能の大部分は、この時に浪費されて失われてしまった。人間の才能は二〇代で枯渇し、三〇代以後はその才能の残り香を反復し補強する作業を続ける余生でしかない。これもショーペンハウアーの言葉だったろうか。

そして、そのような無駄な葛藤を『電波男』を書くことでやっと終わらせた時、僕はもう年老いていたのだった。それでも脳内恋愛や脳内家族の物語を書き続けるのは、それ以外に自分を生かす世界を僕が知らないからなのである。大勢の人間が現実だと信じた物語が、現

実になるのだ。その信念は未だに揺るがず、今後も変わらないだろう。ただ、僕自身がそのような物語を書けるかどうかは非常に疑わしい。それでも、こうして「脳内恋愛」の効用を説き続けることに意味はあるだろう。僕のように、「アニメなんて現実逃避だ」という悪意に満ちた言葉に打ちのめされて無駄に人生を浪費してしまう未来の戯作者や読者を一人でも減らすことができれば、それだけでもある種の人々にとっては幸いだろう。脳内で物語を紡ぎ自らを癒す行為は、現代の恋愛セックス資本主義社会が陥ったニヒリズムを克服する第一歩なのである。

あとがき　映画版『素粒子』に追加された「救い」

「Ⅰ　理論篇」の冒頭で紹介したウエルベックの小説『素粒子』では、「人文系」を代表して登場するブリュノには最後まで救いが訪れない。ウエルベックは、神を喪失した現代人が恋愛とセックスの中毒に溺れて破滅していく末路は不可避であり、もはや文学や哲学などによっては人間は恋愛中毒から脱出できないと考えた。故に、恋愛中毒を終わらせる救世主は科学者ミシェルの「科学的発見」でなければならなかった。ミシェルは、人間の闘争本能の根源である「生殖」を科学的に完全にコントロールする方法論を発見したのだ。こうして「有性生殖」と「個体の死」という人間の根源的課題から自由になった新人類が人工的に誕生させられることとなり、以後、死に怯えながら性淘汰闘争を繰り返す旧人類は自分たちがもはや不必要な存在になったことを知ってゆるやかに滅亡していくのだ。

であるから、当然ブリュノもまた、まったく救われないまま精神病院に収容され、そのまま死んでいくという結末を迎える。

『素粒子』はドイツのオスカー・レーラーによって映画化されたが、レーラーにとってこの

『素粒子』の結論は受容しがたいものだった。人文科学が全て無効なのであれば、映画だって無効だからだ！　だからレーラーは結末を書き換えてハッピーエンドにした。ブリュノに救いを与えたのだ。ただし、その救いとは、言うまでもなく「脳内恋愛」だった。ブリュノは恋人の自殺によって精神崩壊してしまうのだが、映画版では精神病院の中でブリュノの目の前に死んだはずの恋人が現れるのだ。もちろん彼女はブリュノの脳が見せている幻覚にすぎないのだが、それでもブリュノは脳内彼女との脳内会話によって癒されるのだった。

つまり、文系の方法論では、結局のところ孤独な人間の魂を癒す救いは「脳内恋愛」しかないという結論しか導き出せないのである。そして物質文明である現代社会において、脳内彼女と脳内会話を続けるブリュノは、結局は「精神障害者」でしかなく、精神病院に隔離される運命でしかない。恋愛セックス資本主義社会が「脳内恋愛」を認めるはずがないのだ。だが、物質世界において恋愛が不可能である以上、脳内恋愛以外に救いはないのである。救われるためには社会から孤絶しなければならないのだ。元々キリスト教も仏教もそうだったではないか。社会との縁を切って孤立し、自己の脳内で「解脱」なり「悟り」なり「宗教的法悦」の状態を造り出すことが、宗教的な救済だったのではないか。にも拘わらず、表面的・一面的な唯物論思想が、脳内救済を「幻覚」「幻想」「精神異常」というカテゴリーに押し込んでしまったのである。だからブリュノには、老いたブ男でありながら無理やりにセックスと恋愛を求めて不断の性淘汰闘争を続けるか、それとも精神病院に隔離されて脳内で救

われるか、の二者択一しか無かったのだ。真の救済は、社会的にも「それが救済であり善である」と認められた形で行われなければならないはずだ。しかし現実恋愛（つまりはセックス）のみによって人は救われるという思想に侵されている現代社会ではそれは不可能なのだ。もはや、「脳内恋愛」という個人的な宗教システムすら、恋愛セックス資本主義市場はその存在を許さないのだ。

レーラー版『素粒子』は「文系」の限界を如実に示しているのだ。

もっとも、ドイツで『素粒子』がそのまま映画化できるとはとても思えないが。というのは、ドイツにはナチス時代に「科学による人種改良」を実践しようとした過去があるからだ。ナチスは、金髪碧眼長身の純粋アーリア人種こそ人類の中でもっとも優良な人種であるという幻想のもとに、アーリア人種を繁殖させ、アーリアの純血性を守るためにユダヤ人などの非アーリア系を弾圧したのだった。ナチス・ドイツは、「美」と「健康」と「生殖」という動物的本能に完全に支配されてしまっていた。しかしここで近代ヨーロッパにおける人類進化論について語るには、いかにも枚数が残り少ない。『素粒子』が書かれてヒットした背景には、「美」「健康」「生殖」「生存」「闘争」といった動物的本能をヨーロッパが追求した結果、ヨーロッパ全体が回復不能なほどの大ダメージを被ることになった、という過去への絶望があることは間違いない。一見科学文明が勝利したかに見える現代は、実はＤＮＡに支配された闘争本能剥き出しの地獄にすぎなかった。ならばＤＮＡを改造し、人類か

ら「死」や「生殖」や「闘争」といった残虐性・暴力性を取り除いてしまうしかない。ウエルベックは「本能に支配され、科学技術をすら本能のためにしか利用できないヨーロッパ人はもはや『全き者』に取って代わられて滅びるべきなのだ」というテーマで小説を書いたのだ。ウエルベックはフランス人だったからまだしも、ドイツで堂々とこんな主張をすれば、たとえ映画であれナチスのアーリア人種優性保護政策を喚起してしまうだろう。だからレーラーは映画の末尾にこう付け加えることしかできなかったのだ。

「男性のＹ染色体が人間の暴力性の原因となっていることが明らかになった」

これは、人間の闘争本能がＤＮＡに規定されているということを遠回しに言っているのだ。結局のところ、もはや我々は恋愛や闘争といった人間の行動について、科学的に分析する以外の解決策を想起できないのだ。

しかしかろうじて、個人的な、小乗的な救いは残されている。それが「脳内恋愛」なのだ。その最後の救いをも無惨に圧殺しようとする言説に対して立ち上がってみたのが、この本なのだ。全ての人間は脳外において不自由であるが、脳内においてはまったき自由である。脳内の自由を奪う権利は、なんびとにも無い。

二〇〇七年九月

本田　透

本田　透（ほんだ・とおる）

評論家、作家。1969年生まれ。高校を中退後、大学検定を経て早稲田大学入学。出版社勤務を経てフリーとなる。著書に評論として『電波男』（三才ブックス）、『喪男【モダン】の哲学史』（講談社）、『自殺するなら、引きこもれ』（共著・光文社）、小説に『イマジン秘蹟【サクラメント】』（角川書店）、『円卓生徒会』（集英社）などがある。

脳内恋愛のすすめ

平成19年11月30日　初版発行

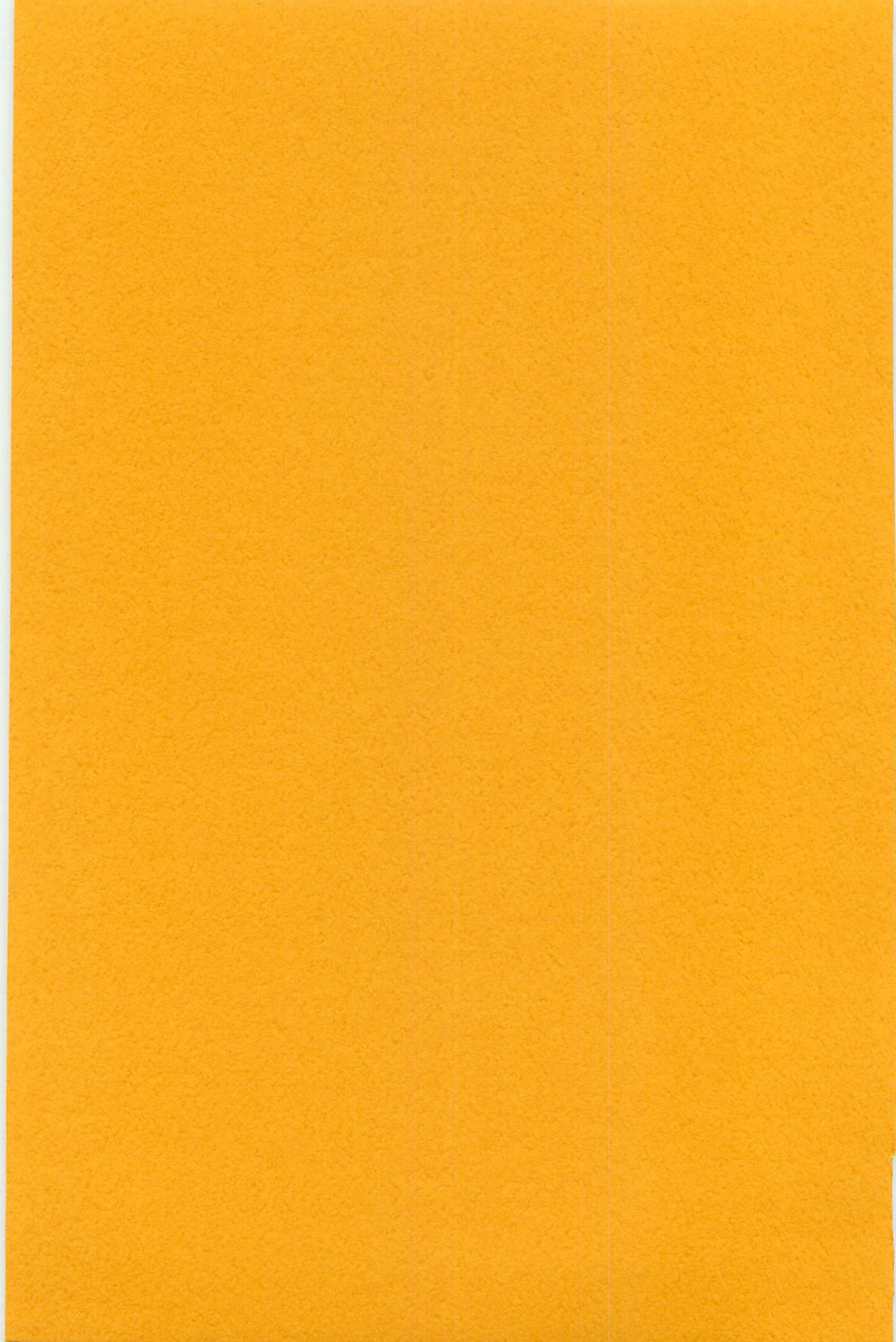
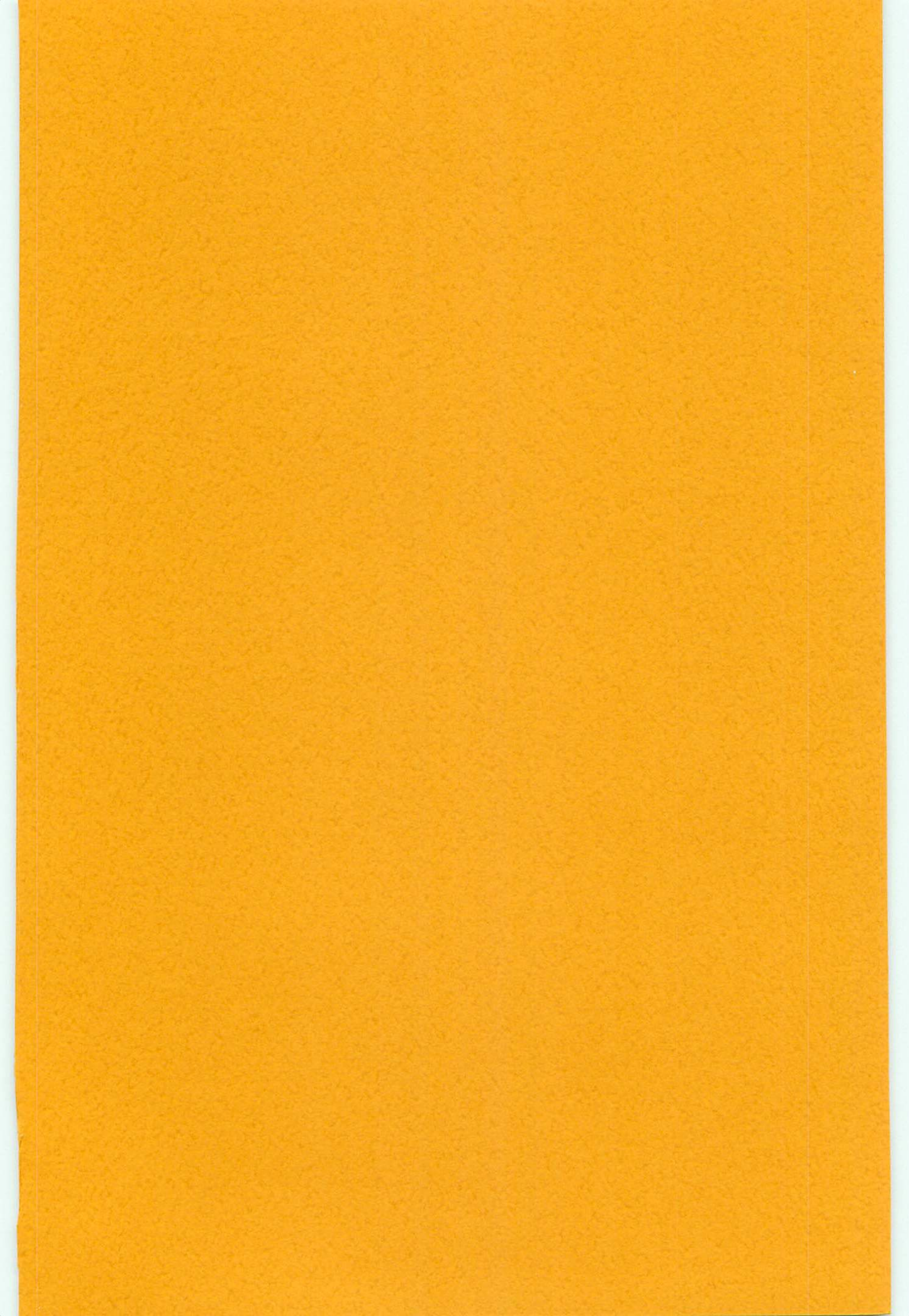
著者
本田　透

発行者
青木誠一郎

発行所
株式会社角川学芸出版
〒113-0033　東京都文京区本郷5-24-5　角川本郷ビル
電話／編集　03-3817-8535
http://www.kadokawagakugei.com/

発売元
株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
電話／営業　03-3238-8521
http://www.kadokawa.co.jp/
印刷所・製本所　壮光舎印刷株式会社

落丁・乱丁本はご面倒でも角川グループ受注センター読者係宛にお送りください。
送料は小社負担でお取替えいたします。

ISBN978-4-04-621152-1　C0095

本田 透（ほんだ・とおる）
評論家、作家。1969生まれ。高校を中退後、大学検定を経て早稲田大学入学。出版社勤務を経てフリーとなる。著書に評論として『電波男』（三才ブックス）、『喪男【モダン】の哲学史』（講談社）、『自殺するなら、引きこもれ』（共著・光文社）、小説に『イマジン秘蹟【サクラメント】』（角川書店）、『円卓生徒会』（集英社）などがある。